福

女源氏教訓

男女寿文

新圖 文正

目録

女源氏教訓鑑

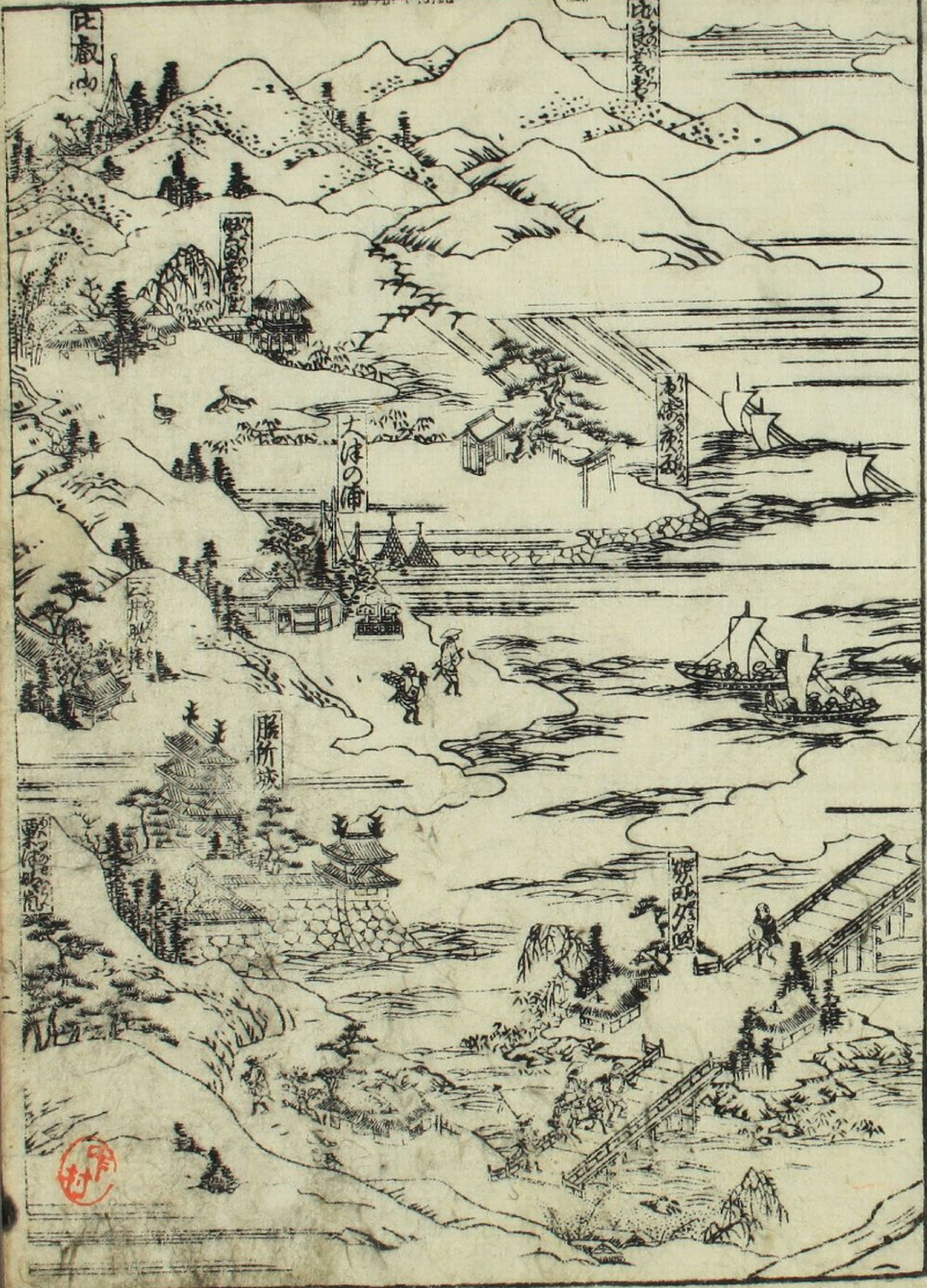
一源氏六十帖注釈
一同歌五十四首
一石山近江八景
一唐土瀟湘八景
一[illegible]
一女一代身持鑑
一古今女筆文大家
一一休和尚いろは歌
一女中之一生記
一女中礼儀教訓鑑
一女教訓宝づくし
一七小町之[illegible]
一色紙短冊之式法
一祇園祭礼山鉾[illegible]
一女諸教訓之絵抄
一四季之画

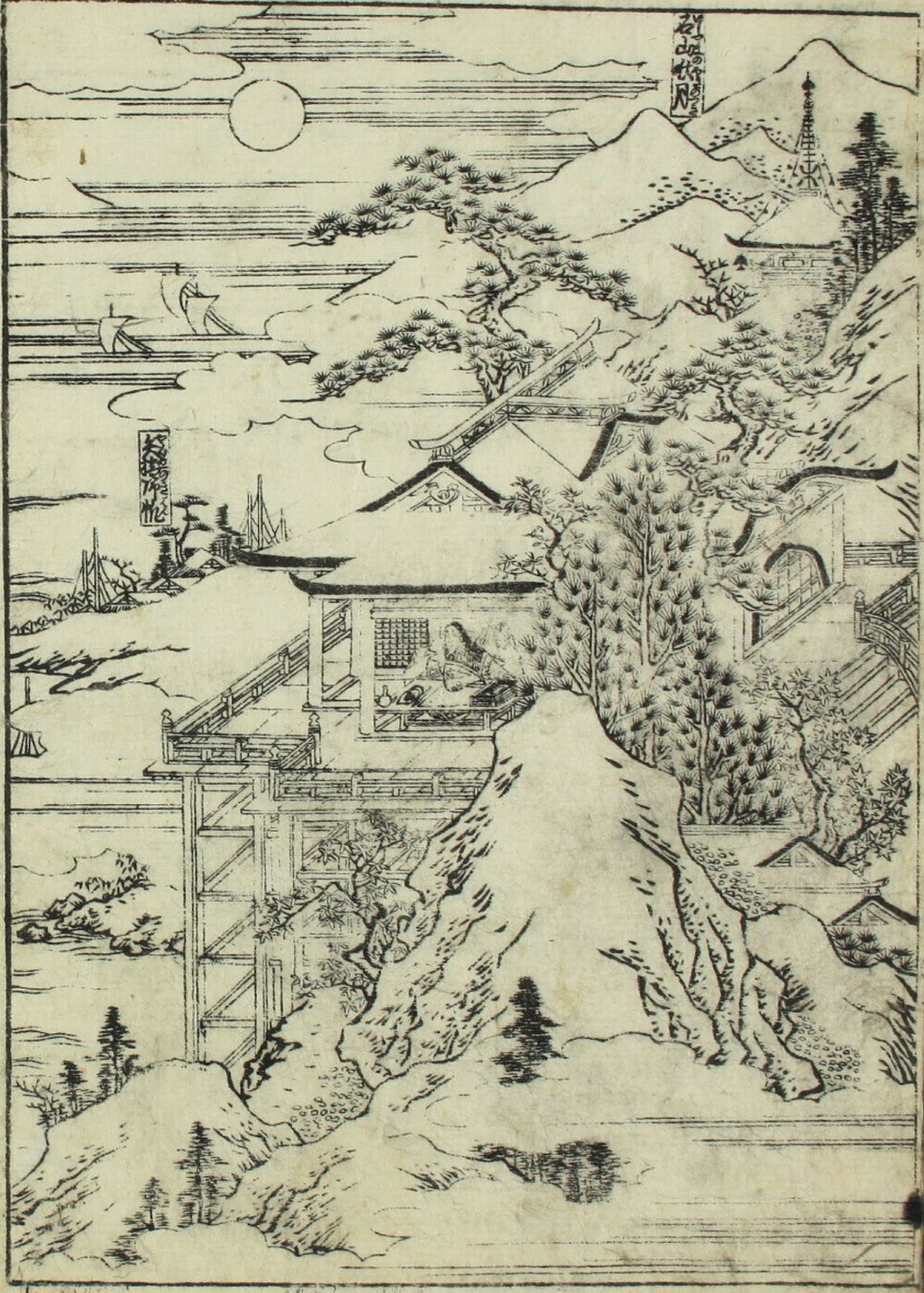
一三十六人歌仙絵抄
一年中行事
一[illegible]
一香之記[illegible]
一掛香白粉之法
一琴三味線之事
一琵琶箏笛之記
一双六囲碁之事
一七夕詩歌[illegible]
一女[illegible]
一諸病之妙薬方付
一[illegible]
一[illegible]料理指南
一有馬温泉之記
一同 [illegible]の記
一[illegible]

一[illegible]
一[illegible]
一女中[illegible]画
一人々一代守り本尊
一女中[illegible]仕付
一こゝろの中しん
一同 [illegible]之事
一不成就日の事
一小笠原流折形
一源氏之[illegible]系図
一源氏六十帖図[illegible]
一同 [illegible]帖之大全
一官位装束の名抄
一歌の詠み方之事
一同 [illegible]之伝授
一源氏[illegible]の大全

源氏哥五十四首

石山 近江八景





唐土八景

遠浦帰帆

風むかふ雲のうき浪たつと見て釣せぬさきにかへる舟人

江天暮雪

芦の葉よかゝれる雪もぬる夕江のみぎはの舟もよるともし

山市晴嵐

暮さそふ里より上の峯それて嵐はしづむ山かけの空

瀟湘夜雨

船よする瀬よしほなきさ秋の夜の窓よりくだるちづく雨ぞしる

瀟湘八景

洞庭秋月

秋にもむすはましくさよ露てく月を釣する出川しら浪

遠寺晩鐘

暮るゝ江の寺より洩るゝ鐘の音に遠方人もみちいそぐなり

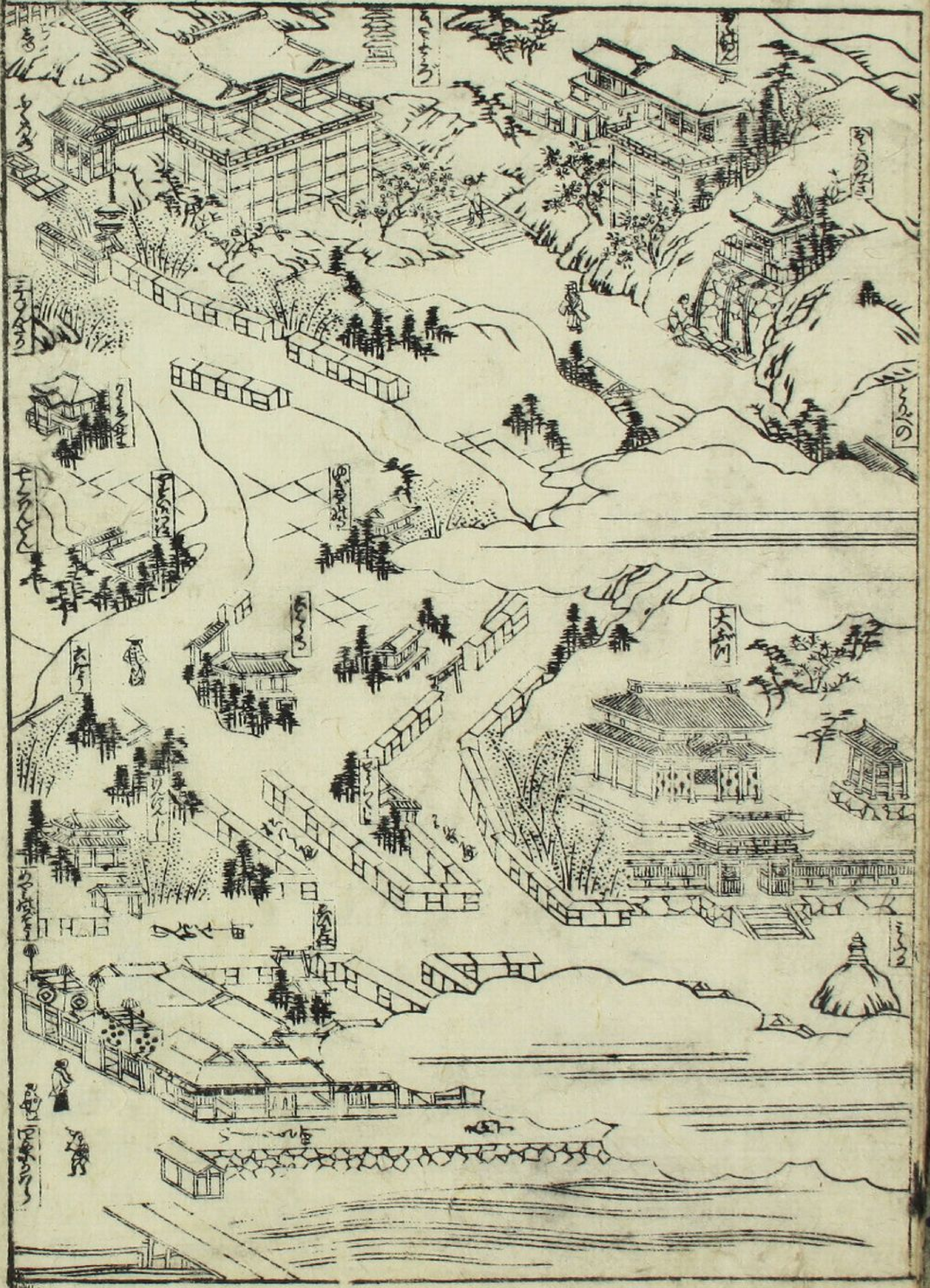
漁村夕照

浪の上や夕日の沖より帰て磯際ちかくまぐれの里

平沙落雁

すみわたる川への友にさそはれて空ゆく雁もまきくだるなり

洛陽東



山之図

女不断用持鑑

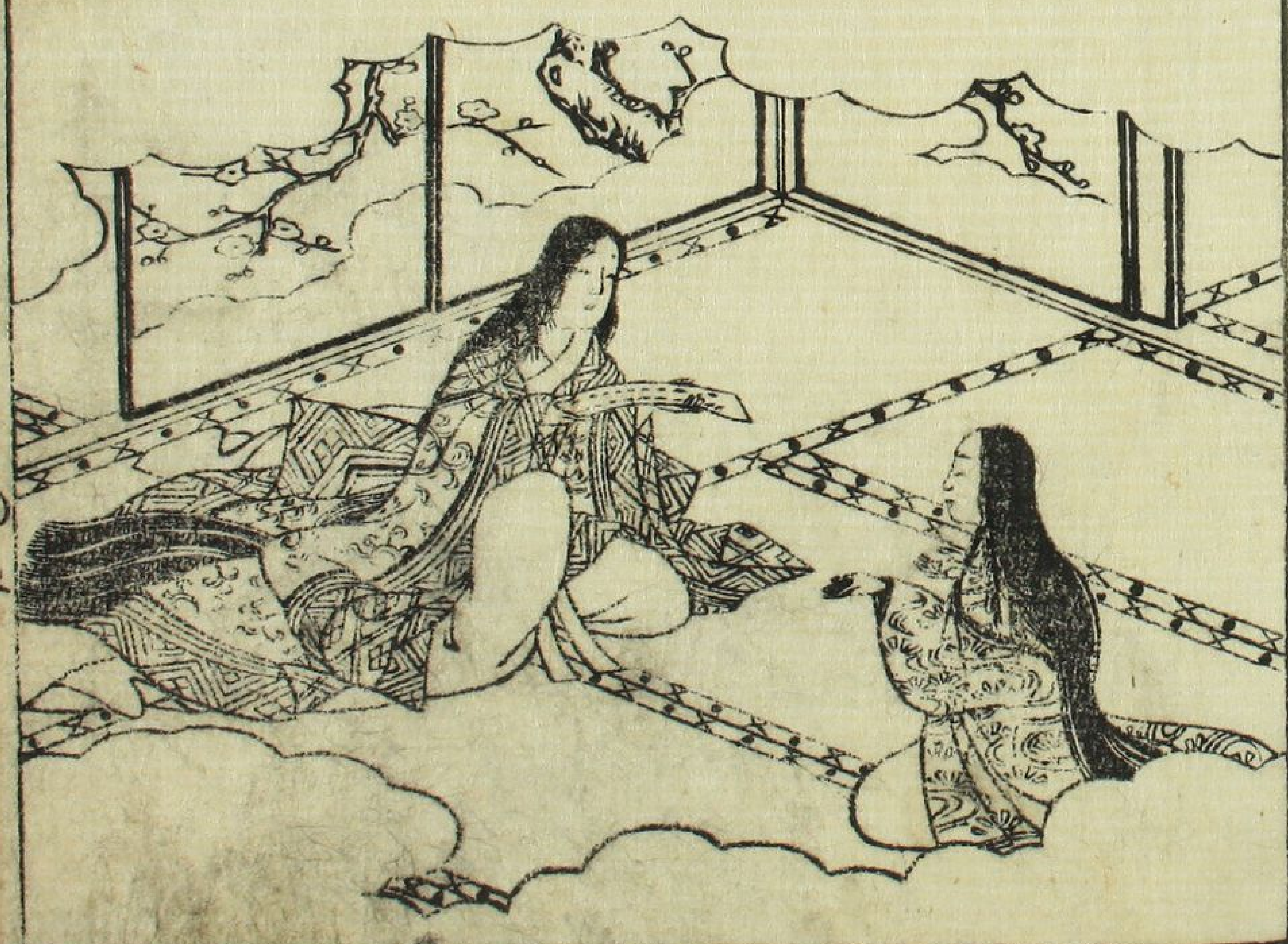
○紫式部[illegible]

それ〳〵の風俗に似合[illegible]

女の[illegible]

[illegible]

本朝女中和文八大家



○眉[illegible]

[illegible]

一休和尚以呂波歌

い
いろはくゝ わきのとく これぞふかう わきとて むかさかれ[illegible]

ろ
ろくありし 人とわきとまうせ てそや かいけも まかいふせん

は
はやさね[illegible] わきのま[illegible] わ[illegible]

に
にひてし[illegible] むかさくふ うまかわりせん

ほ
ほうそとの ひいらかやく [illegible]

へ
へそも つてねど ひうれ 今[illegible] いきかける

と
とこれも ころりのも すつる [illegible] 月なれど

ち
ちりもみ むつれ かいも [illegible] ふりきまれ

○伊勢ハ大和守継蔭の女 寛平法皇の御息所 [illegible] 親王の母 いせ[illegible]

○詞花集 正月朔日 [illegible]

り
つれまゝひ むとむ せいが る りせれかり 人の[illegible] うせぞくさ

ぬ
ぬくとも わがいらん すりどうそ さらまば ふれ ひの人の

る
るりめすあ さんごの むる くぶけ わまとり [illegible]

を
をかくすれ たくの ゆわ さらそ うまれぬ あの[illegible]の

わ
わこゝせんを かりけも おりもど [illegible] めろ [illegible]

か
かうそすて たまとう けくへ のうらら [illegible]

よ
よのすの そうて かまれ とも [illegible]

た
たまとうと ちり人り せん さくとの たまり さるん の[illegible]ず

○紫式部は越前守為時の女 上東門院に仕へ [illegible]

○拾遺集 法師の扇を [illegible] 少将

れ

[illegible]

つ

月も[illegible]

な

[illegible]

ひ

ひとつ[illegible]

ろ

[illegible]

ね

[illegible]

ら

らく[illegible]

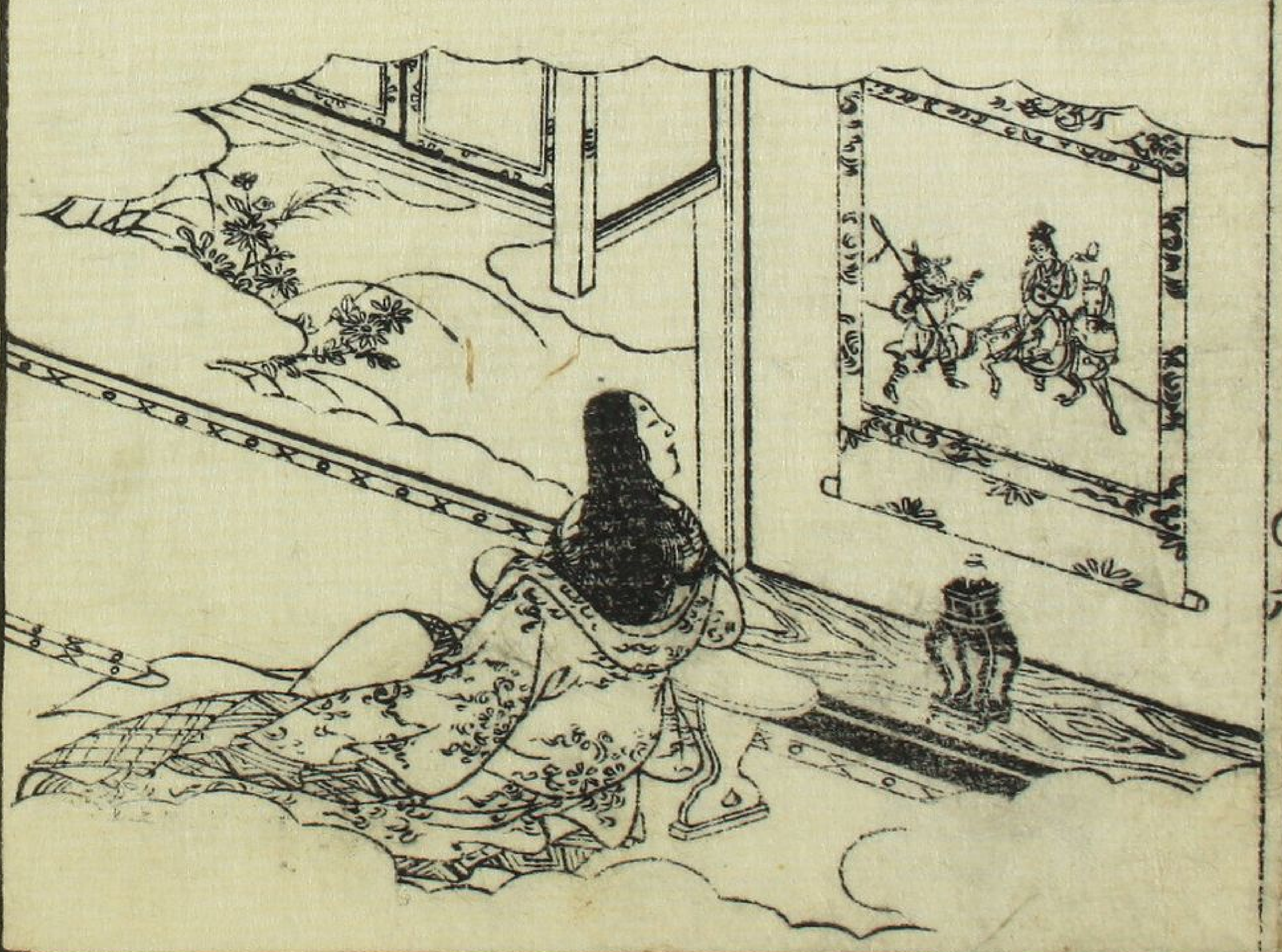
う

[illegible]

赤染衛門は大和守赤染時用が女なり 実ハ平兼盛が女なりしが 母と離別ののち時用が家をつぎ[illegible] 大江匡衡の室[illegible]

○後拾遺集 王昭君をよめる

なげきこし みちの つゆにも まさりけり なれにし里を こふるなみだは



ぬ

[illegible]

れ

[illegible]

や

[illegible]

け

[illegible]

の

[illegible]

く

[illegible]

ま

[illegible]

ふ

[illegible]

大弐三位は藤原宣孝のむすめ 母は紫式部[illegible] 大弐三位と号す[illegible]

○千載集

[illegible]

こ [illegible]

て [illegible]

さ [illegible]

ゆ [illegible]

ゑ [illegible]

わ [illegible]

き [illegible]

め [illegible]

[illegible] 三人の内 [illegible] ○ [illegible]

み [illegible]

ゑ [illegible]

も [illegible]

す [illegible]

し [illegible]

ひ [illegible]

せ [illegible]

京 [illegible]

[illegible]

聟入

[illegible]

祝言之盃

[illegible]

嫁入

[illegible]

新枕

[illegible]

懐妊之祝

[illegible]

子之髪置

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女風俗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

教訓図

[illegible]

[illegible]

[illegible]

碁よりて碁家などいふまでもなく女のあまり
まくらじといふことをおもひわびいかやうの
あはせみなされあそばすものさびしき事のみ

おりふしのたのしみも
のあはれさをしる
ものとてもなけれ
をほかにわたれ
てとかくなじみ
者一身ゆゑ
うつくしき
のよろこびも
うまれつき

りんきは女のさんさい嫉妬はふかきことにてりんきは
きこえんどきこえてもおもひはいかにふかき
りんきはいふかいなきものなりといふゆへに

よろしからず
さやうなる
しらぬとも
ふく嫉妬
がましきそれ
あさましきの
ならぬ
とんでもなく
おもひしがる
ひとちがひ

繁昌して女の風俗あしくなりゆくにしたがひ
くらゐかたちもいやしくなりて
すこしのことにもはぢらひもなく

さくらの花
すそを引
くるまに
ありしが
ひとびと
そでをひき
またこの
ほかのいろ
こなたへ
わかれし

風呂屋の女風俗茶屋におなじく
へんてつの女のまくらとりもち
身をもちくずしていかなるかた

ふるきことを
をみなもとに
うつしそめて
めかけ町の
あかしも
てらしたる
おしくも
こころへなる
つとめ
するなり

山乃神とは奥方の異名なり愚かにも夫のいふことを聞かずおのれが心のまゝにふるまひ
たゞわがまゝをいふて女房の身にあるまじきことを
なすといふ女の心ばへいかにもよろしからず

嫉妬ともまたいふ悋気ふかく常にあらそひおこ
わがまゝなる心をもちてかたくなにすまひ
ともにいさかひあそぶはまことにあさましき

とくていふ
女房いまだかつて
夫をのけものに
もしあれ
いひまはし
またものいひ
ろうかまへ
ひとをそしり
こうすることそ
女のならひ

をかしきの
わせみなされ
とうちいれ
さんざん
うちて
まゐらせ
あさまし
とそく
きられたり
りーや

山の神のくらの風俗をみるに
かへりて身のほどもしらぬ

山乃神後妻打のこともあるべきとて
比丘尼のむかし車にのりてまゐる
のかたちそのかみの神社にまゐる

かくさきの
むかしの
さかりの
ゆかしき
ありさまを
くらべて
おもしろき
ふうぞく

てんさい悪
居あらはれ神
むかしのうせ
のころの
まへのよ
のゆめ
かへらぬ
いまはむかし
くのたから
おもしろき涙

忠孝五歌之圖

女教訓寶草

女一代の身をおさめ家をとゝのへ万のことわざをしるしたる[illegible]

▲女ふち[illegible]なる賢にしたがつく[illegible]わる者[illegible]つけば[illegible]

ちゐさきより[illegible]よく[illegible]付ば[illegible]付なり[illegible]

[illegible]

▲親ハ[illegible]孝行とはいふべし。孝ハ百行の[illegible]なり[illegible]

[illegible]我親[illegible]孝行の[illegible]

[illegible]父母の恩ハ大海よりもふかく須弥山よりも高し[illegible]

[illegible]一生の[illegible]

▲妻女のみち[illegible]されど國ほろび家やぶるゝ事[illegible]前よりも[illegible]

[illegible]夫の家に[illegible]舅姑の[illegible]

▲[illegible]夫[illegible]家の[illegible]

▲一同ふ孝行なれども[illegible]

▲女の性ハ[illegible]

[illegible]女の性ハ[illegible]女もつとも[illegible]

▲一世間の心遣ひて親の若輩ありべし。人ハ良友よ勇の若輩にてもゆく
志あるべし。かりにも人をうらむる事わりんハ故にて互の心遣で遊さばかり
人ハ世の交を結ぶ療治とささらかにてして又何ぞと思ふ心ざしの深き子孫の
為にもあるべく候。極なる表あんとあるで我いかんすべれるとそ思ふべく
ゆへく常に志をしこ是御じゆる事べし。家を繁栄なるべしとまで主として若き
ろうく。すゞしれそろへまことの事かいにて我かたぶくもちの人をずんず我まり
給ふるなりなからハおもく志をふうべし。気のなるのにつくを引べきにものなり
▲親の子をわくるハ心の志のとく又わさも道中に心の志の心をのたうし
ゆへ気にてハ医者と治し家道とも立せずして藝術て治べくして商道からハ
心まけるでも老いての後ハ楽しまく無芸なる者ハ末の身の上の事なす
商家に生れてはせんと云ひく耳さへ難くとくのせぞ又一切の金銀のみはならず又
能をやぶりて一代の無芸者となり。武ハその死をもりまり候者ハおのずから
よって知ぬ無芸を徳ハ家にありのんとて地をもて救ひ又芸能ハ身の為にく
恥をとりこさまで事と世をもて親の一生楽しとすべし又先祖の名をもてし
思ひく親でも窮しく我力も不足なく富みてまもなかりけっすべし
▲民のさる用をなされよく人ののりくれハよりしぬすなく開きて行きたその
うちそなけらく例をもて人ハ身ひとつの一切にて家をまたふ
ありし身をとりて心をとめ川かなりしほまりの情をおこりて何といい
やしき事ハひの為の不善なし。人中にハまいる事ハ大切のねとく我をつて
志とく人にも害れもよくへし。又人ハりと是れに礼にわする事ハ心に結びの父

▲富貴なる人ハよけの他へうかりて拘られど人のかへりてあるぞやすくなり。
家よりりハ拘くされ先祖の人金欲ふりく他よりハ悩乏のうゆへく利
銭とれへまでも人ハ一銭も得とことさずとすりて損わり。わかうなにわたぶ
志らく富る時ハわやうくして永く子孫にぞ居るあり。家ハふ志さりひて
人へりのでとかどをぞ人のあくひつけて殺く拘く富ても益無なけまいで
人ハらてもかへりてふくそてる家。自然に滅らうふう永別ゆるむし
▲富貴なる人我ちの親孔のるゆへハ贈扶なるてハゆゆくりへりて後ふあるま人
大勢ふふく行より先にそくし不至すりかなし。どへ親とりてのそうりくべし
家富みまして貧賤親子のあうりかみ疎ろくさしく終を立せり。大きく成のゆうり
なり御手本なくりてまより御んやらの礼を者への道とやすまらかさ嫁ゆえ
▲老人より贈る物とハ辞退せずして戴くべし。返をハ礼にわくるとりて下より
上ひすりゆハ位ところのてはうふとうしとすべし。我と同じゆうふ心へ人と
親ふ物がさりはさるハ嫌らのべこまさるうの人かつまで当れハ多くハ危れ
わへざるゆへと古合わら遠てねゆうかと向ひ居ちんハ部りうわるのあれ
ものられおとりて機をもし取入りしも書を表とひらわせてかもねてヽんるを
なと志りてそこ由ゆりらかさに所感ろてんを帰りまうるちやとも時ててやりし
なぐる道るなをとうめ返ひくりわてくちぎきりさうく花そのむ地めへてと
▲一人ハ酒と表る呑ずするうのようしぬ他気にし栩を蜜まおられはく飲へハ緑
めぐしくる事しこ又ハ人の目わひとなくれて人と去くり盃ハ如くにて
とくへく気をふ表る呑せぬまでよろうしさ人も包れの一ばうくとめく

又息災なる人も同じ。およそ天下の病者とかく善悪ならずして、ふき坊主の酒もりなど、かくいはまく食すゆへに、頭いたく、やくにたゝず。とかく人は胃の気を本として、養生をわすれず、病のもとをしるべし。

▲人より病をすゝむる時は、わざとすゝめず、せくにわざと食すゝむるは、それよりも恩あつく、能いふべし。

▲万の物十分なれども、食するは七八分にして、留べし。

▲食は口にうまく、胃にたくさんなれば、病おこるものなり。後にはやむ事なし。

▲合はつゝしむべし。胃の腑をやぶり、五臓の毒となる。たとへば山椒と蕎麦、一切の物とくはせて、ねぢて能見るべし。

▲上手の医者のわざも、毒のあらさも同じ。おのれがかゞみて、その病をしり、わが身をやしなふべし。

▲我身のわざといふは、わが家の暇を付べし。家の内のわざと、又我いふことを、それぞれにしるべし。

▲欲とそれて世の中に後の事をなすべし。一切の事をやめ、食に入ことなし。

▲欲と志しなすべし。ねがふ事は、一切の事を身にうけて、ふかく慎むべし。

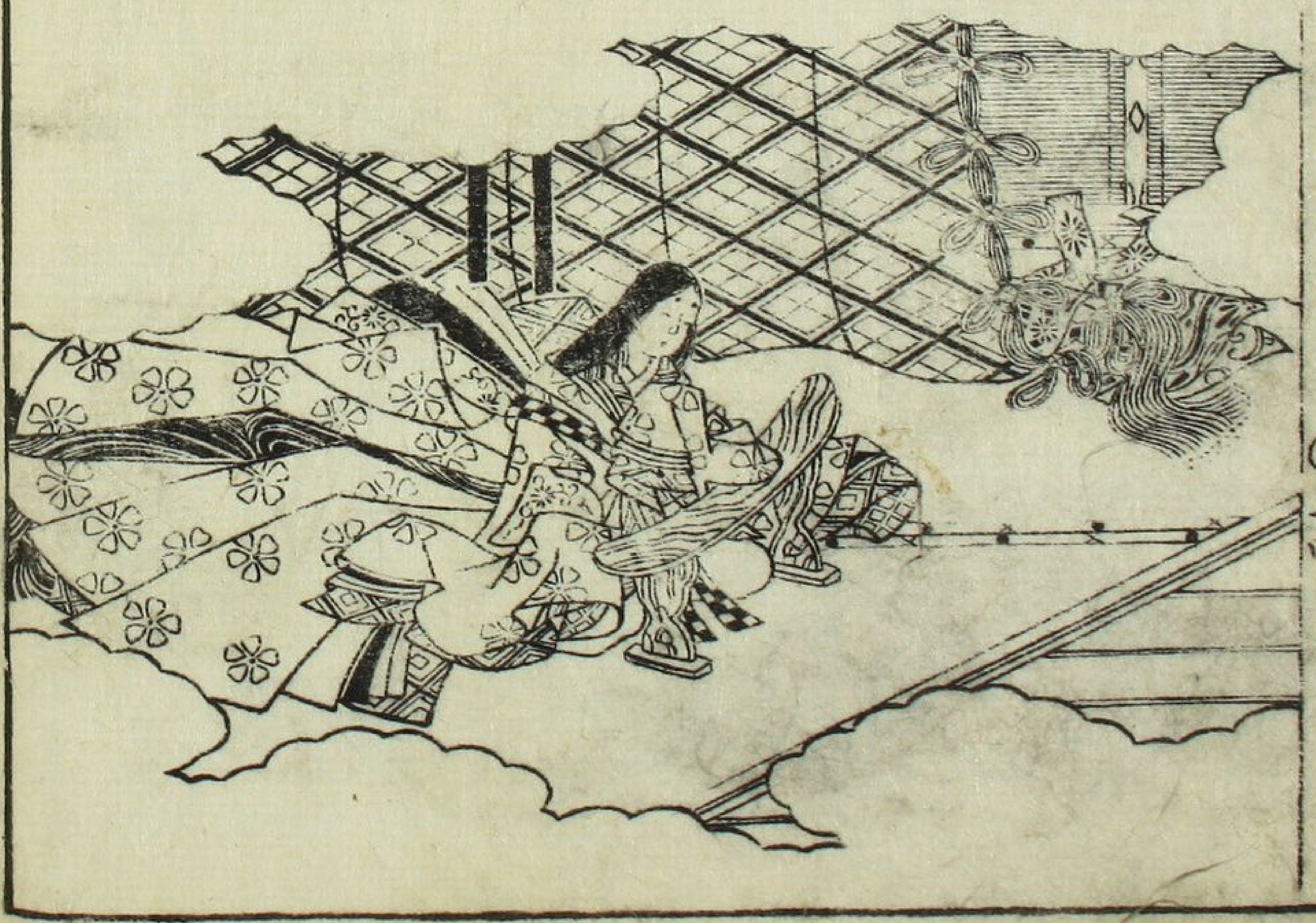
▲孝の道は、親につかへ、わが身をたてゝ、父母の名をあらはす事なり。

▲孝者の子の道をよくつとめて、仏法の事をもしるべし。

小野小町一代史末 七小町物語

〇さうしあらひ〇そとば小町〇あまごひ小町〇あふむ小町〇かよひ小町〇せきでら小町〇きよみづ小町

小町ハ小野良実がむすめぞかし。仁明天皇の御宇にて、たぐひなき容色のほまれありて、代々みかどの御心をかけ給ひしより、小町が名を世にしられ、天皇これを召して采女となし給ふ。ゆゑに小町ハうつくしさいろよりもすぐれたるのみならず、和歌の道にも心をよせ、つねに筆をとりて世上第一の美人なりとて、あまたの人心をつくしけれども、小町ハこれに心をうつさず。されば歌ハ古今集の序にも、小町が歌はあはれなるやうにて、つよからず、いはゞよき女のなやめる所あるに似たり、とかや。右のほかに小町が歌の名高きこと、世にかくれなし。



草紙洗小町

むかし大内裏にて歌合ありけるに、小町の相手ハ大友黒主とさだめられ、小町に負じと黒主ハ小町がもとへ忍び行てたちぎきけるに、小町ハ明日の歌を詠じけるを黒主聞て、これを草紙に書入て、みかどの御前にて小町が歌ハ古歌なりとうつたへける。小町これをなげき、その草紙を水にて洗ひければ、書入たる文字ハきえて、もとの草紙となりぬ。黒主ハはぢて自害せんとしけるを、小町これをとゞめ、つゐに和歌の道を学びけるとなり。

雨(あま)ごひ小町

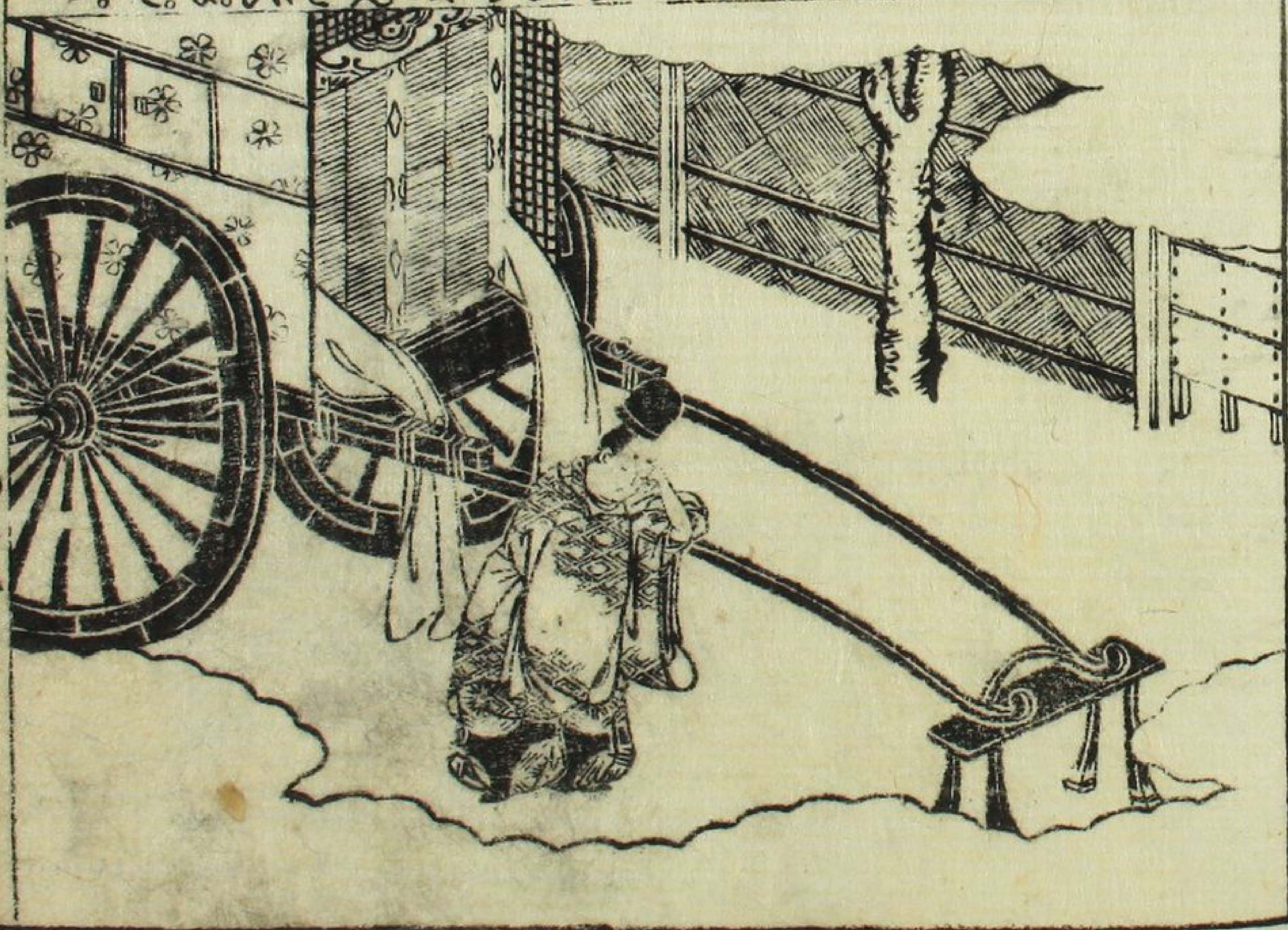
紀貫之(きのつらゆき)の古今(こきん)和序(わじよ)にいにしへの衣通姫(そとほりひめ)の流(りう)なりとのせられたり小町ハその中乃一人(ひとり)にて殊(こと)にめでたきことしおかしき天下大(おほ)ひでりにて三ケ月が間(あひだ)雨ふらずして祭りしうばい民(たみ)のなげくさまもこれならず君(きみ)も心(こゝろ)をなやまし給(たま)ひてさまざまのれいじんの祈(いのり)あれど更(さら)にしるしなかりければ止(やむ)ことを得(え)ず小町に勅(ちよく)して神泉苑(しんせんゑん)にて和歌(わか)を詠(よみ)て雨をこはしめられけるに小町のぞむところなりとて小町ハ神泉苑に出(いで)られひとまづこのみぎりを定(さだ)めて参詣(さんけい)のともがらゆうかうの声(こゑ)をさゝげしんせん苑の池(いけ)の汀(みぎは)にて礼拝(らいはい)をなして歌をよみ奉(たてまつ)る

(歌)ことわりや日のもとならば照(てり)もせめさりとてハ又天(あめ)が下(した)とハ

と詠(えい)ぜられければ不思議(ふしぎ)やそらくもりて天神地祇(てんじんちぎ)のれんみんをやうけ給ひけん忽(たちまち)大雨(おほあめ)ふりて三日三夜(や)おやみなくふりければ久しく照(てり)つゞきたる国土(こくど)うるほひて草木(さうもく)ことごとくよみがへりけり民(たみ)の歎(なげき)もやみてよろこぶ事かぎりなし是(これ)小町が和歌(わか)の徳(とく)にて神(しん)明(めい)も感(かん)じ給ふと申(まうし)つたへけるなり

かよひ小町

小町ハ顔色(がんしよく)うるはしく心(こゝろ)ざまやさしく花の色(いろ)にもおとらぬ事なれば雲(くも)の上人(うへびと)もみな心をかけさせ給ふ中に深草(ふかくさ)の少将(せうしやう)と申人(まうすひと)ふかく思(おも)ひをかけて文(ふみ)をおくり給へども小町さらに返事(へんじ)もせず少将せめて百夜(もゝよ)かよひ給はゞ御心(みこゝろ)にしたがひ申さんとありければ少将よろこびて雨(あめ)の夜(よ)も雪(ゆき)の夜(よ)もいとはず車(くるま)のしぢに百夜(もゝよ)通(かよ)ひの数(かず)をしるしてかよひ給ひしが九十九夜(や)めにあたりける夜(よ)少将俄(にはか)にやみつきてむなしくなり給ひけるとぞ月日(つきひ)へて後(のち)小町つたへきゝてあはれに思ひ袖(そで)をしぼりけるとなん



関寺小町

業ところは世のなかのひに住かねて縁のむかしは花の身よりつもりて縁の末とねがはくはあつく関寺のきさふかくふかきやとたつひ住ならぬ小町といふもふかくなりしまへの七夕せきでらの住僧ちごをともなひてひがしよさむけの家とかそのなかのいで女は身にたへとさあめたちよりとむかしのことをたづねければ小町は老をもようねうりやうされてもつぶしてまひのそれでおのれありまうしとんじて神代より歌のみちにはわきまへありとの歌のはじめは父母なりしよしやかれで僧達へんじて女の歌はかまへなるふうぞく女のかうへのためにつくさんとあそばすが偏ならそ ㊀ 我ぜこうくべきなりさくてかのぐされふうまひ○てたつしもじらへをとあと○とかぎれば小町昔へてすでにて衣通姫のながれをくむとかやいふと僧達はげにもそぶりて小町はて衣通姫のながれはなげきまた先はふしぎのことやといひ ㊀ 僧めきまへ我ぞとさ歌よみ給ひてそれはかみつくべきものとおもひいへどもおのれもまこと三河のちかをして下りし時田舎にてもとよりさめよいとし我とはいひ給ふと歌をいひしらんそれで僧はおちなき僧めまでの歌を歌よみさうとあり歌小町はそのあとわつ、ところの苦たびけのぶくとすさまへてそして人びとのぞうしくなり

そとは小町

小まち百とせのうばとなりて都らくおはら山のほとりにまよひ出うし僧のおちりれもいふひとしえりへよりのとち命さへつかぐたなりしそおりのれのなれなりすがたのひぢかたらさおかはまてさ蔵と入てくけぶたのぬれおれさの笠ともちぞふつのふくろまれ朝夕食の主給と入てゆもくし猿かふつのふくろよおづつさくら衣と入てかはひれ之の中まれ田の中なりくつへと捨ひもち乃とたちりてゆかるをそりかず月入ころなり卒都婆の稀にふれらのふかくと折りもてやすらひけるおりて高野山の僧とてもり合せ是をみえて仏躰とささめるそとはふうしけれどそのゆとくねてうけまりくのけぞ中まえよりておとなえるがひてんのおのやよ体のは見ハ赤くも仏のすがたと写てうらへそとしとまえれば小町それをへの形のつらくと書くらひも地水火風空の姿とわくれせるといふはされと僧のきまに仏躰と為るさらるれば歌もつぶそての主会とも本覚ままつかいぬ仏の天地とはかまふとさくらまへんれで僧めは大きに小野をご供と随ひ命の姫へんしそれは地の村と会て三度礼拝なすめしへのうきとれてすまし向ひへは家は小野と小町そそはいせいのみれは僧のうけやとそむかうすまれ蒙をうくそこのあまへなつくなる

㊀ 極楽の中なるこそ嬉しからへあぞとなきこへつかへぐべ歩

あふむ小町

陽成院のみかどのれいぜいゐんにおはしま
しけるとき、このまへにて御哥をつかはし
かうして哥よみのきこへありしおきなをめして
られしも、いまだこれを詠よみ給ふにや、そも
また小野小町ハ百とせ乃よはひとなりて実なるのちハ
あはれに、さすらへ、あさましきすがたにてその
なりけるを、おりしもさるかたへ御使をつかはし給ひ
とめぐりこれを関寺のあたりにてたづねあて
よりてかくさまざまの御哥を下されしとぞ。
ちかくは小町のむかしをおもひ出しての御哥にて
雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれのうちやゆかしき
小町あやしくてこれのかはりにもちひしはあまた
ちりの御字を一字かへて返哥とせられし
返 雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれのうちぞゆかしき
とよみてさしあげけるとぞ。そのとき百まで
とつねならず、あはれなる事なり。この返哥はや
鸚鵡の一字をかへてかへせしかば、この哥を
ある人これを小町があふむ返しといひて
へしもやすく、ひとつのことばをかへしてその
道をつたへとぞ。このゆへにあふむ小町と名付
あはれなる事どもなり。

清水小町

小町ハかくていく程なく世をさりて、
陸奥出羽のかたにさすらひ、或時清水寺にまうでて
ちかくの人々にあひて、その夜ハ清水にこもり
てありしに、僧正遍昭もそのよ清水に通夜せられ
しが、小町と聞て、
何とてか、岩のうへに旅ねをすればいとさむし苔の衣を我にかさなん
とよみければ、小町
世をそむく苔の衣はたゞ一重かさねばうとしいざ二人ねん
とよみてかへせし。これより遍昭と小町とはねんごろの
中となりて、たがひに道をかたりあひけるとぞ。
されば小町のうたのさま、あはれなるやうにて
つよからず、よき女のなやめるところあるに似たり。
遍昭ハ哥のさまはえたれどもまことすくなし。
小町の哥をみて、わが身のほどもしらるべしとて
それぞれ二人ながら道をもとめ、みちをまもるべし
ことはりにもかなひぬべし。小町のつゐ
のすみかは、いづこともしれずとかや。
小町が一生の事、ひとへに哥によりてなだかし
といふ、かくて小町の哥ハ古今集に入
いく人のこゝろをもなぐさめしとぞ。
小野小町は出羽の郡司良真が女にて
ありしとかや。そのむかしのほど、まことに
とびさりて、いまにそのなをのこせり。

色紙短冊之書法 同寸法

竪 大六寸四分 小六寸
横 大五寸六分 小五寸

凡色紙の書やうハ三光院殿御説く

○凡短冊の寸法ハ二寸也 長さ一尺一寸八分
○内裏御製の短冊ハ 一寸九分八分也 長さ一尺一寸六分
○平人短冊ハ一寸八分也 長さ一尺一寸六分一分二厘
△短冊に書時ハ三ツに折て三つ折の上の折目の上二寸ほど明て書出し 題ハ下の句を書て下の句ハ一字あけて書べし 上の句の書と同じ時ハ上の句の書様ハ一字上を

○折目の一字上より書始むべし

かのくと咲る花の錦哉 まかせし筆の跡ぞゆかしき

○詠者名
名の下ハ上の折目ハ一寸ばかり 名ハ上の折めより書べし

我やどに植けん花と思ふらん 松ひとり世にゐ若の松 某

ゑ代

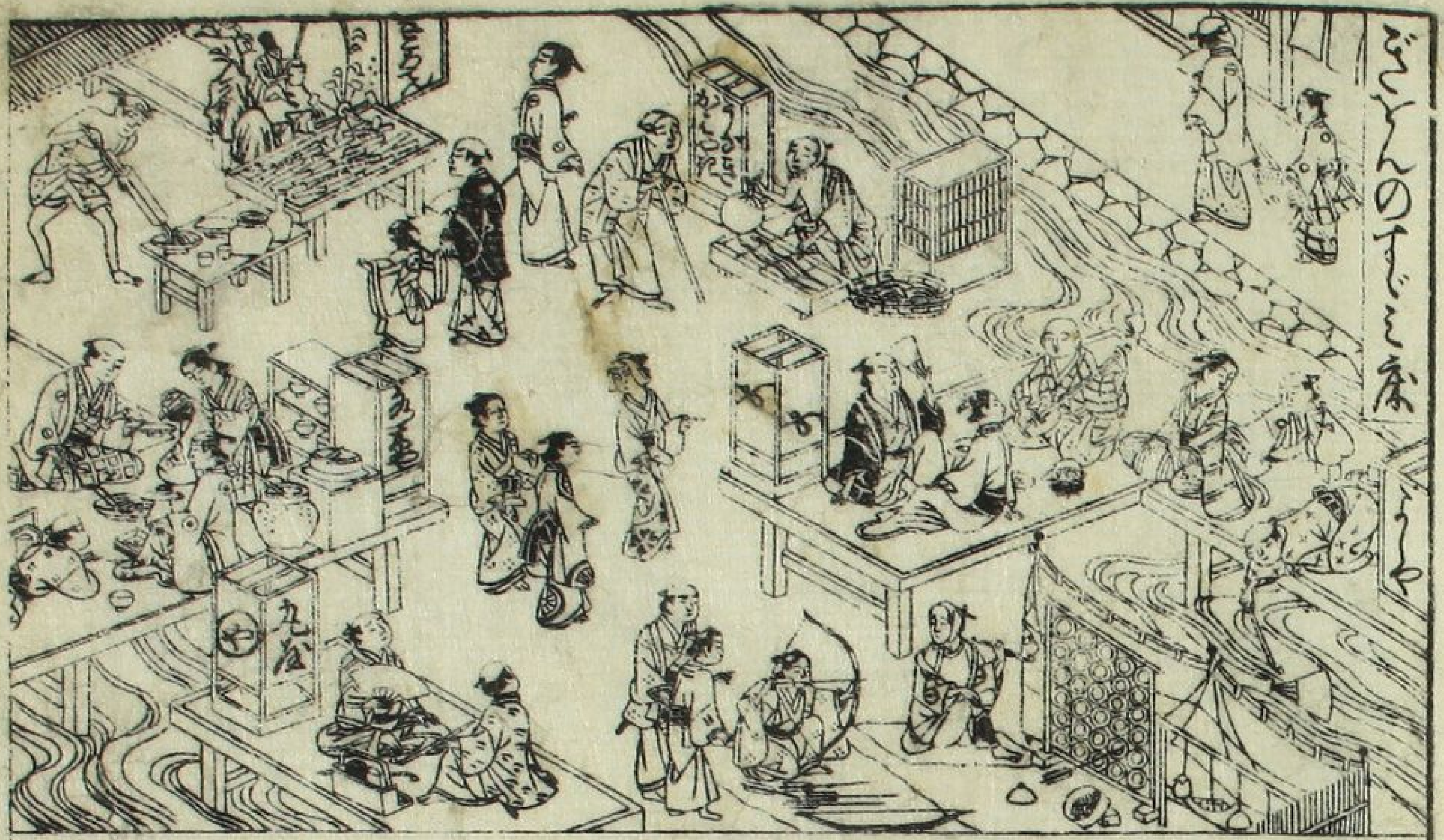
源氏六十帖目録

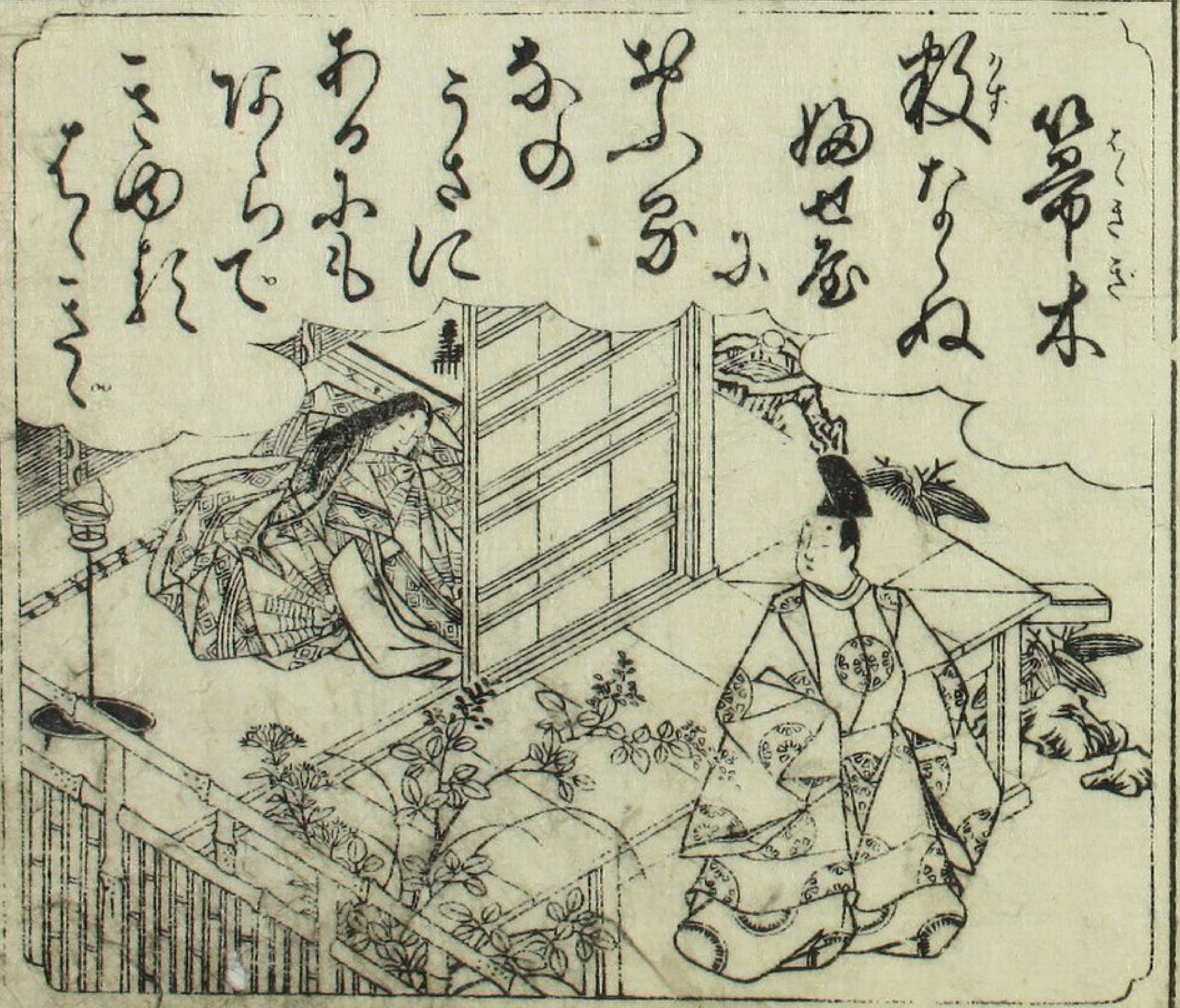
卅二ケ条 五十四首

きりつぼ
はゝき木
空せミ
夕がほ
若むらさき
末つむ花
紅葉の賀
花のえん
あふひ
さかき
花ちる里
須广
あかし
みをつくし
よもぎふ
せきや
絵あはせ
松かぜ
うす雲
朝がほ
少女
玉かづら
はつね
こてふ
ほたる
とこなつ
かゞり火
野分
みゆき
藤ばかま
まきばしら
梅がえ
藤のうらば
わかな上
同下之巻
かしは木
よこぶえ
すゞむし
夕ぎり
みのり
まぼろし
匂兵部卿
紅梅
竹かは
はしひめ
志ゐがもと
あげまき
さわらび
やどりぎ
あづまや
うきふね
かげろふ
手ならひ
夢のうき橋
山路の露
けい図
同上
同中の巻
同下の巻
引歌

はゝきゞ

此はゝきゞの巻ハ其の中に名と
なし此巻にて名を定めたり。さるより
つかさは大閤よりの清殿乃名あり。その桐つぼに
ゐまふ更衣なれハこそ桐つぼの更衣とや申し又更衣
とは后にうつぎたる女官にて此女官乃清ねごく
見えしをつぼに清衣とめし乃をまふ。更衣ハ六ろも
かはりて下宮ゆへまなづくらたり。此更衣ハ見るにて
清てうを見あさこうれ。此清らにいて此の御子と
光源氏の御ことにもわ。此君をは更衣とさんをと
乃清てうをわひふかくおもひてひさぐ源氏のうきのれ
まふのちにやく桐壺ひてついよかくれあふし又源氏
十二歳の清とし清元服ましくそ。たゞ左大臣の
御むすめあふひ乃うへと清らん出へのまゝまくぐ
わ皇の五乃宮よ。いとなさをつぼくゆひ
すしかごさよ紙ちぎりむかむすひまあ川やつぱ
ひかんぶくの時の髪と紫乃くくりいとまて繼ふ
これとそつねとゆひていふまわなのさまをさひうぐさか
ひとはあふひのうへと思ふひ清そひあし。ふとの君
むすひとめよと云ふこ。源氏十三の歳の清
ゆきしのてにも此ままにとりくあうあゐま





祇園會行列之図

長刀鉾 四条通烏丸の東 東洞院乃西より出る

○此長刀ハ三条小鍛冶宗近が作 其長サ四尺八寸 製す乃人なり。此長刀ハむかしより疫病癰癘の難をさくる時平念をする 忽にさまざまの奇瑞多し 中ごろ絶えて紛失なりしを 法橋和泉守来金道再造 長サ八尺八寸四尺 心回三尺なり 古鉄 納近代 此長刀を作りて用ふる

うつせみ

此巻ハ前の巻とおなじくつゞきにて。光源氏の十六歳夏のことゝ家。中川といふ所の紀伊守の父いよの介といふ人の妻うつせみの君源氏ぞかねてひそかにいよの介が妻うつせみの君乃ゆくへ思ひて逢ひてのち。うつせみの弟小君といふを随従にしてうつせみをつれさせ給ふ。うつせみのきみハさえ身をとらでうれしく逢ひさせまゐらせずその時源氏しのびてやはらかふ。うつせみのむもしらぞそのころうつせみハおやゝなくおとうとの歌此君のむかしハ伊予のすけ信濃の國の境にそのうちうち世にいふ所にありけるをとらふくようつされ。筆などそへてさしつかはして遊でこれをみるにうつせみのかへしハ。かわりさてわすれぬまでいふこともなびハさしあくことあくと思ひくらしわけてきれぞうしろをみとはかなくさらまいまうつせみと見えうしなひさうよふしのむかしうつせみし。かれ身をぬ空蝉の御身の方にわかきもとにこれなくなく。此君ハかれ故にぬまといやしきあされたさまざまうつ西あてはへのおりをきかしこれらくまでつかといへるびたわ

天神山 油小路綾小路 南より出る

○天神ハ菅丞相の御影なり

傘鉾 四条 西洞院の西より出る

○此鉾ハ祭礼と美挑ぶ人着より今にいたるまで村の芸夫おの役なり

太子山 油小路錦の辻乃南より出る

○六角堂のそもそめハ杉なりしを聖徳太子そのこの杉を伐りとりゆゑにこの山に杉をたつる

空蝉

うつせみの身をかへてける木のもとに猶人がらのなつかしきかな

函谷鉾　四条室町乃東へいる町

○此鉾ハもろこしの孟嘗君秦の難をおそれて夜中に函谷関にいたり鶏のまねをして関をひらかせのがれし事なり

木賊山　仏光寺西洞院の東へいる町

○此山ハ謡の木賊によりて作れる山なり

とくさかるその原山の木のまより見ゆる月影

孟宗山　烏丸四条の北へいる町

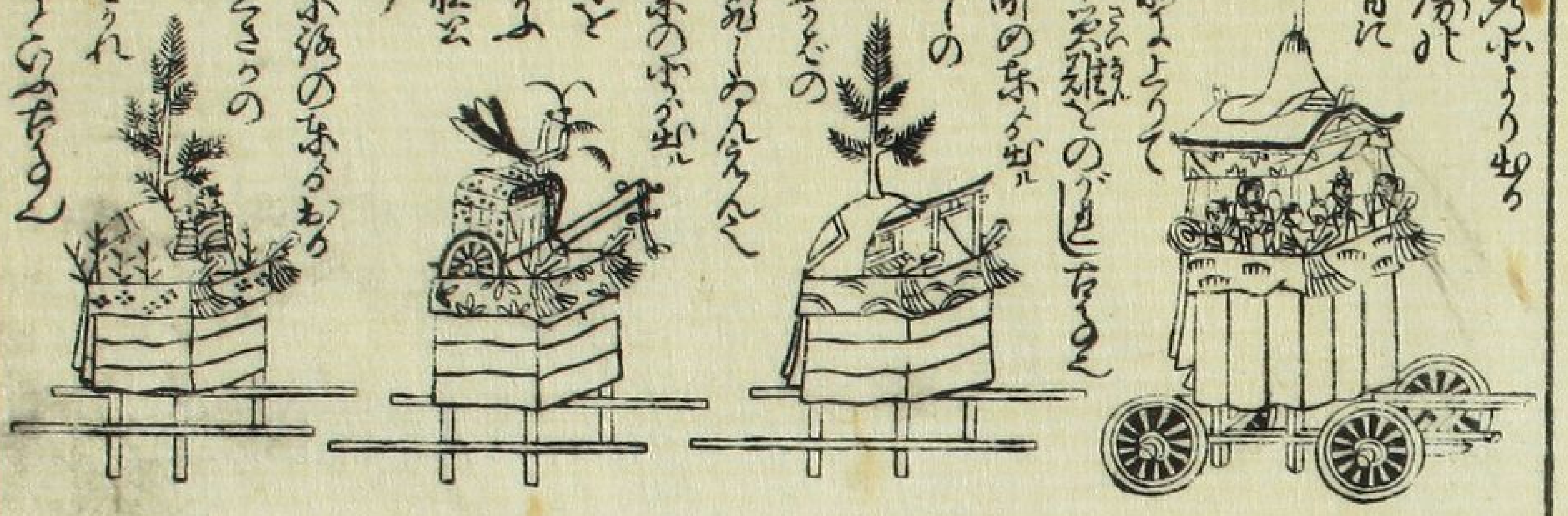
○俗に筍山といふ。此山ハ二十四孝の一人孟宗が母のために雪の中より筍をほり得たる心なり

白楽天山　室町四条の南へいる町

○唐の白楽天と道林禅師と問答の体なり

空蝉　三

此巻ハ前の巻とおなじくわかきころなれバ源氏の十七歳乃夏なるべし。うつせみの君乃つまを紀伊守といふ。その弟の小君をひそかにてなづけて源氏の君ハ紀伊守の家へかよひたまへり。うつせみの君ハ軒端の荻と碁をうちておはしけり。源氏ハかいまみたまひてのちしのびて入たまへバうつせみハきぬをぬぎすべしてにげたまひぬ。源氏ハ軒端の荻とちぎりたまひぬ。そのうつせみの君のぬぎすてたるきぬをもちかへりて。うつせみの身をかへてける木のもとになを人がらのなつかしきかな。此君の心かしこきをめでたまふ。うつせみの羽におく露の木がくれてしのびしのびにぬるる袖かな。かくてうつせみの君ハ紀伊守の妻となりて後ハ尼になりたまへり。



菊水鉾　室町四条乃北へいる町

○此鉾ハ費長房が菊水を九月九日に赤き袋に茱萸を入てひぢにかけて高きにのぼりて菊花の酒を呑て災難をのがれしとなる

霰天神山　錦小路室町の東へいる町

○此山ハ菅丞相にて大宰府におはしましし時霰のふりしことをかたどれるなり

蟷螂山　西洞院四条の北へいる町

○此山ハ蟷螂が斧をもつて立車にむかふごとき荘公のはなしをつくれり

芦刈山　綾小路油小路の東へいる町

○此山ハ芦刈の謡より作れる山にて夫婦わかれてのちふたたびあひたるありさまをうつせり

鶏鉾 四条の南より出る 此鉾 唐土堯乃代よ所わたる出る この太鼓を打べし 王ちうほの民
ゆるぎなき御代を祝ひて とりかぶとをつけ 太鼓を打 ともにまつりのかざりとす

山伏山 室町錦小路より出る ○此山ハ大峯入乃体なり

琴破山 綾小路新町乃西より出る ○此山ハ戴安道王晞が使者よむかって 琴をやぶりし いはれなり

花盗人山 油小路綾小路の小路より出る ○此山ハいはれある事にて 源氏物語の花をぬすみし心なり

夕顔 四

此まきハ歌の詞よりなづく。 源氏の十六歳乃夏より 十月までの事を記せり。源氏六条のみやす所へ 乃かよひたまふ頃、五条わたり を通りたまふ。あやしき家に夕かほ乃花のさき かゝりしを見たまひて、随身して花を 一ふさ折らせたまふに、童の白き扇に花をのせてまいらせ まつる。ひかりそへたる夕がほの花と書たる歌あり。源氏 その宿の主をたづね見たまふ。夕顔ハ 頭中将乃君のかくしおきたまひし女なり。 それより夕顔の花も ひとしほ心をとめて かよひたまひ しのびしのびに かよひてそ うつくしみたまふに、なにがしの院へ つれゆきたまひしに、物のけにおそはれて 夕顔ハ はかなくなりたまふ。源氏 いたく歎き たまふ。 源氏のおもひ、六条乃みやす所の けんなるといへり。 夕顔のうへとよばれし かたりなり。

月鉾 四条新町の東より出る ○此鉾ハ 三日月の月也

傘鉾 綾小路新町の東より出る ○せんたくしれ かさぼこといふ 笠も天竺より伝来

郭巨山 四条西洞院の東より出る ○此山の因縁ハ 郭巨といふ人母を孝 行のあまり金の釜を掘出しけるを かたどりしなり

白楽天山 ○祇園会のかざり こと さらの唐土の詩人なり

放下鉾
新町四条の北より出る
○此鉾ハ放下師の人形あり

岩戸山
新町五条坊門の南より出る
○此山ハ岩戸ハ天照大神そこの岩戸を関させ給ひしかバ天乃岩戸ふ入まふていなり

船鉾
○此鉾ハ神功皇后三韓を攻させ給ひし時乃ふね乃かたちをうつし給ひし乃ちふね乃うへにあまたの人形乃せて乃かせ侍るなり

十四日山之次第

橋弁慶山
四条坊門室町の南より出る
○此山ハ源の牛若丸ひをし弁慶と五条の橋のうへにてたゝかひし形をいづる人形あり

役行者山
室町三条乃北より出る
○此山ハ役小角ぞうさんをかこうてかくれたまひ

黒主山
室町三条の南より出る
○此山ハ大伴の黒主そこの桜をあふぎ山人の花の詠を休めるのといふ

鈴鹿山
烏丸三条乃北より出る
○此山ハすゞかの鬼をかくとい鬼を退治せし人形をつくる

浄妙山
六角烏丸の西より出る
○此山ハ宇治川にて三井寺乃一来法師つゝの筒井浄妙がかぶとの上を乗こゆる形なり

わかむらさき 巻

此巻ハわかむらさきのことをつくりけり。源氏十七歳乃三月より冬乃終まで乃ことをしるせり。源氏おこりやまひをわづらひ給ひ乃ちかごろ乃ことをかしらひ給ひつゝくに。ある乃ちやうわかみをみそかにさうとおもひそめさせ給ひしに。これ紫乃うへ乃ちいさきころなり。僧都のわたり乃孫なり。父ハ兵部卿宮の御子乃めいなり。それより源氏ハ藤つぼと密通ありしことあれバその日よりおぼしなやみ給ふ。歌ありひとへにおもひてすさまじきを乃たまふ。源氏のてにつみていつしかもこの紫乃根にかよひける乃へのわかくさ。此ひと今紫のうへにおさなくいつかおとなしくなりなんとおもひてわかうのにたとへし也。紫乃上ハ右京大夫の娘なり。源氏の御めのとにかくれてかへりたまふ。紫乃うへのこに藤つぼと源氏との中乃御子をわたれで給ふ程にかくれ給ひぬれば乃ちにたよりしも紫乃うへのみをまかせてうつし給へるに。とおほしめしたびたびかよひ給へし

末摘花（すゑつむはな）

なつかしき色ともなしになにゝこの末つむ花をそでにふれけむ

鯉山　室町六角の南へ入ル
○此山ハくわうてんの[illegible]
鯉の[illegible]

八幡山　新町三条の南
○源氏[illegible]
[illegible]

鈴鹿山　新町六角下ル町又円通り
四条坊門下ル町[illegible]町より
[illegible]
○[illegible]の像ハ
二[illegible]の
[illegible]

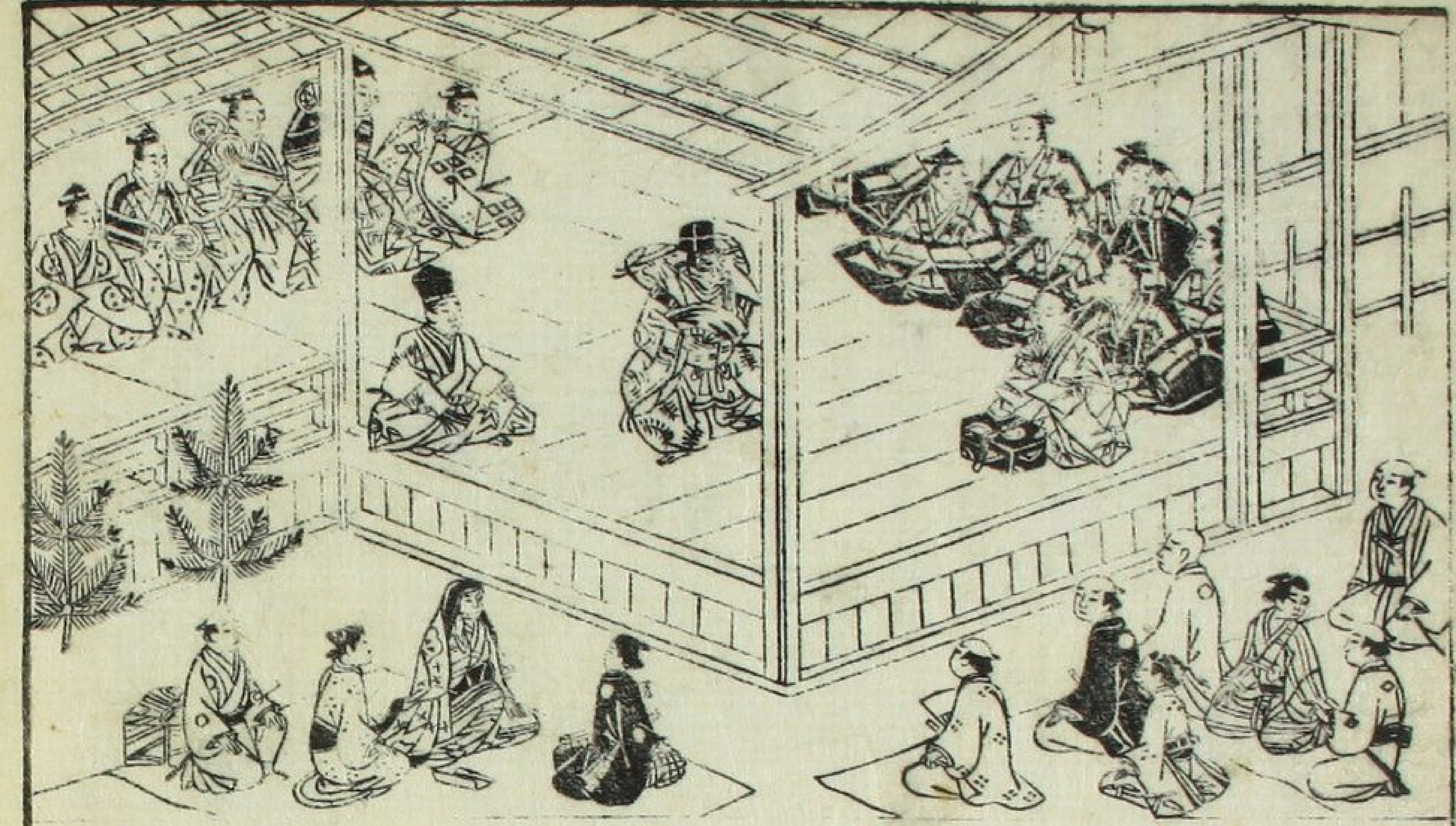
[illegible]山
三条室町の西[illegible]
○此山ハ[illegible]の
[illegible]
[illegible]

末つむ花

此まきハ[illegible]
月[illegible]の二
[illegible]源氏十七歳[illegible]
[illegible]
[illegible]源氏[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ゆへに源氏の[illegible]
[illegible]末つむ花と[illegible]
まつむ花ハ[illegible]の花にて[illegible]つむ[illegible]
[illegible]の花に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]源氏[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

舟鉾　新町四条の南より[illegible]
七日[illegible]
○此舟鉾[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

▲祇園会[illegible]ハ鉾[illegible]山[illegible]
[illegible]近世[illegible]小山鉾[illegible]
三十四日[illegible]山十[illegible]三十三[illegible]
[illegible]
十四日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]祇園町[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]六月[illegible]山鉾町人
六角堂[illegible]
[illegible]

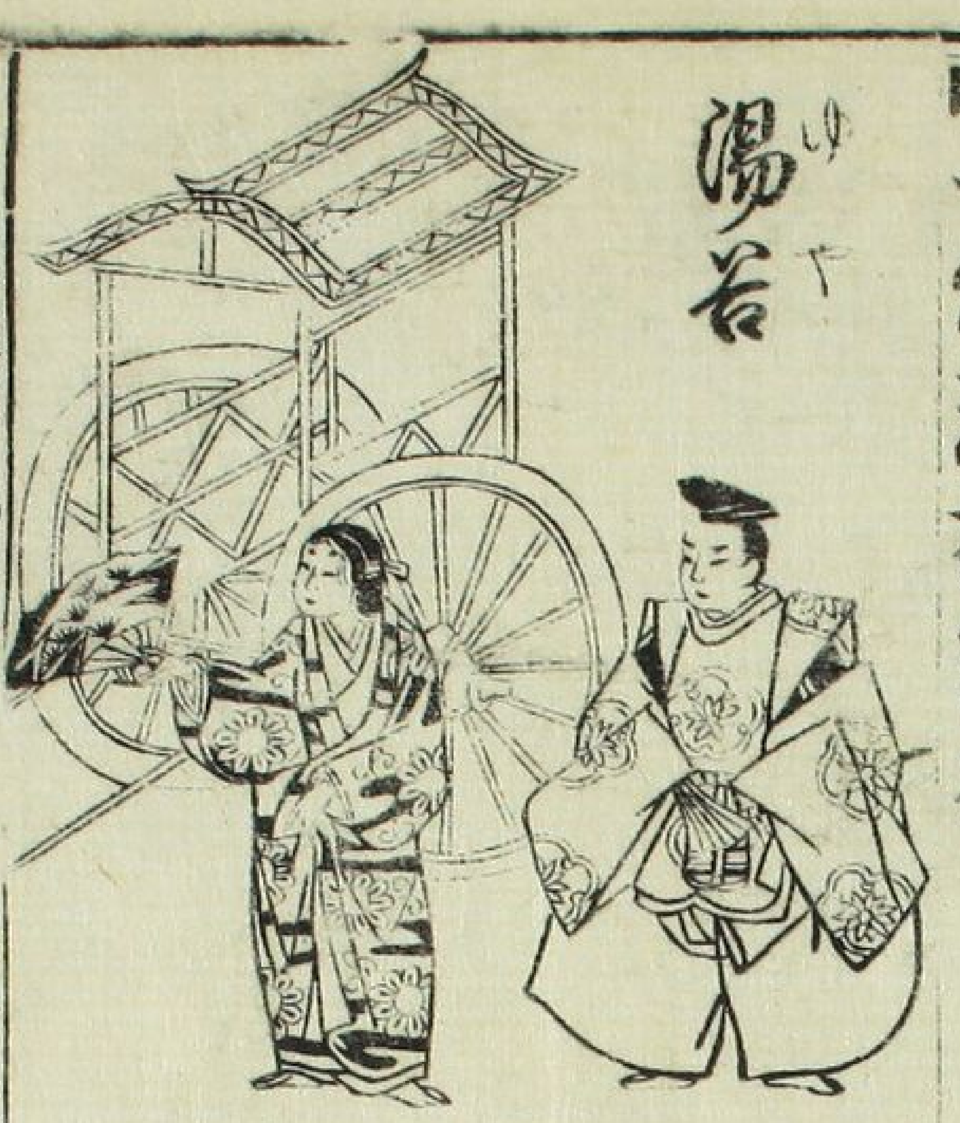


もみち乃賀　四

此巻ハ詞とさわくまきのかにと
せわ源氏十七歳の十月より
十八歳の七月までの事也。おまへの紅葉を
比しも十月なれバ紅葉ふとゝきそなして清賀
あそび。賀とてまき天子四十にあたりたまふ時をいはひて
とおなくくとこしさて此かえよいかみちのかと
ふかく伶人の音あり。殿上人こゝやうちもそろえさ
またやうある八鏡にふ源氏ハせいがいはとりいふ曲を
舞のふぞのたりしろさにこれ人りんまふたり。
その詞ふ。あさの紀おちまつのけに四十人ついしろ。
いひもられ吹きてたるもの、ねともおびくら雲
浅まよむもの音や海棚ひしとゝうて吹まよひき
色にもわかふもの紫乃中より青海波の如く
庭さま出まさる海ひとおそろしきかのこゑのかさし
乃おきまいそうちかたいかとおもひくんしの家
掲兒のみたまふへんもわくぬ身乃うてらふり
しかえのときや。なかてわが身掲兒へんたまふん
なもかわしれ。さて藤つまきにもあまいの人へさ
しのそくとの出世あらしによわずいたる藤中の手
とつくしきてなわかさやうのむまとにいかのふかし

女儀教訓絵抄

湯若（ゆや）



ゆやハ平宗盛公のおもひ乃女なり湯やか老花
母の重よりやまひとりなりやまひ女には女よ
みやこへ帰らんといへども宗盛公ゆるしたまハず
清水の花見にさそはれ同し車にのりて参詣の
花をながめてよ湯や一首つらねけるハ
○いかにせん都の春もをしけれどなれし東
のはなやちるらん　此うたのさまあはれなれバ
宗盛公かんじてやがてゆるしけれバ湯や
母の所へはせくだりて孝行をつくしけるこの
ものがたりなり。歌の道をよく学ぶべし

かんやうきうハ秦乃始皇(しくわう)の時ゑんのたいしたんと云者樊於期(はんおき)の首(くび)切(きり)たるを持(もち)て荊軻(けいか)といふ者二人(ふたり)帝(みかど)を殺(ころ)しまいらせんとたくみさが首をもち二人かんやう宮(きう)へ参る帝それを見たまひめされ首をみんとされしかバ二人の者つるぎをぬきもつて帝をころさんとす時帝の后(きさき)の内に花陽夫人(くわやうぶにん)とて琴の上手おはしましけれバよし琴をひかせて一日も名残(なごり)をおしまんと望み給へハ琴をひくとてしらべけれバ夫人琴をひき給ひひきて御ともの内帝をさしぬけ給ひて二人討る事琴の手にて万(よろづ)合(かう)たかりしとかや

花のゑん

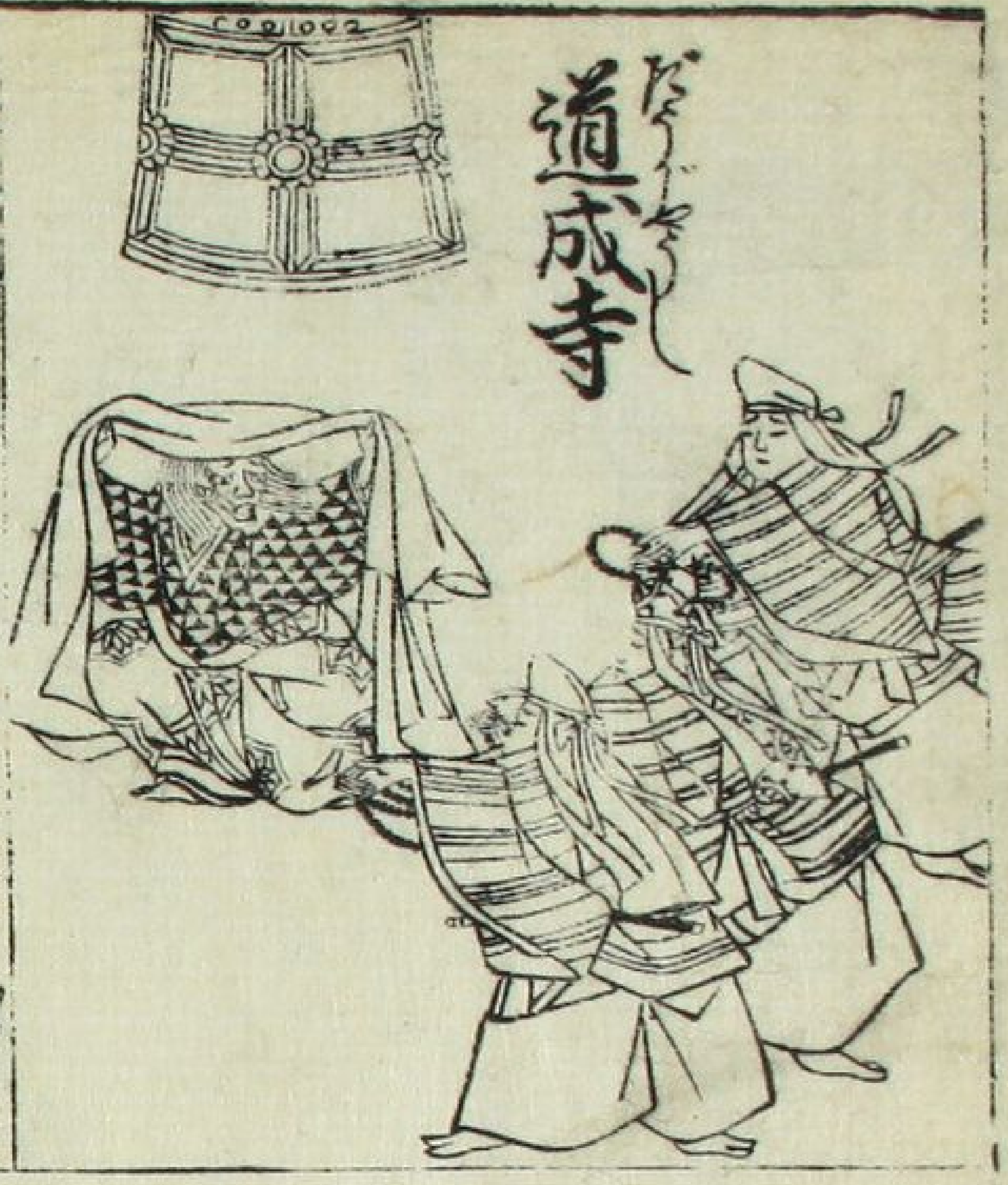
此巻ハ詞をもつて名とせり
源氏十九歳の春乃ことなり。
大内の南殿(なんでん)乃桜花さかりに花の宴あそびあり。
そのあそびおほく詩をつくり給ふ其夜大内の藤
つぼといふさわぎのおとゞにわたりて思ひわかれて
のふにふれども右大臣の姫君のおほろ月夜
月夜と云くわれ源氏のきさきひとつにわかれ
よわたりくわれまつ所をとゞめてかはしし
おに此君なりと露のなさけとかはしける
ざうらうに風もあらぶき。此君ハおぼろ月夜
の君にて若き身世にやがて源氏におくりて后
弟乃ちぎりとさとりしやをふとよりそのふえし
のおとし。源氏ハとのゝ内にハいつまでもと思へど
お酒つかふかうし。ましてやわれをさらのれとうち
ひゞきは。ふところにて露のしらせと
うちゑかくさしくわふてもかなしくへし。
名をと同じくも名のゆかりもよそにおぼゆし。
此巻月夜のことのえんしてまことふかし
春乃はなれかる月よの名ありしくかわるのさ
のうち、よからしめのとなのいとほしき

百万といふハならの都(みやこ)の人なり。百万ハひとり子をもちしが若(わか)き時南都西大寺(さいだいじ)のほとりにて捨(すて)ひしがそのまゝさがの大念仏にまいりし時つれしもの物ぐるひの女ありさまくるひといふハへそのかれかくされたるをかなしみ百万といふ女とかこそれハ物ぐるひと成けるにいう君○なきがまへには死して別(わかれ)し神のこゝろどりかなしさせてあふればかはらでぞ捨(すて)しその母こそあまたいふともなき狂(きやう)ひのまへちる体(てい)にかはる事なるにかなしき親の思ひわかるゝハ其ていやさとえてなくさめよ数(かず)ゆくかるとつる下

葵(あふひ)

はかりなき
千尋(ちひろ)の
そこの
みるぶさ
れ
おひゆく
すゑは
我(われ)のみぞ
見ん

道成寺



道成寺は往のくやあてふ女きん世の寺なるよ
ひ旅の女ありしとも僧を蛇となりてまとひ鐘
ふくやうの場へ入しかば女は蛇となりやそて
しりつきぬれいそれ清まつの鬼となりふりの
鬼女とまの来の山伏をすりしふとかりし寂
毎まづまの鐘へさなきとれいふ鳥二重しかふる時
山伏又いあり波女鬼交て錫やふ杖のみさき
紅こいまり妻かの志へとのふ文しの飛鳥鬼ぬけ
ふ一てゐ道成るかけ入のよかく立ぬ女欲
とさひ色り一念のごく志やうの詞しとれ也
ぬられ此一念ハ親への露たしまむべきさすなり

あふひ

此巻ハ歌をもつてなつけまいらし
源氏廿二歳より廿三歳まての事
ある人んし乃めのりさをあふひのうへといふ加茂乃
まつりをみに出のふま清車のうちてみと清ともの
人々わらそひて六条のみや所の清車をとうち
人とおごせしとかわか葵乃まつりの車あらそひ
ともいふ。そのうらみふともの乞となりてあふひの
うへそのそしれ八月ふやわかみまかりきひかもの
まつりの日源の同伯源氏よふとまてそうそまうる歌
むかしやく人のかざせるあふひゆへ神のしるしの
あふとまちくる○此かハその日みんし八紫のうへと
同車にそ出給ひてよれるおふひとあふ女ふ君て
ふふ君よわさんと神の中かしとまちなるまゝ人
やそ同車きのふ中へにみふとまちしぬひもなれ
ことなかりとらわなき○みんしの方にへそのあふさ
ちひろ乃うまのかかふされ恐ひり来ハそ給のそ
そさん○此巻ち紫のうへの清くしとのとのよ。
清くまのうふしきハかみまさらいふ清子あり藤
のごとくし。狩此うへいろわかあへぬひそへんを
中く来ハみんしの乞かんにまそんみとのなりわ

綾太鼓

綾の太鼓ハ松浦乃がむ内清次と云者の化ある
ほうかそく歌を待ゆふしふへとあやめとう人
とて綾ふへ今しふぬけわかんとしける後清次が
女房を綾の太鼓に入しまで一しふ番の太鼓と
きそく一隅かかりふる事とせるよ女程乱ふ此しと
松浦ふ偽系ふ太鼓なとけ出くへとおく此妻の
縁のふへしるをまべとて持ぎりしをさてとんど
いよくたとけられ夫のありを縁ちまかる
そもたもくへさうしありかてし今こそつまの
ありあるいーてびめぐりわかひちぎりし。
女のおつとと文せ州よしさる縁なりとや

榊

神垣も
志るし乃
杉も
なきもの
を
いかに
まかへて
おれる
さかきそ

ともゑごぜん

巴といふハ木曾義仲の召つかひの女にて木曾の樋口乃次郎兼光かいもうとなり。義仲ハ粟津か原にて討死の時巴と別れ給ふ。巴ハ小袖と守とをたまハりて故郷へくだりける。三世乃契りふかく主君とのわかれをかなしみ巴をもとめしハいかなるゆへぞ。此巴ハ女武者なれども一軍の首を切る事そのかず多し。よくいさましく名をのこせり。小袖の袂にかく形見となして後の世まで男ならぬ女の名をとゞめしとぞ。

「さか木」

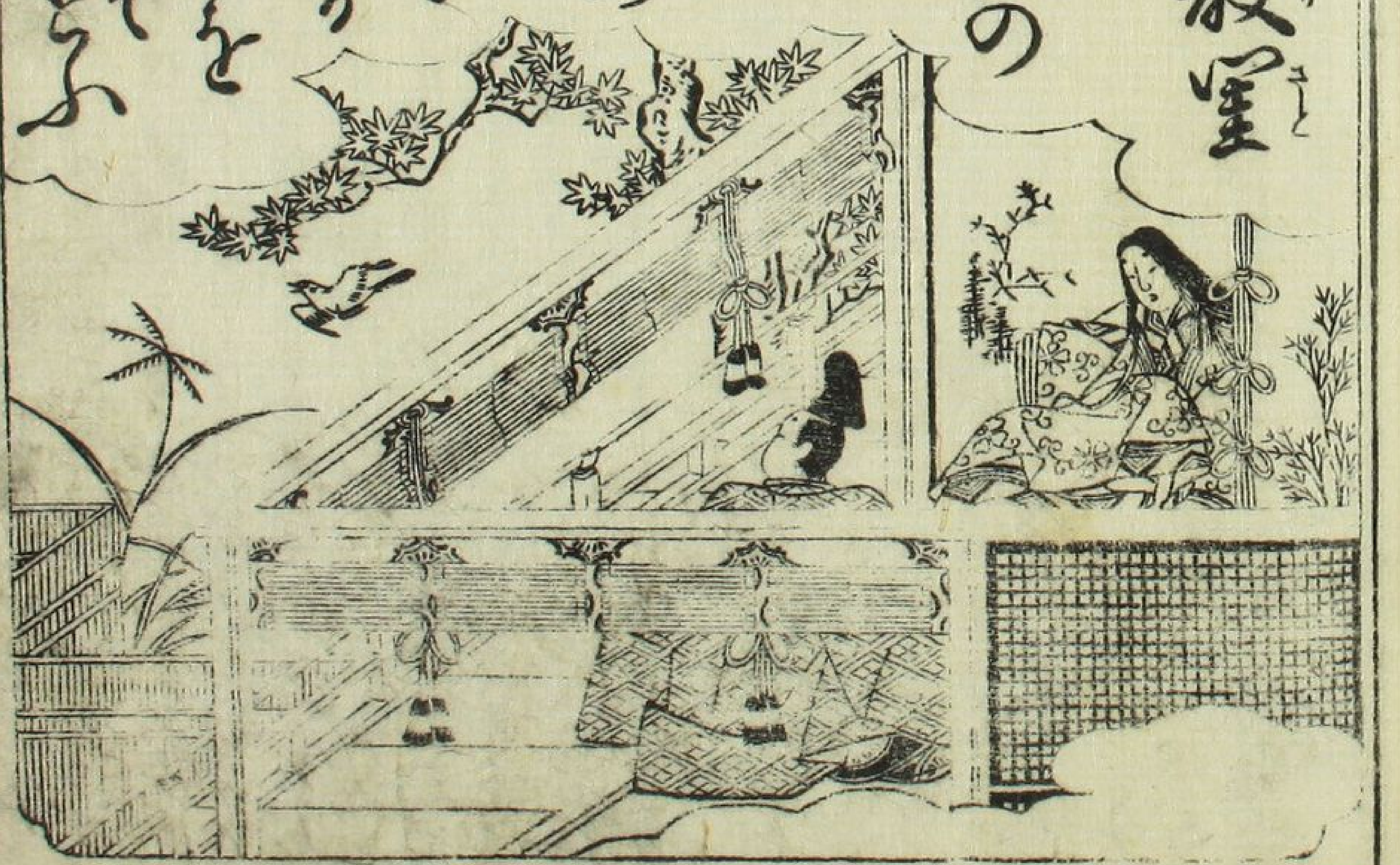
此巻ハ詞と哥とをもつて名とす。源氏廿二歳の九月より廿四歳乃夏まで乃ことをかけり。六条のみやす所乃御むすめさいくうとなりていせへくだりたまひしを、源氏ものうくおもひて六条のみやす所に物いひしてのふと。源氏さまハわすれかたくまいりたまひていせまでしたふものゝありしを思ひて乃ゝ宮へまいり給ふ時、さか木の枝をさしいれ給へば、神垣ハしるしの杉もなき物をいかにまがへておれるさか木ぞ。此哥ハ古今ニ わがいほハ三わ乃山もとこひしくハとふらひきませすぎたてるかど。此哥をとりて乃ゝ宮の神垣ハ三わのやうにしるしの杉もなきものをいかにまがへておれるさか木ぞとのむし。源氏のかへし おとめ子があたりと思へばさか木葉の香をなつかしみとめてこそおれ。○此哥ハ御所のおくしまをよく志りてこそまいりたるとの心なり。其の詞にもさか木の枝といふことをおりくあれバ、それをとりわけてまさの詞とせり。此巻一名をまた松がうら島ともいふなり

雲雀山

雲雀山といふハ大和紀の国さかひにある山なり。横佩の右大臣豊成公の御娘を中将姫とかや申けり。此ひめまゝはゝのざんげんによりて雲雀山へすてられたまひけるを、家臣のあはれみにてかくまひおき奉り、ひめのとかく世をわたり給ひしが、ひめの花をたをりて里へ出てうりて世をわたり給ひし。のちに豊成公かりくらにいでゝ雲雀山にて姫にあひたまひ、つれかへり給ひける。のちに当麻寺にて出家し給ひ、蓮の糸にて曼陀羅をおりたまひしとなり。

花散里

たちばなの
かをなつかしみ
ほとゝぎす
花ちる里を
たづねてぞとふ



松山鏡ハ六ばんめの曲。松乃山家にすむ人
ありひとり妻みまかりて一息女ありしが
ひ母ハむすめに形見に鏡一面のこしおきて
我しなばこの鏡をみよ。母の面影うつるべし
母乃いまはのことばをむすめ聞て
ひとひも鏡をはなさず母のおもかげとみ
さゝげまもりけるを山家のひと
なれどもむすめの心をしりて
よくみまもりしに母の霊あらはれて
てむすめのこゝろざしのふかきを
りかへりいまのまゝにかへりゆく

むら雨 須磨

以上六番とも。へくさゝめ。源氏
源氏九四巻よりのすけ。源氏
中川のわたりへおひてわりさすふみのすまひにあり。
まておらぬしべくたまひしつゝ。そのうちかねて
たちかくへよりこそひし。こゝと思ひいでかぬ
よみうくいまの。ふりゆるなみのかげにねむと
とぶらひなのうちはひしやとの姫君つゝ此むかし
とひなりいくたりともかくおとこにうちひしも
かれどものかたらひして。さんと思へども。さえ
うちいでてとしのまくらにわ入まひて。前にも
いまの浮世にありけるに。そのこよ人ゝ
よそのふみうちはれ乃うつなつしを浮世くおれ
花ちりさとのうそのつなく。此むかし
それのかげふりしをおもかげのしのぶの人
あらでいまこのすがたはひかさむへさく人
なしてそのとかくちとひてそうまつられ
そのこの乃さと花乃うちはなつかりてさそく
なくとともにしとたよりはふりゆく花ちる
さとならぬの君のすゞのちからそんの心ありと
こゝのふくそでむかし。そのしのあひのまひ。
はなちるさと

江口とハ六りさりのあそびの女なりしが
西行法師一夜乃宿を江口の里にかりけるに
やどのあるじのゆるさゞりしかば
世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りをおしむ君かな
とよみしかばあそびの女返し
世をいとふ人とし聞ばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ
とかへしければ西行法師あはれと思ひて一夜の宿をかりけり
其後江口の遊女そのまゝ普賢菩薩とあらはれて
白象にのりて西の空へさりぬ
さらさらふげん菩薩とあらはれたまひしと也

正儀世守

[illegible]

須磨

[illegible]

[illegible]

てうすゝけせむおりてこそめのふかうらを
おそろへ入道のむすめかしく此給ふ
ごともに御返事もえかへさぬを遂も
なきの男こ御らんずれまかりけるせのあと
いへは何程かしらぬとも何ず役人やとのくどう
母さへ悲しく二人をうちすて母かりひさづき
れたまふかんとたまは身を切くおもひとりの
役人のまはふしぞやむらく八宛のあはすりてぞ。
おりこゝろをむね河を切まといひ合へる居。
母ちこそいひしける入道いくれのみやうは梅く
子ならぬ我子なりけれどもおろさずまくもを
あくにと思ひもおろかならぬ入道の念もすすけし。
いふに宮様をはけるまで海しさなうと
はこゝしなりおもはさずしもへど入道つくおれせ
いひ八件ともどのへ二十年乃まへより御殿の案内
我子ありといくらく舟にいきおせのまと
まうけ梅にくらしものをえずそ所くを
ぐしなりけるハ母ともにわがおわすり
みつにいく心中そうらふかせしろいれいはく書
えまき世守いせと守との宮守なりと国乃
あかつきなうし。御使とたの殿下と御縁ぶ
勝に歌子はい身勇おり誉をふ使とくや

四季乃部ぼくし

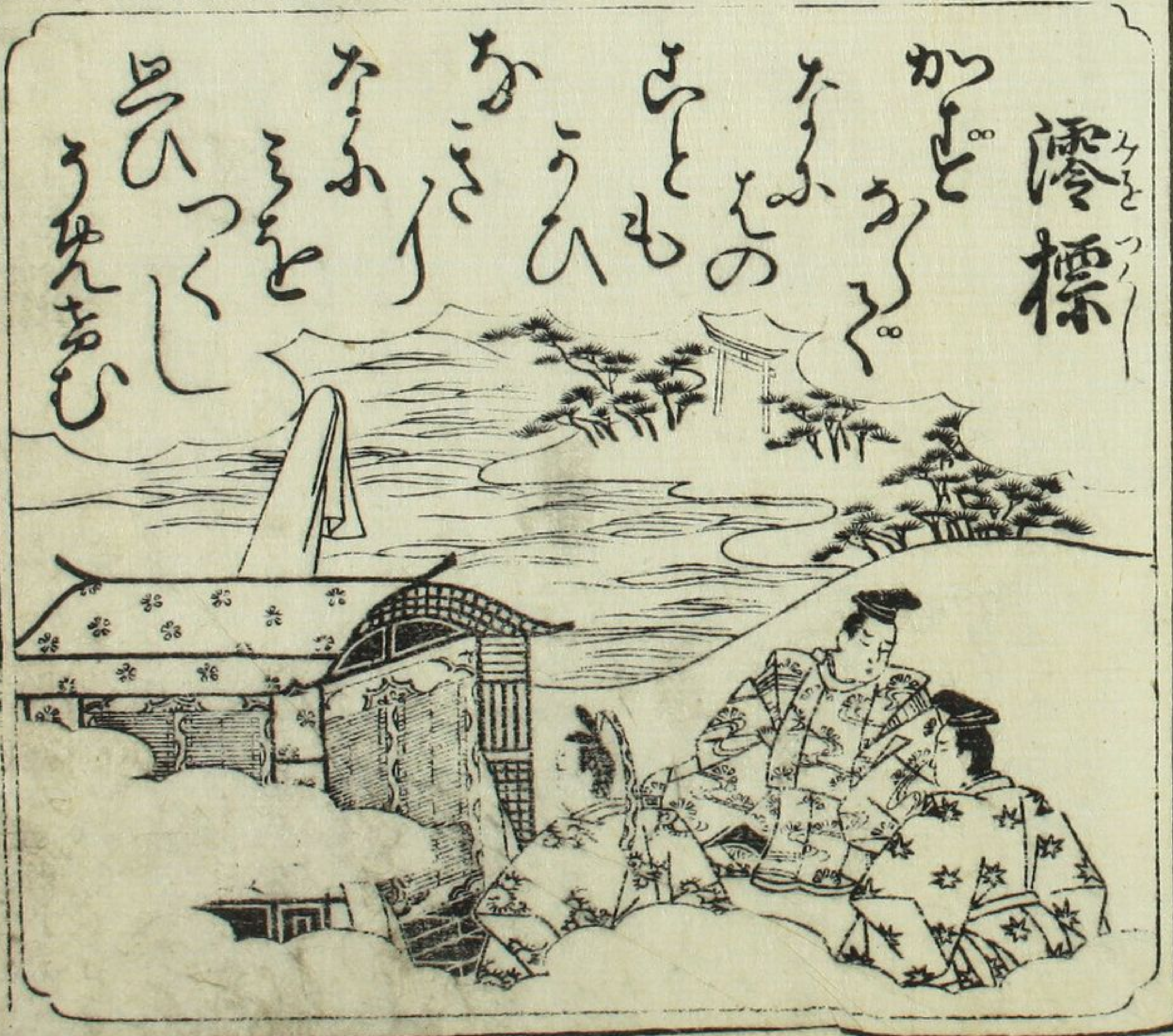
△ 初声らは鳴きしなかん二とせに
二こゑきぬうち深のこゑひを　太上天皇

△ 君が代の千とせにいつまで八重かしや
まよかくらすり春の来ぬらん　忠岑

△ 鶯わかとなる菜にたりなつなるよ
ののきまとそすくとのそぐらん　忠岑

△ 山ふかみ春ともしらぬ松の戸に
たえだえかゝる雪の玉水　式子内親王

△ 岩間とぢし氷もけさはとけそめて
苔の下水みちもとむらむ　西行



みをつくし

けふまれ高く神ら試ながらくるを
やがて源氏廿六歳の二月より
廿七歳の秋まで八つとせのまへのことを
源氏の君とわかし乃入道のむすめにわかれし
ふよわかれしより明石の入道の
よくいらへいたてまつりぬ入道のむすめに
のうへにおひかれぬふびんのすまひ入道おくり乃
やうらふ源氏そのきみかよふ心ふかく
わか秋われのうちむひしく思ひてくよみまつへ秋の
秋の月ぎの海よりわかれつるをおもひまされ
おもふらん。此かいなき身のつきの心の弱
もうちくやみさ給ふよのとぶらまつられといふ
みつく秋の歌といふをかく月もとめぐりてそ
いゝのつなよ月のまゝもとめぐりとくまいくそ
うし。いかに思ひし歌よりて見たまへはあふとやら
入道のまに「ひとわかれも心わかれをつくしそ
思ひわけし乃浦さひしき給。此宮のかいで入道
浩ひとわかくおきふかく此かさのひとかね乃
さひしき給思ひたまふやとひすめのさ給思てそ
ぐかりしよりるこし

夏

△夏のよハまくらでつゝまれてまた いくよの春をまちしらん　為家

△名にしおへバ花もわらしの夕ぐれハ まちえぬまゝつれなくも○たつるを　家隆

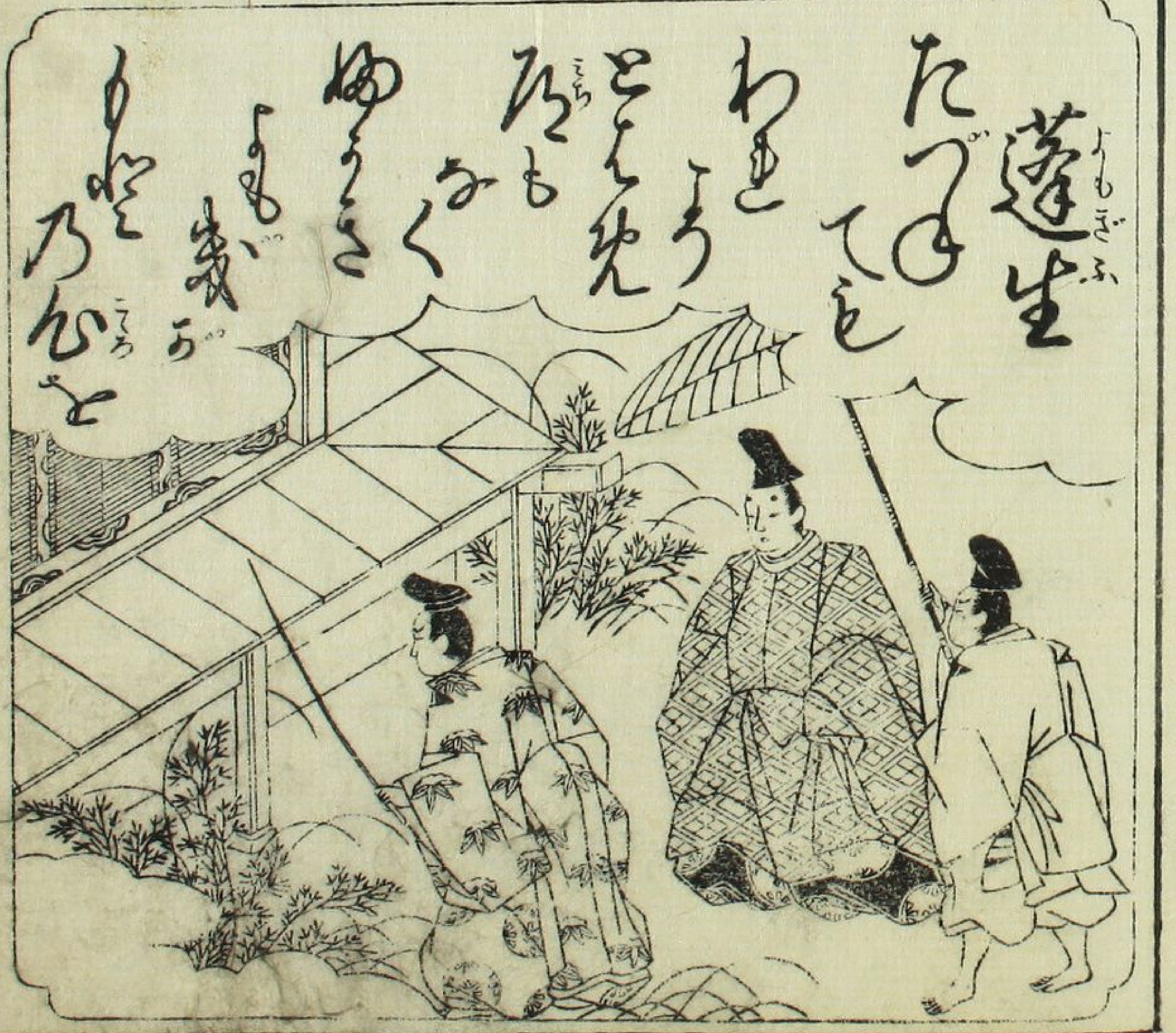
△郭公まちつるひとこゑのとかの よりのまつくらやねざめの里　紫式部

△夏ほそ知るさよふけがたの まてしのびのねのなくなる　伊勢

△みじかよのまつらの人のこゝろなく ゆくへしらずなる　定家

蓬生　十五

此まきハすゑつむ花の君をかく名とせり。源氏の君明石より帰京の比の よし九八の年の十一月まてのことなり。源氏我くたり給ひし後 たえされけるひとの住みかのふかくよもぎにうづもれてわびしさまを 見しられ給ふ。しの住ちらひとのうへも思ひやり給ふ。秋のはれまにまで しのぶわりしのうへもはづかしくおもひあへり。秋にはかたるまいて世をすつる人もなくかひなきまゝに わがうへとおもひて嘆きまつる人もなきよしを くるしかるべきなし。源氏よみてつかはしけるに かへさるゝ事にそのすぐれたるわざもなき。此おもひにたへぬ心をば ふかくおもひしにつけてもなほさらにしのびて さまをもてなしのありさまかくれもなく我をさそひてしたひまいらせんとぞ ありしに。かやうにめぐりあへるも昔のことおもはれてみえけり。思ひなしのかはらぬ心をばけふまで にたえぬものにてあるやうに。かはらぬ心をかへすがへすしのぶ なれてのこともかひなきをとぶらひてまいらせし うめりん。此ひ、源氏いかにたへなんとおもひにけり。かやうに をよひあるさまをおもひそめんなれどもにはかにとつる そこらし君をとふらひのつかひまゐらするもよかりしに 君とつらひし上ハふかくなりけり。又なるまでのほどのおもひなれ おぼしいでふかくなやみけるより



秋

△あきさぬとほすの袖に露ぞおく ことしもまたすぎぬとおもへバ　後徳

△秋のよの月けの衣打詰めて やどる身にしむ風の音かな　権中納言

△いつもふく風のにはの声かれて いかなる声か秋をしるらん　為義

△かくされ杉のこずゑの秋の紫 なかりもすゞしくも風ぞふく　文屋

△吹からにむべ山風をむしの姫ぶし わかれもうね袖の涙かな　小町

冬

△冬来てハ山もあらはに夜ひとつもさびしさの きえのこりけるしもの霜ぞさえける　家隆

△春たてハ木ずゑにかゝる山風も けさハ冬やきぬらん　為世

△ふゆの夜さむく山もかくれのこの柴の のこる松さへ○さびしさ　成茂

△さびしさの枝の夜にかくれて 袖ゆきさえてのこるへの松　式子内親王

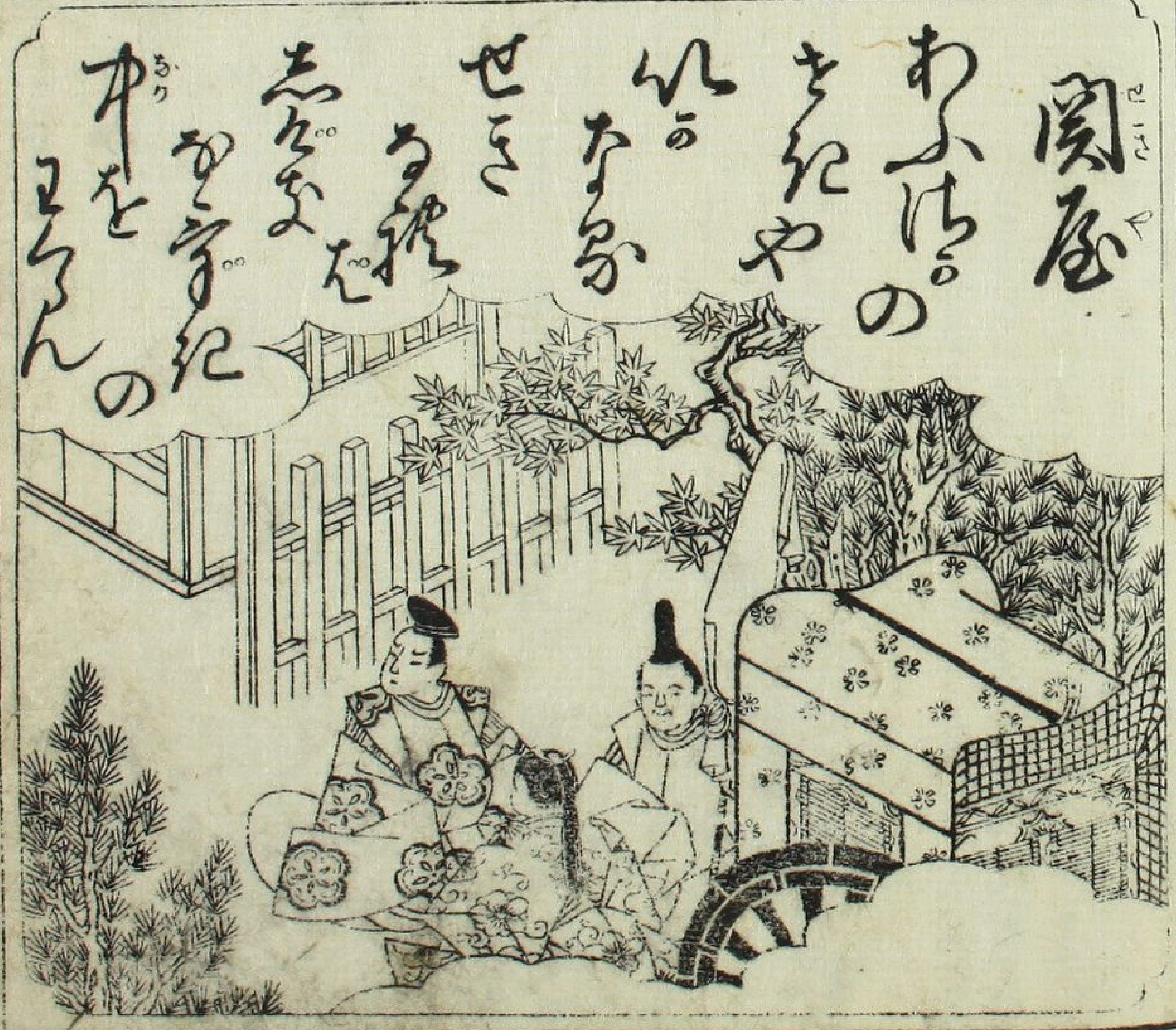
△冬ごもりおもひのほかに木のまより 花と見るまで雪ぞふりける　貫之

年中行事

○正月 ○元日一とせの上日なり。[illegible] 天地四方拝 [illegible] ○十日 [illegible] ○十九日八幡宮 [illegible] ○二月 ○七日 [illegible] ○二日 [illegible] ○三月 ○三日 [illegible] ○十四日 [illegible] ○十九日 [illegible] ○廿一日 [illegible] 大師 [illegible]

よもぎふ

此巻ハ歌にも詞にもよもぎふとつゞけたるよもぎふといへどもねによせてよもぎふといへし。源氏九八歳の四月のことし。おほよそ此巻ハつむ花ハ源氏をたのみてくらしたまふに。源氏ハ [illegible]



左 素性法師
みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

右 紀友則
夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥なくなり

左 猿丸大夫
をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

右 小野小町
色みえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

左 中納言兼輔
みじか夜のふけゆくまゝに高砂の峰の松風ふくかとぞきく

右 中納言朝忠
あふ事のたえてしなくはなか/\に人をも身をもうらみざらまし

左 権中納言敦忠
いせの海ちひろの浜にひろふとも今は何てふかひかあるべき

右 藤原高光
かくばかりへがたくみゆる世の中にうらやましくもすめる月かな

…文殊会○廿八日ひゑい山にて山王まつり○中午いなりのまつり○四月○一日更衣○…祭○八日灌仏会○十七日…日光…○五月○朔日…○七日…○十五日…○廿三…

日…田村…さうと…社祭○廿八日…○晦日…○六月○朔日…○五日…大坂天王…[illegible]

せき屋 ⅢⅠ

此まきハ詞をもつてなつく。せき屋よりさしいでたまふ…

…かしわるによつてさし。源氏廿八才の九月まで

るすし。石山へまうでたまふおりしもうつせミの君ハ

つ國のひたちのかミのくだるにつきてくだりしか。

此ひハ又つかさくのかはりてのぼる。せきやまにてあひ

たまひしかバ。ひかりのこし給ふ…

小君がまゐりたりしに…

…くらくにゆきさわ…しもちゝ…

あひたしや…。…おもひ…

られんハたゆかさりし。おもふこと…

たのミしに。…

…

…なりぬよしのかゝ…

おふ坂の関やいかなる関なれバしげきなげきの中をわくらん

きのみ…とまらん。此ハおふ坂の関ハいつ

なる関なれバまいらり…

おく…おふ坂…

…せき…

…けさ…の中…とて…

山崎のまつりぞかし○七月ぎをんの会○十月ゑびすこう○九月 …

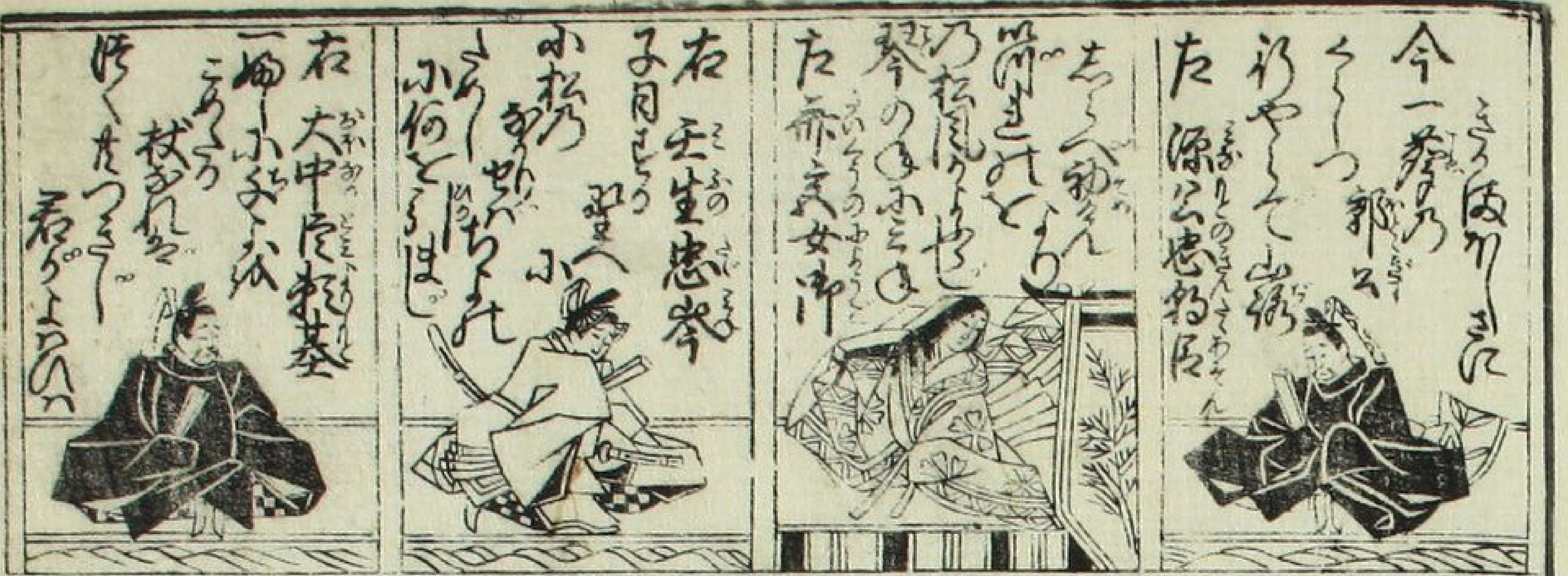
○七月○七夕 …

○九月 …

○十二月 …

忘わんせ 四

此巻ハ祠とりつく … 源氏三十歳の三月のこゝろ … そのほかの … 源氏の … 源氏ハ …



○八月○三日 … ○九月 … ○十二月 … 大坂 … 天満天神宮の …

流鏑馬○悔の堀 住吉神送

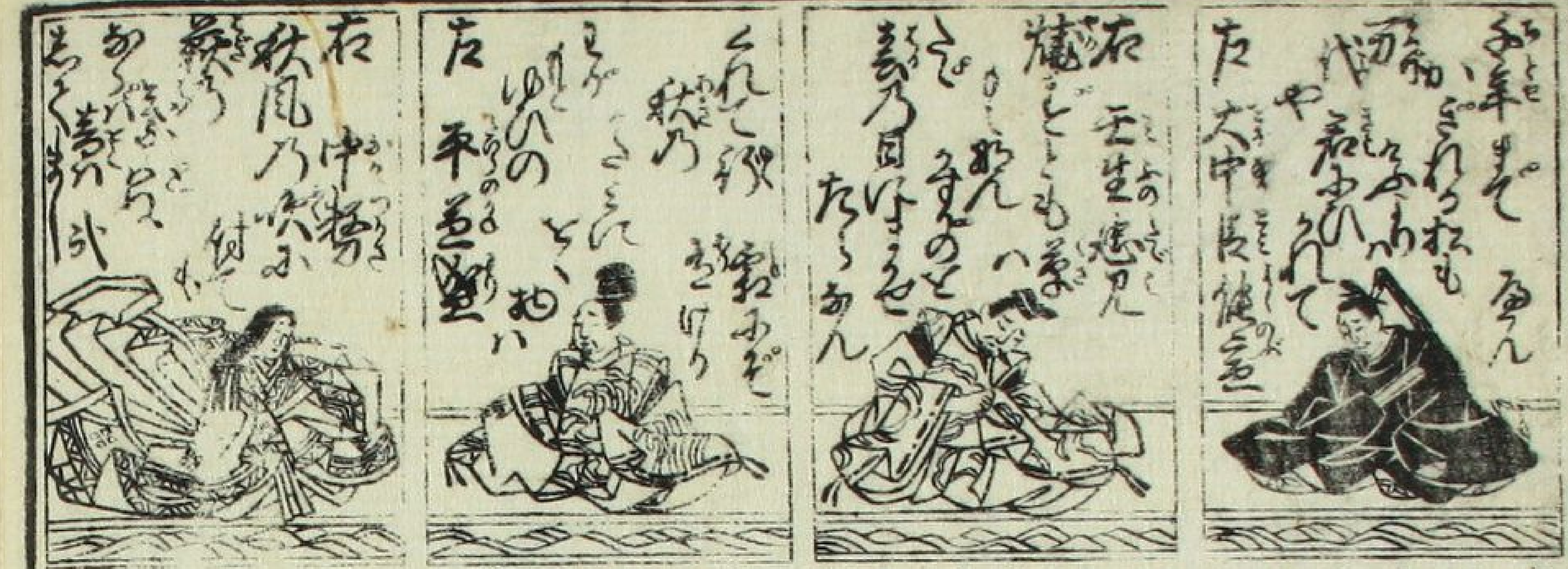
○十月○一日 今日から上よりくらく焼ニ 済家○三日ひゑい山元三大師の法 ○中二ケ月を 紙宮にて十ケ月 八日横川まて五重ニ あんらく寺今日ニ らしと元さびて○五 日蓮上人○今日 弁才天りと浄土宗 もとハ十夜乃志 仏とびん○十日 興福寺維摩会 法連上人れ紀梅谷 ○十三日 よくあことそ○ 此日法然上人あひ す海東極楽寺宮 都の社にハまん ちゃひ

○十一月○八日 いなりの大明神火 焼儀よふひとよふと 云○日蓮宗十羅 殺女れ火くきて○十 一日祇園事宮の日 吉神事れ火たき ○十二月元起上人 忌○十八日北野天 れ火焼○廿二日 今日から中本寺開山 忌○廿四日ひゑい 山三井るわりこれ 天台大師講○其 日今日 春日の祭り ○午日祇園火焼 ○卯の日 八幡祭 ○廿八日清みねる 行嶽忌○子の日 大黒天祭 新し

○十二月○一日

まつ風

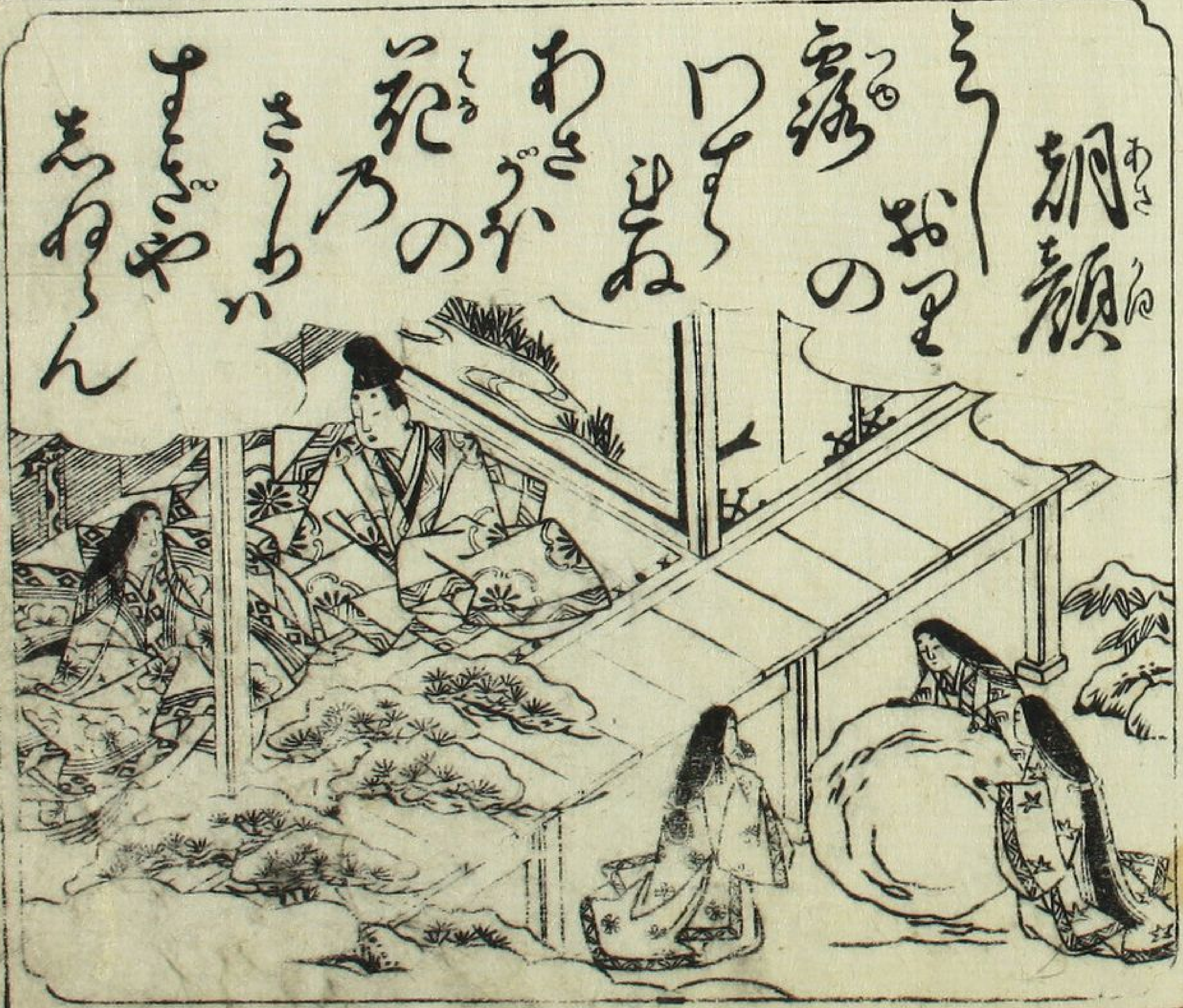
此まきハさきと同じくつゞきあり し。源氏三十一歳の秋の事なり あかし源氏にゆくふかくおひなる姫を入道の むすめ。ひかる君とうみまふて。あんをせにたるもた てまつるを。わすれかたく思ひてつたへられそ。京う のぼりのちて御消せつつかされしかともありしのうへ 源氏の君ハ縁ありけるに大井川のあたりに志ゝ庵 あるところの本に家つくりしてすみたまふ。川 とりすむ松風さらしられそありしみて源氏 おふまてのうちゑみとて京をおもひおもひ給ふに してひさしきふに。松風のひゞきあはれなき あま君の方に。○源氏さとへてひさしがたりしにあの きるにこきしにふさうる松風ぶかく。○ひんかはあの てわかまし君ハれと都の人なれと。いまあかるし よりへきとをはれてふりさへ御うハ生をかえ しるびらすうに。なれこともむくしにかへわくる やうに思へとも。むかしこそして松風のあそのそ うちれきこゆるとよわかるし。その比源氏かかは らとりふ本に御堂とそてたまふ。念仏のうちに おそしくるつひらくに。大井へもかよはせ給ふし



一人ハ八百よろづの神の御親なり。こくの神の本にて天てらす大神のわかれたまふ所也。○くにの〳〵とこたちのみことにてましますなり。○十九日ハ三ゐん○九月二十三日ハ二十八宿○二十日ハ大井○九月二日ハ豊の宮○九月二十三日ハ二十一日○九日ハ大智のはじめ○二十日まで○八日ハ大嘗会○十月ハ神無月なり。諸の神ハ出雲へあつまり給ふゆゑ、神の留守なりとぞ。よろづの神の祭へ参る事なし。

うすくも

此巻ハ歌をもつて名つけらる。源氏三十一歳の冬より卅二の秋までのことあり。此うすくもの女院と申ハ藤つぼのこと也。人かずならぬ日のまへもすたらしその泉乃帝ハ源氏のひてまうけ給ひし御子なれ。父君としゆめにもしらせ給はで、いたくなげく。十一歳の時より后ぐしとなり、御悩のひまなく、三十七歳にて崩御ありしかバ、女院ハせちにおもひ給ひて、さまざまの御いのりさせ給ふ。入日さしてうらゝかなる山ぎハに、うすくもの鈍色なるをみ給ひて、みやこのうちハ、いとゞ悲しく思し召す。などなればにや、源氏のおもひ、いとあはれなり。



御所言葉

一小袖ハ○ごろく　一わさハ○おかう　一よきハ○よろかの　一どんすやう○どんちやう　一おびハ○おもじ　一ゆぐハ○ゆもじ　一くやハ○うちやう　一名乗ハ○おいろ　一めしハ○ぐご　一さけハ○九こん　一こめハ○うちまき　一みそハ○むし　一かまぼこ○かまれこん　一みそ○さぎん　一こわいハ○まちろ　一りちハ○うちん　一ろんごハ○りしく　一せんべいハ○こんぐご　一ちまきハ○まきさ　一えんこハ○えくりと　一とうふハ○おかべ　一でんがくハ○おでん　一こんぶハ○おかく　一とうふ○おかべ　一ゆのこハ○おゆのこ　一しやもじハ○しやもじ　一なすびハ○なす　一よめがはけ○よめか　一かさねち○やわく　一そばハ○うすずみ　一やきめしハ○おやきやり　一ふのやきハ○わさ　一さうめんハ○ぞろ　一なかしハ○このぐご

一のりは○のもじ
一さけは○さゝ
一かなは○ひで
一ちさは○おかいろ
一かやり○かりゝく
一大こんは○からもの

一あかゝさ○浅のまる
一すりこぎ○かゞうし
一あやくし○あやうし
一うんなは○うんくう
一ふなにいもけ○新まきつ
一まつたけ○まけ

一あさづけ○わさく
一ごかうは○こん
一かうのものは○かうく
一くさは○くもじ
一竹の子は○さけ
一うこぎは○うのめ
一あつかは○おつけ
一さいは○おかず
一ねぎし○ねもじ
一うすのとゝ○うずく
一うどんは○おさうう
一すしは○すもじ
一いかは○いもじ
一うどんは○かし
一あびは○あもじ
一たこは○たもじ
一ふなは○ふひら
一するめ○するく
一ごまめは○ごゝのぞく
一金一歩○百ひき
一せんみは○一もじ
一かまぼこ○おかまぼ
一ぬかさは○せきどり
一せんみつは○ちゆうす

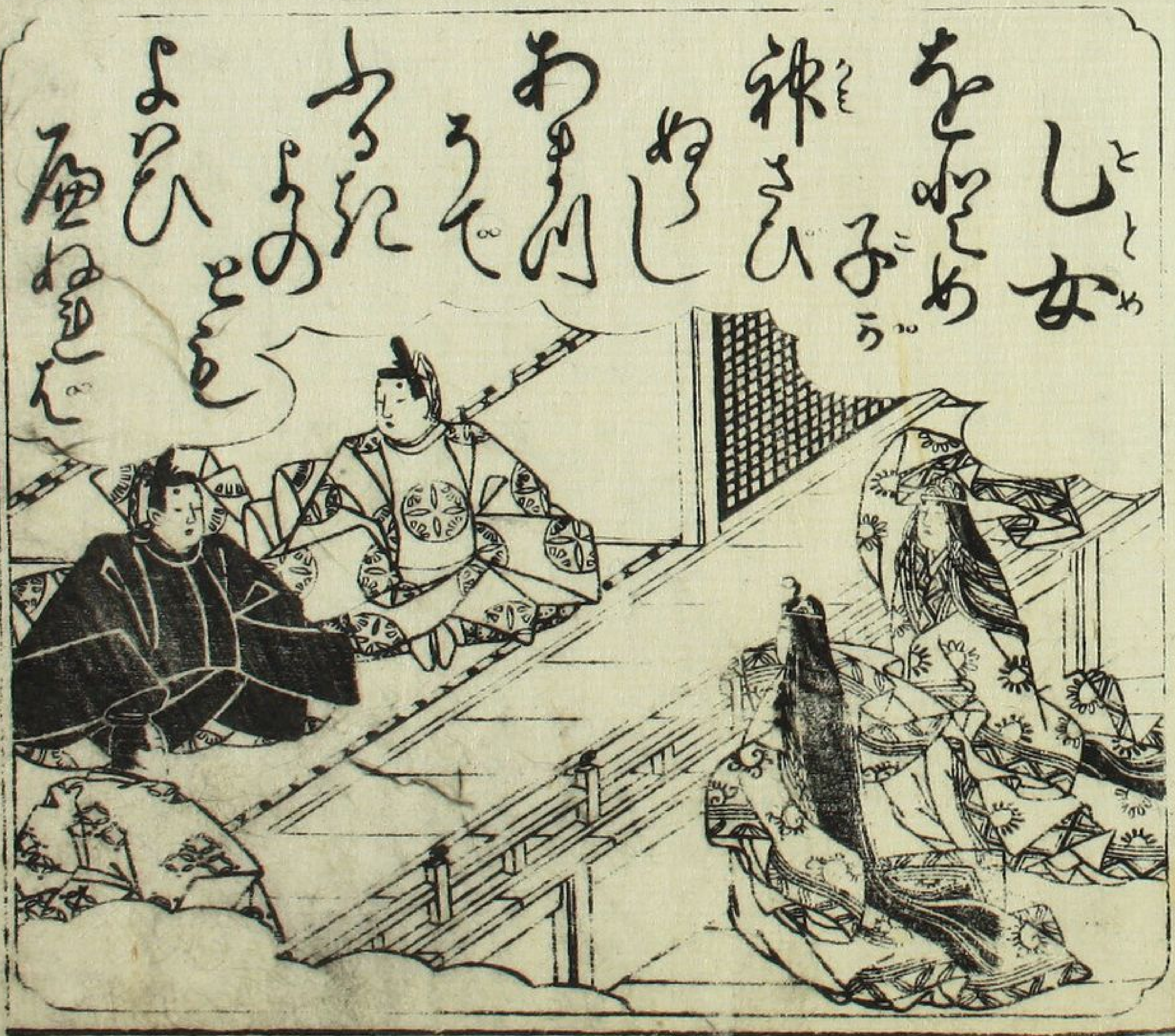
あさがほ

此まきは歌と詞とによりて名と
なづく。源氏卅三才の秋より卅五才迄。
まへの年わづらふ事ありしのちおほきおとゞ
あさがほのさいゐんと申は式部卿の宮の姫君なり。かも
のいつきを下りたまひて。さいゐんと申て
させのひてせんさいゐんと申なり。源氏
ひとよせ給ひて。あさがほの花につけてよみてやりた
まふ。見し折のつゆわすられぬ朝顔の花の
さかりはすぎやしぬらん。此歌は源氏のむかし
[illegible]

香之記

香炉の火たどんかくし炭を
やきてうくるとみるなれば
三味をやきうすのりかくる為也
○盆は香炉とくす香炉は中香箱
いれ香箸二つかさわれん之○香炉を
人のおまへに出す時は面へむけて出だし

一つさ江へなす○香炉とさくれのれの指
三つは香炉のそこは指の人さし指一つ又
れそつれこ○香炉とさくは指とより
さす一座へ[illegible]
まく人数十人か上六ツとそうかく[illegible]



○十種香といふハ香道ふ香の名をかゝる札と筒とそろへてもとめる香の名をうかゝふもの也其外札の名数あり○筒ハ入物なし○香を聞時はふたゝびとかず○さまをかざしなどとすゝハかん/\がすし毎びごとなくきくたびのぞきの見え○香をきく時ええうゐるところと見へてきくだにし風をいむへし○香ハ一炷といふ也一種といふ○香の炷かた業抱炷時ハ之聞はさうへてきくなり

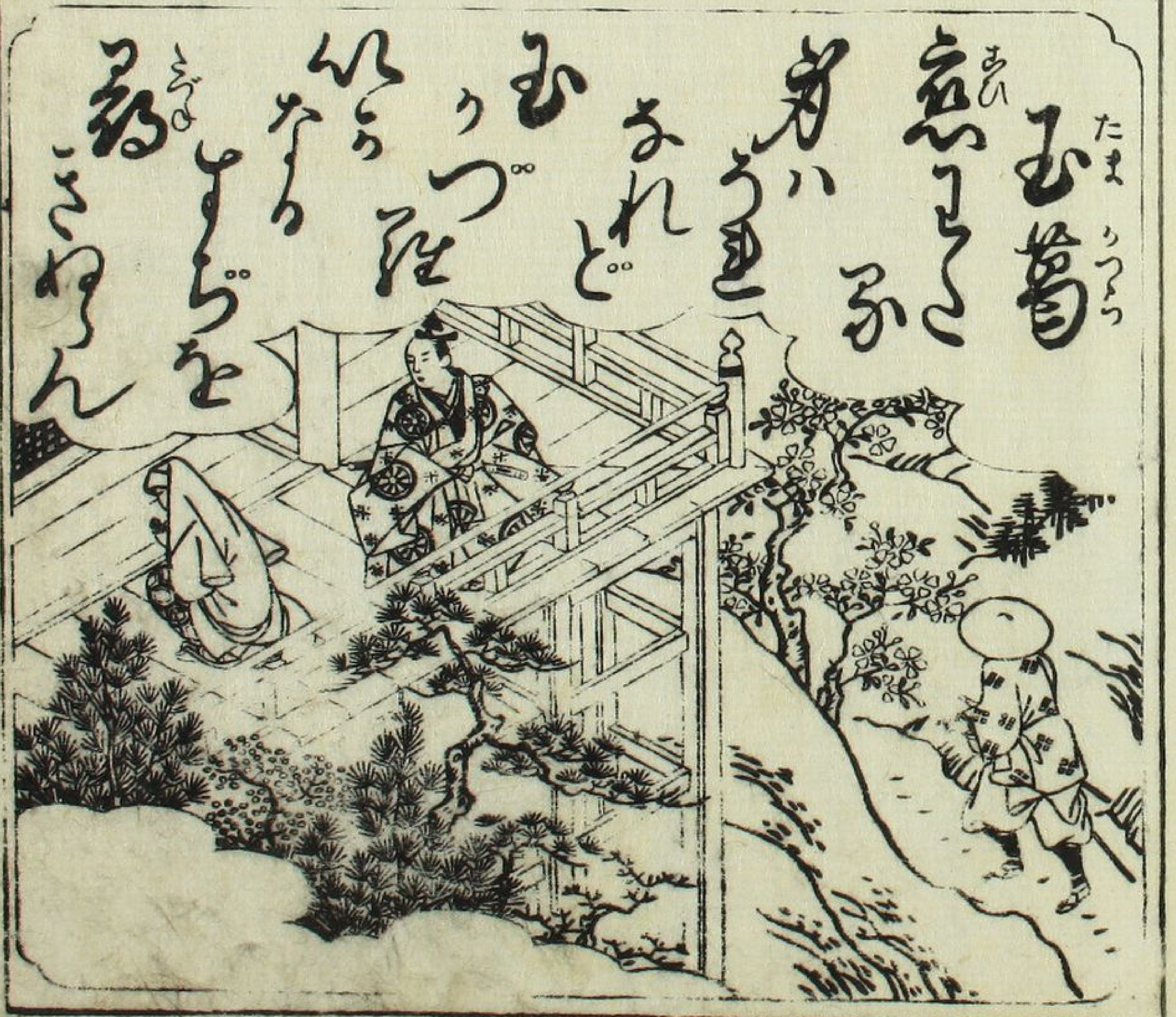
掛香（かけかう）匂ひ袋（にほひぶくろ）の方

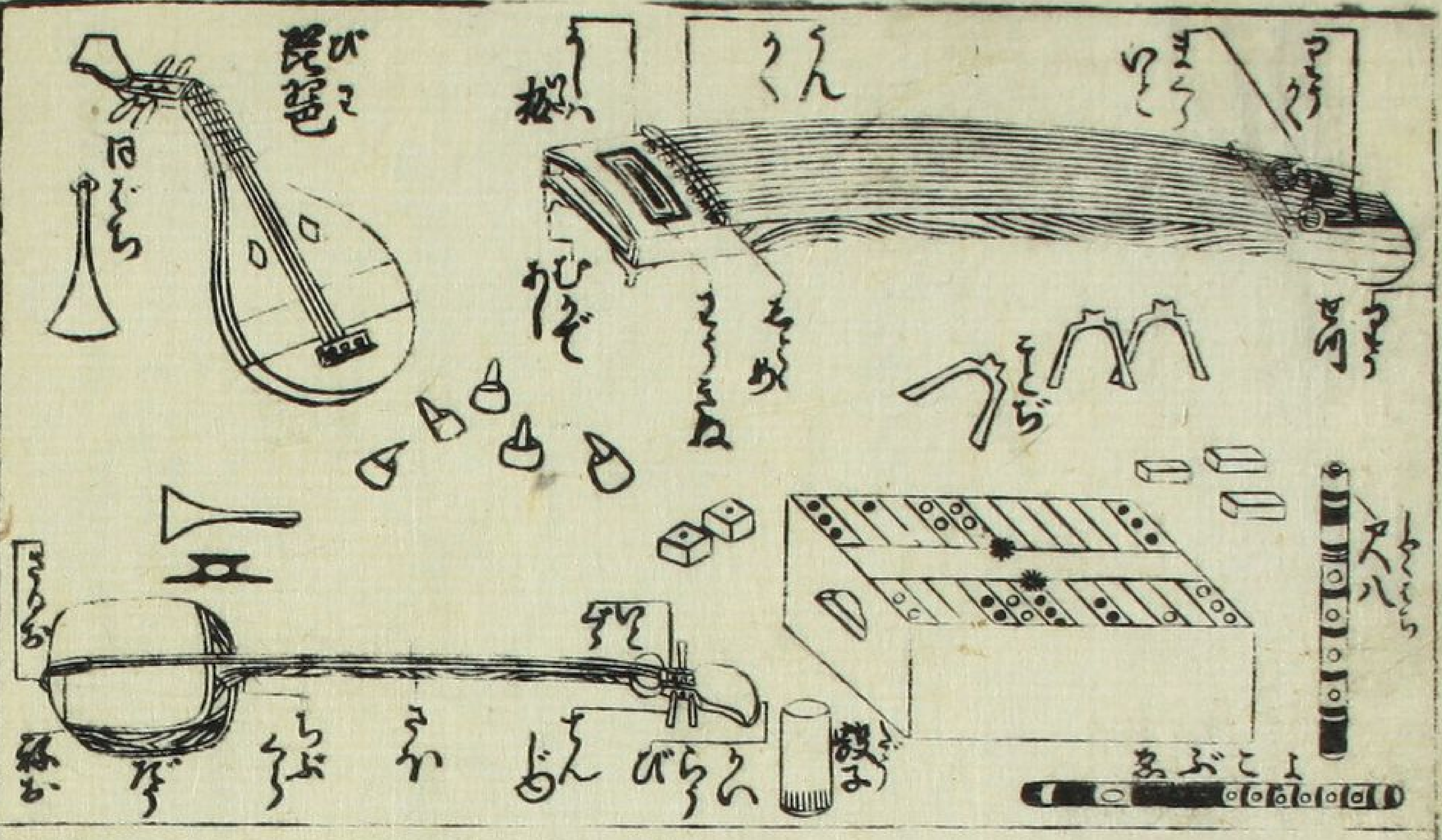
をとめ

此巻ハ詞と歌とをあはせて名とする源氏三十二の四月より三十三の十月まてあげあり此君ハいかうれ五節の舞姫みてをも五節とハむかし清見原の天皇よし野の宮にて琴をひき給ふ時に天女あまくだりて清くひとすがしふ時にひとひのそての○うわやしれぬの中に天女のまうておりきまして源氏乃あらたにわかせてこひろるとうんりしれのれ天女の袖とひるこれてあらひたわかゝりをうまにれよりは舞をうつて毎年十一月にわうさ舞姫となりしてまいせらるゝこと人あのうひ源氏よりわれ清めのよの舞とらよしきよの世すわとおしまふこれまでハむすめ舞ひにすられてられ人えんしさら源氏の此方に\とらめ子も神さひぬらしわすつ袖うるさよのちもよそひ給ぬ＊ての此ひ葛あせ川の舞にわひすひし人と思ひ給てつらうしのあせ川のうくへよみてつかうしのふし神さひぬらしとかひさしたむくひうしの舞乃時ハ君もこられをやうらしゝ今いそかふ思ふしたぬれそらうきよの気とふられそとうえうひかんよのちころなわ

○かくして小袖よくめおきつゝ香ハいりさ湯の中にいをよめてよしをいげるごとく/\としゆわかなり

△掛香（かけかう）名方 ○梅花（ばいくわ） 龍脳（りうのう）一分 梅仁（ばいにん）一文二下 麝香（じやかう）三下 丁子（ちやうじ）二文 甘松（かんせう）三文 白檀（びやくだん）二文 ○あやめ 沈（ぢん）香一文 丁子八分 白檀一文 甘松八下 麝香四下 龍脳一下 ○このもしふ 麝香二文 龍脳三文 菊花五文 ○ゆかり匂ひ袋 丁子二文 藿香（くわくかう）一文 伽羅（きやら）一文五下 白檀二文 甘松五文 龍脳五文 麝香四文 茴香（うゐきやう）五下 ○文方 甘松五文 藿香五文 白檀五文 龍脳一文 丁子五文 ○赤方 白檀三文 丁子一文 龍脳三文 麝香三文 甘松三文 藿香五分 △右三色ともに何れも名方の抜書也





むらさき　三

此まきハあさがほとおなじとしのことにて
源氏卅二歳の三月より十二月
までのことあり。むらさきのうへの御中のことなし
かてしおのよきはのうへの子にて冷泉院のはゝかれしれ
つねにくやしくおもひて二条の院へむかへとりかしこ
なかりけるにまへのはかなく思ひし二十三のとし
人よりわきまへてこれんのあはれをかんでうけて
清らかなるのつらひのちも源氏ハつきそひて
右近とよふ人よりわかひめぎみをつれ
なりことなれバ源氏ハよそひくるしくなりぬるのち
母をひきく殿のおはしましれたれバ
うてわかりれバむらさきの内侍とかたらひし源氏を
おやしとたのまれたるしかへにわひのふくよおもて
玉かつらの君ハ内大臣のむすめなれどむかしいづれのすぢに
ふらふをさわかん。此ひめハ母北のかたよりたれとくハ源氏
の女房のことしかあるのうへをたゆましてもてなし
さうらふ君ハそのしわかきいのちにえらいをえんなく
てや。むらさきのえんしと父とたのまれしと
らん。ふかきえんありてわかきゑんしむらさきのえんなり
のことなれバひとつのすることびのえんなり

琴之説

琴ハ唐土にて八神農作り、日本にてハ
いにしへ天の御代のはじめの命よりはじまる
○琴と三味線とちがひしわけハ
琴の三の糸三味線の一琴の又三
味線の二とおなじ○二ハ琴の又絃
或ハ琴の又三味線の二琴の八三味線
の二琴の十三三味線の三とおなじ
△糸のおさへやう大ゆびにてさしたる爪を
ひとさし中ゆびにてさしたる爪と
向爪といふ人さし指にさしたるをわき
爪といふ○糸の名ハまへより斗とも
沢とも為とも巾とも次を十とも
斗の次ハ十九八七六五四三二一なり。おさ
へ糸ハ四七九八いづれのかんおさへ
どもてもくるしからず地のさハり
すこし付るべし

三味線

三味線のはじまりハ文禄の比
石村検校といふ法師。
びわをひきやすきやうにせんと作り○
琵琶ハびやうしのびらの撥より
撥つかひハ爪のつけやうかくべし

七夕之詩

七夕詩哥 古詩 新詠

憶得少年長乞巧
竹竿頭上願糸多
白楽天 詩

二星適逢未叙
別緒依々之恨
五夜将明頻驚
涼風瀝々之声
小野美材 詩

露應別涙珠空落
雲是残粧髻未成
菅相公 詩

風従昨夜声弥怨
露及明朝涙不禁
江相公 詩

去衣曳浪霞應湿
行燭浸流月欲消
菅三品 詩

詞託微波雖且遣
意期片月欲為媒
菅輔昭 詩

胡蝶
花そのゝ
はてやをしたく
あたまひいうとくこゝらむ

ぎらハ手の内ゟくおべし かどを全
ばくやうにかぶらかすべからず。ぎし
ほと乃音をむすぶ心ゟ糸をかけ
指つよくかめ丸みをとくべし

笛之記

笛ハ武事に附くちびると
いふ者ふくうくにめり日
かふく八十の大本周令者久山の
竹をそ揃へて笛尺八寸切こま笛
といふもなり

双六

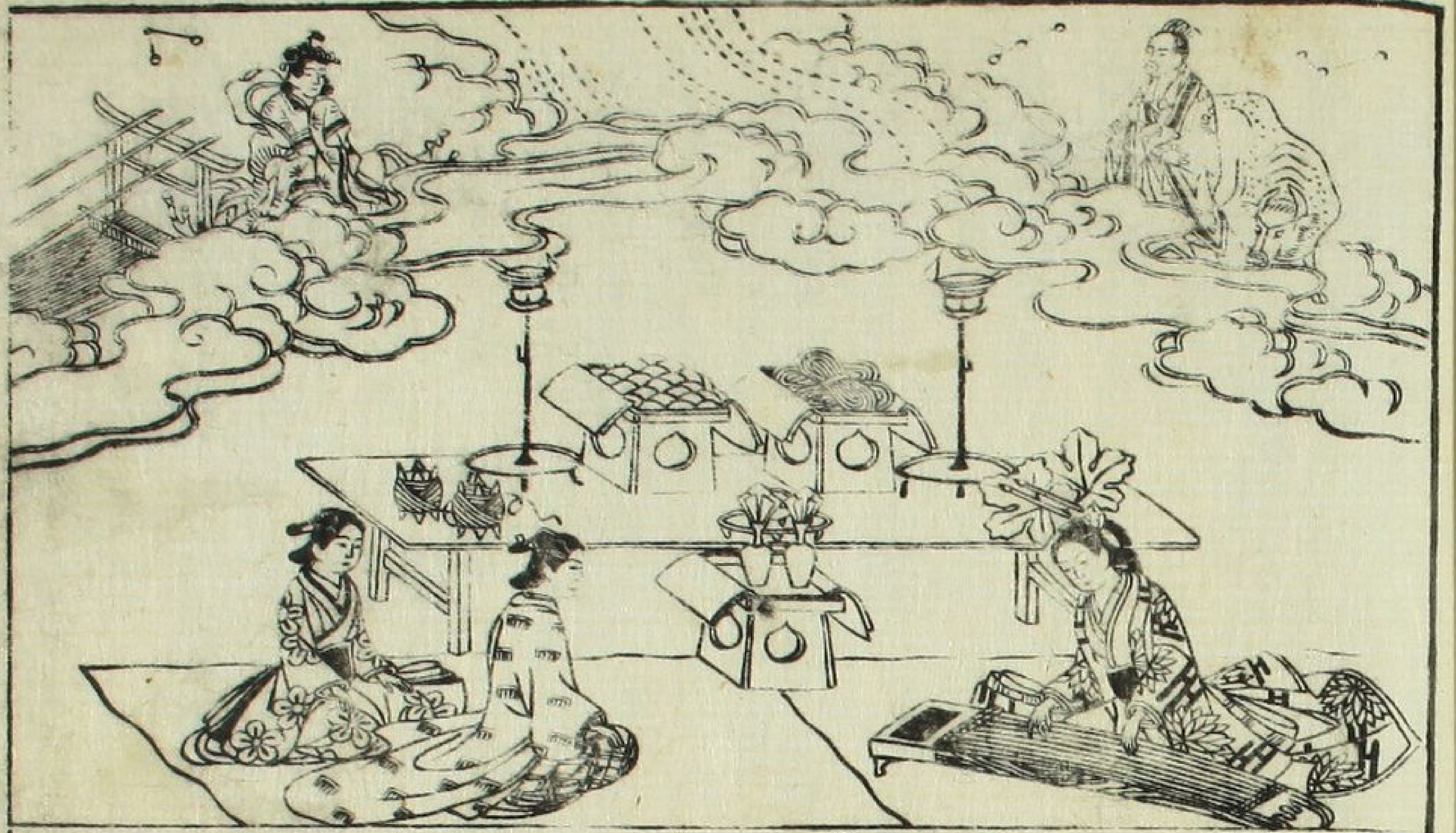
双六盤ハ長サ一尺二寸巾八寸
二尺となりとも横七寸二寸
七ツ二目の六用をつらす。白黒十五
上十五目黒石十五ハ下十五めぐる
ぜんざいハ日月をかたうすべし
大臣ひろめぬめひしうく

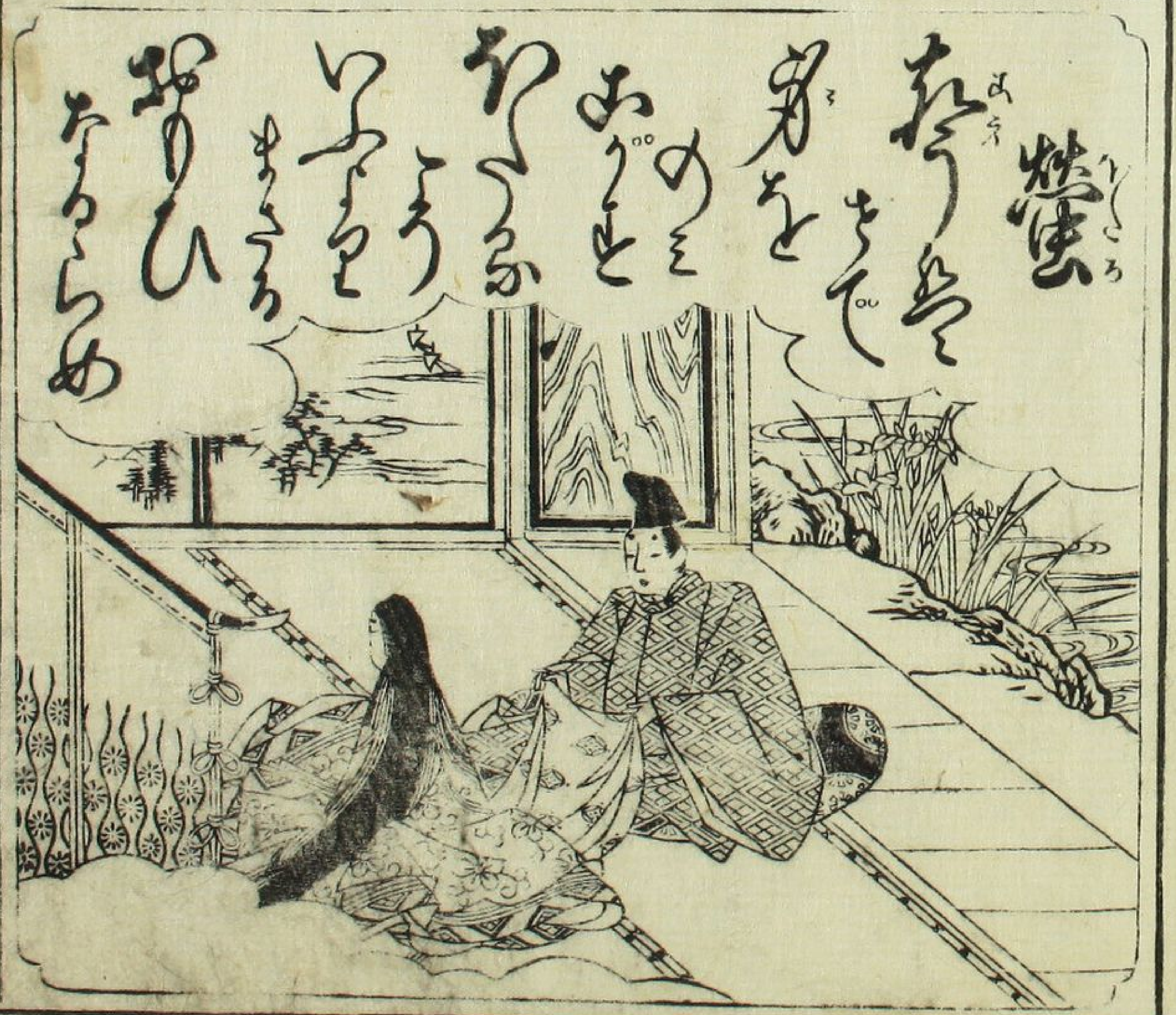
琵琶

琵琶長三尺五寸余也で
下へかさりぬ…
上人をもめふひくと琵琶と云
ちめつらん王乃代ゟ…
さ…すかさ…
と…
目…

はつね

此巻ハ每と詞とをもつて名づく
うらし。源氏三十六歳の正月さん
ことぶきのいはひのうへの姫君とむら
さきのうへの孫子まゐりふみてとらせまいり
…
一日乃はつねさん…
…
ひ…
うへ乃…
たいめんわかうた…
せめくれ…
…
たいめんのおもやと…
…
引…
…
乃かく…
しうすの…
わかれくのんて。松の孫ハ根さしのまくし。うへのせの
孫子もかくるなるへし





○一とせにひと夜あひ見まく かしのちぎりやうらみざりけむ　水尾院
○あまの川あふせのほどもまちわびぬ 年にまれなる七夕の空　道晃
○ほどこそあれ星合の月日を　通茂
○おもひやる雲井のあまつ星の 逢ふせ待つらん　資慶
○天の川星の秋のひとよのなかに ちぎりかはらぬ心ならまし　よみ人しらず
○七夕の今宵あふ瀬を 秋のみの行く　通茂
○なみ世をしらぬ人の 逢ふ夜の契り　肉房
○ゆく年を星の契りやまもる 七夕の空　雅房
○ひとり星の逢ふ夜は 中々のそぎり　通福
○天の川せ月にかすむ 七夕のまちしき　雅重

みのり

此巻ハ御法と云ふと紫の上の名也。
きりし。源氏三十六の御時なり。
むらさきの院宮居にてしとやかの読経とて春秋に
大般若経をよみて法事あり。秋二の日中宮の御方
六条院にてをはなちせ給ふ。そのつくしにひとさし
のうへも仏にかけさせたまつりて。中宮の御方へ
花まいりせらる。そてふといふ童人はこてふを八人
ゑらはれつくりたてて。ぐらりみちて白きの花かめに
さくら挿して。てふちてあの花かめに山吹をさ
しとつくして。八人のこらへもみんはしのもとにて
花たてまつり。紫の上への消息そくりて童のたれに
まはせてれこしわか方に花そのくおてふとさへ
あてくさにおもはつむしいうてみえさん。此歌ハ
秋の上の中宮をさそめて秋をこそまちなる
らめさおもてえ花そのてまてふなとはめ乃えさり
みえさん。秋のむしのひまるる春乃おてふとうそ
みゆるとよかのむすめの秋の中宮の中宮の
こまでし女の世をすて秋の日の方わかのそれ
まろそ乃ハわかやとの花をて風のつらえにみよ。
こあてより秋の上のむこそやといへり。

○かさゝぎもなくてや[illegible]
[illegible]の空より[illegible]契りみ　季信

○[illegible]秋乃[illegible]
[illegible]　雅庸

○七夕[illegible]
[illegible]　時量

○[illegible]天の川
[illegible]　雅房

○天の川月の[illegible]
星や[illegible]　雅豪

○[illegible]
これ七種ハ花もましらず　よみ人しらず

○[illegible]の
[illegible]　道見

○[illegible]
[illegible]　雅豪

○七夕[illegible]
[illegible]萩乃[illegible]　弘資

○[illegible]
[illegible]　似洞

ほたる　三

此巻ハ[illegible]源氏三十六歳の五月の[illegible]月四日の[illegible]

[illegible]

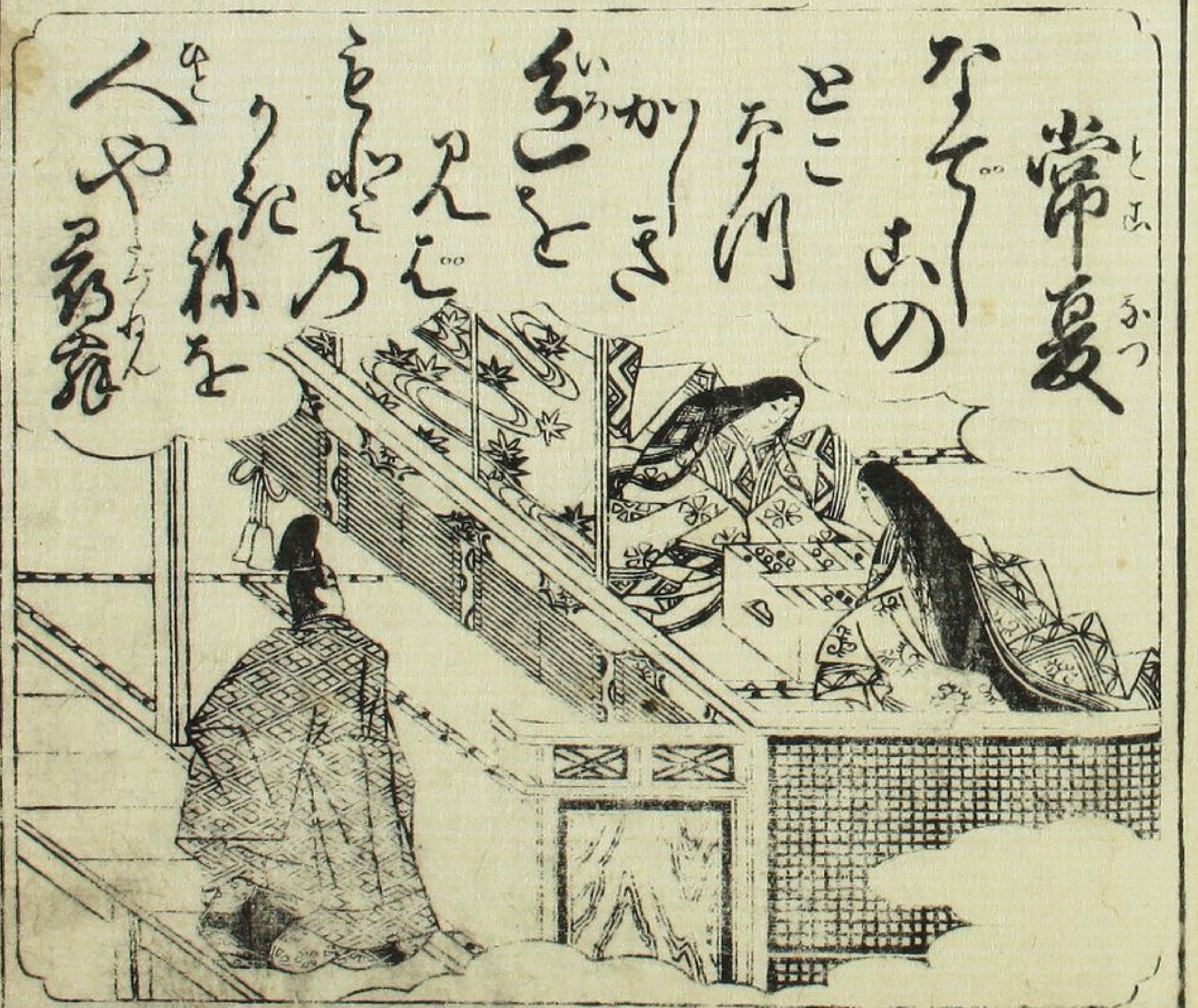
○織女[illegible]
[illegible]　道見

○[illegible]
あふせハ[illegible]　公程

○天の河[illegible]
月や[illegible]なりけり　光熙

○[illegible]よ　経慶

○萩[illegible]
[illegible]　通村



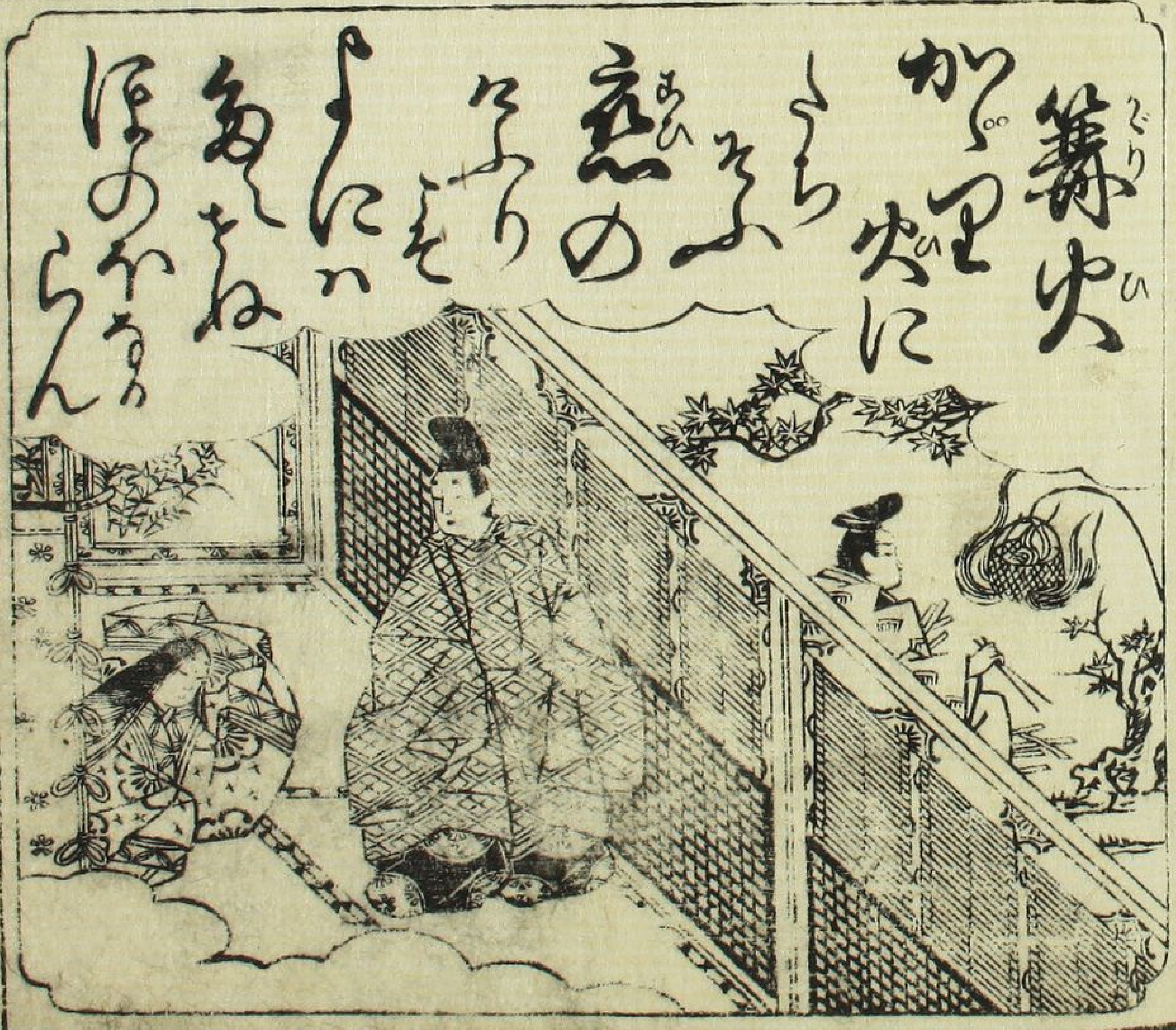
○逢事を待る天の河原のわかれ川風
とゞむべき舟の綱をもあまた○くらし 貞慶
年の一夜くらべど涙の中は(?)わかれ(?)ても(?)世の(?)音山 坂上院
○今宵ぞ文(?)かくるゝ二星の(?)とけ(?)ゆく天の河(?) 水尾院
ながきまさん(?)雲路のかよひぢの
○七夕のなかをまくしつくす(?)空の 雅章
わかの一秋のなかどもちぎりせん
○七夕の今宵の契りの長き(?)の 同
まさかどつきぬ秋(?)のかげかも
絶せぬ契りの流れてかはらぬ鵲の 純慶
よりそふ橋の今(?)もちぎりせん
○なかなかにふかくてよ橋ぞかさゝぎの よみ人しらず
羽をならぶる契りのまたえぬる
渡りかぬ契りそ流るゝ天の川 雅康
かはらぬ流れてふることかけよ紅の橋
○七夕のおもひの数はおもひやる 通茂
さぞかし一夜のあさくぞあらそふ
○めぐりあふ二の星そ(?)かけての 雅為
よりねよ契りそ天の川かはらし

とかゞり火

此巻ハ前巻と詞とおつゞく巻とする也。
詞のなかにもあとくおぼしき事あり。
源氏三十六歳の夜乃事なり。むかしの事を思ひ出す
事とみかどの御たまはりし(?)ことのなくて
玉かづらのもとにまかでてもちらへ(?)もてかた(?)
候ふされかけ(?)玉かづらの君の源氏の御ことをおぼしめし
ちかひてふとん(?)しの清おか(?)かゞり火さしさし(?)あかし
たきにてありのかさね(?)を人にやらる物ら(?)かけてたる(?)所
かゞりとかくもの御ちかえ(?)を出して(?)いにしへわすれし夜も
たゞりいやにおふとも(?)をとうれへ(?)むかへしかおそし
まへのおびぎ(?)ひとつをとどめてかへる時いにしへ(?)まで
こゝろしたる歌よみて(?)つかひ(?)ありのことをなかひ(?)し
たるとかのもとの詞もしとゞまりてかゞり火の
ものゝあはれのかさねにて玉かづらの母夕顔の
早下しておもふに(?)いま源氏のちくまもとをそへ
なにしにもこの思ひの(?)をとりなくも(?)わかくせてかれ。
わかれしさなとにてふくたいめんわかせる(?)ゝん
たすらへしがくのまへぞ見んしもかくて(?)かたれ
かのそひとしかなかくなるをかたらひ(?)へ

女たしなみの事

△人の前にて楊枝を使ひ歯をせゝり舌を
かきなどするは楊枝をくはへてくりかへし
又物(?)なくしてとかくしはべらず
△筆のさやをかみ又は手のさやのかみ(?)なども
かならずしもつかはぬ(?)筆つかひもせず(?)などはせず
人のおくれたるにやすらひまへ
△戸障子あらくあけたてし障子をとゞめ(?)并(ならび)に茶(?)枝
とりてかふるとかく武具(?)はさまざまにてはかりて(?)
人にもあらず
△奥(?)人のの前にて(?)でそのこゝろを見る(?)ことなきかさん
并に作法(?)のみだりならず
△あの中にもぞうりつゝ人の茶(?)をはか(?)はきてもよ
よねぐひかへてよくねぐひてひろ(?)ひとり
だしかはつかはず
△そし板(?)敷の鼻緒のかゞちの身分(?)并に火鉢(?)く
ふかくへあつかふ
△机の上のかざりものなどの人の出てくるまでわたり
作の硯そばへよりつかふ
△縁(?)のおくそひおとりさるべくまかせて并に茶
ふるゝゝきへ人のいたりかへす



△よそへ行時ハ紙の用意をかならず人のまへにて汗を
ぬぐふとも人の前にてむさき紙を人のまへにてはな
かみこゝろ驚とすべからず他の手がみを
ゆるく見ずそうがくすべからず他の文ならバ見ずと
しるべきなり
△他の文をよむ時はそばより見るべからず他人の書をば
見ずといふハ人の秘する事なれば見るべからず
読とても人にむかひていふべからず
△他の雑談かたるを聞て其人の雑談をちらさ
ぬやうに心得べきなり
△他の座敷にて書物を見るとも文字を読べからず
又ハ字の字ををしへてとるべし
△酒のかんはあまりあつからぬやうに心得て
さまさぬやうにすべし熱き酒ハ舌をやくによつて
さかづきハ少しさましてのむべし
持べきなり
△人のゆくさきをさへぎりてとほるべからず
がうしやうにしてとほるべきなり
△あやまりてひとに物をかけたる時ハあやまり
をいひてわびすべきなり
おそるべきことなり

かゞり火

此巻ハ初秋より名付
らる。源氏三十六歳の秋の初
の事をかきしるしたるなり
みれバかゞりびのうちに夕霧もと
ねて源氏のうちより夕がほの
とへてなりつる夕月なりけり
して清見が玉かづら
かゞり火のうちに見えし
たまかづらのつまぐしの事を
ほのかに見るによりて
うつくしき玉かづらの姿
をもおもひよそへて
うつりかもなき火の
火のかげにおもかげ
かゞり火のけふりと
なれど源氏のうたに
よるべきを

△親は子の行末をいとほしみて
子を家にをくべきなり
たる心をもつてやしなふべし
継子継母とて親子ならぬとも
妻子の中をおもひやりて
人をそだつべし
かなしき事なり

うつろふまゝに世の有さまのかはることをさとりび
あつめ雑役をなし大かたのもの文ざけのかりね
御なりへ大食のさかもりけうのふることそのひ
をしめ小前をうふでらなりへこえてねむりの
いさぎけ兆朝露へこゝまいりるの君箱のひさく
おさぞらふりかく腹のあくなる人の気そいふり
なりの素麻ゆゆくに左をうとのゝはかりすてゝ出さ
きるるの箱をなぐりてむづくなりにもくなりく
ちゝく御んからし家をろくして兼難こそこだわざ
そちらさいそく妄気ふおかりく中ごころのひそ嘆鬼の
行司々んどんさて出ねらすくれぎまん家くれ
稀さゝ大宮のかすくだりまんなるりまかのあゆき
人の世とけり。御びをしく人ついそ地を
うちこぶんざいつりよ先地とこのとしたね病
とうたし、こそりへ武ハあそく兵君とこのとその
身の親のむかしおまうすの足の肌をも
あれてどくまとハ男ふかむしくひさいて宿
る本朝そ底指のてく髪ゆへ皆はをせど
熱睡発気の宿乳染気なりつゝ行ゆく事を
のら文の動しげ女の身ふ句をねうさ
ねざちうしもぞなさて顔むをつし気そのあり
まし女乃つかいさつさんとひべきことなりなり

乃之記 三

此事ハ神さとかつて前とすり
し源氏三十五年の八月乃
こと、おしも大風ふさく。地さかりしくの紀る
地ふきたうし。すさ海しりをしてこし。わたりさく
大尾とのゝ之記といふく。暴風とまうこん天しの浜
子々さわの大わとのはうゝ中わかさ、みとこし
御しき。法いとよの姫君むねの、わとこ道
をふく法んとりけむひて。風のまゝたれよあなし
の浜くらの姫そのたへ来りありく。祇織をひ
室ぶね乃らへ法をみつかりしむふ風のさきおさる
りるこゝや乃えつくれつけて。かいむかうされのうす
やうなふわかゐよ 風さえ記む雲中のうふ世宿
ふもいさおくまたなくにあすらまでなゝえ。○此ひれ
かゆうれ此命の風さいりしく。大変まむらことれ乃
立海よふ多ひのふもいさおくまやもありし。いえんや
つりなる主なりあらさをせし石や相模へうゑありく。
にんことはのせんおくさまてうなかてみしも文れ
しもぞうさとよまんまかくてなまひさとつく悪之さし。
此事せ今とりかいまゝの親ふ此今剣の年よぎも
れかゝつくしゝくまとわりとまりつくとべうし

諸病らく薬方

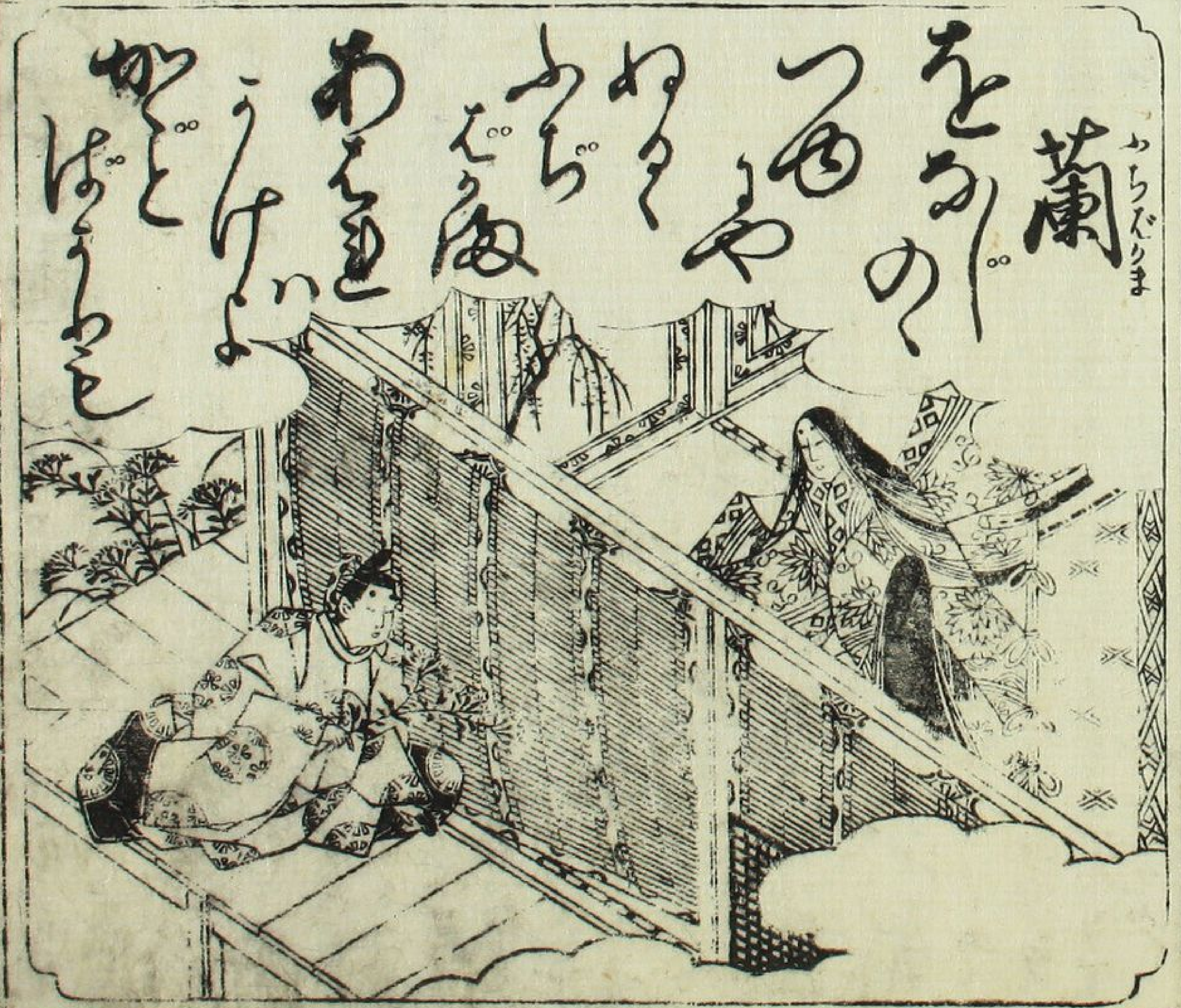
▲打疵乃くすり。○交指ほとにゆくゆく唯を
くくらし付れバいてまきまりるうるなへん
▲切疵のくすり。○みぞへしとをまをゆく
くぶれ其ハ粉かしてひねりかくるも
血どめいてさえなくしてぬすりなり
▲血とめ薬○へうく。かまい。○あさん
鉄のおさこをもちとも白ふとを入ひとりよ
ほしてくてそけ粉ぶし香ともかん合付し
▲死ふ痛ハ其ゆるゝ血うきの中へるかぐれて
いかむさ。○山梅等とせんトし一包ずり飲べし
▲癪根の妙薬。○ようぞく粉みしそ
さとを茎入さどうまぜうおと若おしいき
そこべの汁とあかり入すこの油まてよく
ねりまぜこしまぞ大さかしかまとひきあう
あつくのぜし付べし。ところへすいものでおそを
▲ま付くるかハ梅ばしの実とさりゝ松やふ
の粉鮮茶の粉不三味等ちふ練とり
合せよく焼そてとれ付くなし

▲こゝろざし盛なる所よりそちらにわれと
とりたるにハそのまゝ胸乃毒を治すべし
▲竹村などより見ゆれたるゆへぞうけ
の骨とのどへくらひ付たるにハそのまゝぬくる
▲咽喉に骨たちたるにハ雉のうろこを
あぶり粉にしてのめバ其まゝ喉ぬくる
○又桜實を粉にして呑もよし○象牙
の末を粉にしてのめバ喉ぬくる
○白鳳仙花種の實せんじてのむもよし
▲大蒜の葉。粉にして此喉中
へ吹付てよし○又あつき湯をぬるもよし
○鵞鳥のまをとつぶし米おしに付まで
あとなくいゆる▲又湯やけ火やけにハ
胡麻の油を付てよし○又
きせるの中のくねり付れバよし○又
小便のこゞと付るに妙なり
▲耳の内へむしいりたるにハ耳を
元服にまぜて耳の中へ入べし
鼻の内のむしを出すにもよし

みゆき

此巻ハ秋をとおなじく名とせり
源氏太上宮卅六歳の十二月より
三十七才の二月までのことなり。

▲ふくの内へ入たるにハ耳をさめてよし
▲耳だれの薬。紅とてくらひて入てよし
へ入てよし○又沢の所とこの中の薬
▲蜈蚣耳乃薬。いちうちう二味を分粉にして
耳の薬ハ髪の中よりさしこむ
▲耳に虫入たるにハ
▲口中ただれ
▲舌の

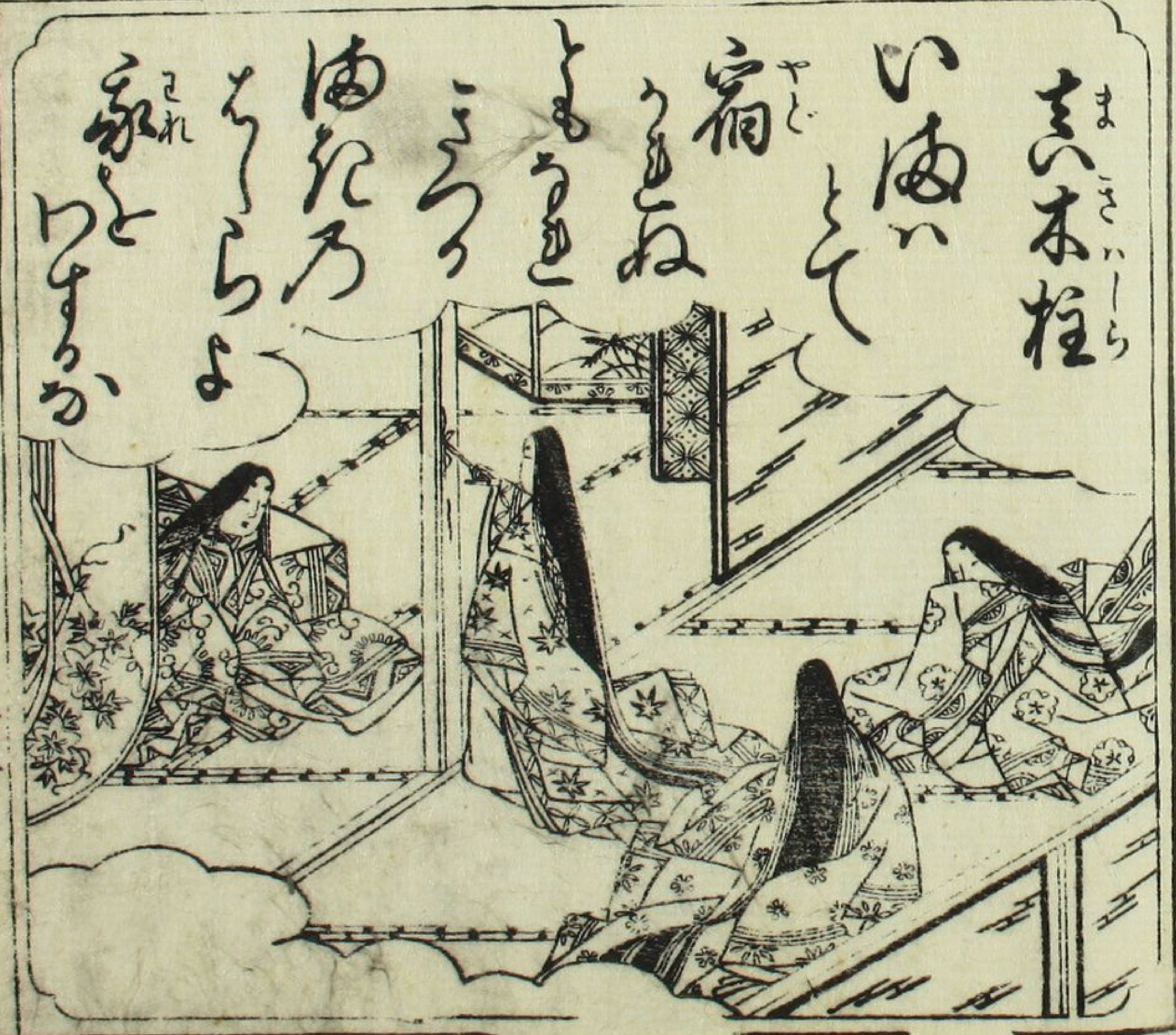


▲綫のどこめつまり戯ハ香道よりゆハすこしを
つきらぶ花杉より同るよ海るて候べし
花実ハおぼへおどうし杉よすべし
▲子ぢまじのれゆきこゆたぢやうとぞ
きぬ穴ふこゝみ是ぞすみうらやむし
▲同くさみ八朔紋をつぞ花ゆく花付て杉
▲すゝぢ花浅葉。又ぢハセウの杉ふきく
頭の花実をくうべぞきの使ゆく付たよし
▲たむしの葉へ。めゆりの海ったそむし。
よく千杉みして陸をめらく自ふ

ゆちえこ海 四

此歌ハ前とおとさんとぬりうくゑ
つきうりぶおてくにそらふとおもせ。
らぶねらんといつくき。すみえち おみえの海のこゝし。
なさらの木ね本らくの同ねのいをふくとひけくろの
むくへ湯うつりかくてみし乃たいこをそらしろ
此。らにの花乃れりしろさぞうんすの海よりさし
いれく浩紺をうまりてよみすへるれたりし
乃く霧よやぬりしぶちえう海わえれハかきよかと
えうわも。此歌ハ同しのよハ又こゝりもむろくも
清祖母のぶくさのへ。え。ぶちえう海とぶち衣のんぐよを
うまを。ぶち衣ハふくのうちさるあろもこれなしうの
つ海よねうしぶちえう海なれそおそうけもおえれや
四しめれ清祠もおまうしとし。むろくの道し
ぶぢねうにそ なたの尾乃つゆお えうすむら
さ花やかぶとなし海し。此歌ハむろくとゆふ
ころもの海ふくの几青ふおうれ。されえけろき花
ゐとハふへしされともえろろきのへといろこそう
おうれ。うすむさ花その海のかハおるへしそ
とのんべし。かおくハかふみけるしし

ころなづぬりてうしぶすずにもうし
○又羊蹄の花猫ぶざしくの根よりふ
葉を切くぞ本にゆくをうおし。黒く
おかで(ご)ぶらをむさりのゆてをり付ぶよし
▲なかずの葉○ めゆりみの葉ぶくらの
葉ゆいきのみぶ太三ゑをくまそりその葉
汁大ふ付べし○みぞだれ葉をせんじうく
おふひぞわよくいつそうとちらす木ふ
おう子付。あぢし猫へてわくひてとぞべし
▲いぞかうろうめさむしのねさぶをとりれ。
わくざの灰とおめくとれ紀綱の端ゆそ煮に
てぶうやくれどくにあぐ汁ゆくすそうし
つきぬぶりて葉と付まべにるなふるビビて
ようしに又綫海子のまなうをつぶりて付てよし
▲あざこらぶよハ○又ぶんやうと杉なし
磁漆ゆきくねり付紙をふさまそうくそ
右目あ目にうりうげりかし。解毒を
あふ一夜ゆでゆ藍をりわけてころりし
うつさぶいと二三度とおろかしてあざこぶ
のとぶころえげやぶりて付る○又ふうくよ



▲とうゑんおゝと紺屋のりのゝく練まぜ付り○又とひき の粉よ節のおろと押まぜて作るもよし
▲ひゑつう丸痛あるハ○延胡索と粉めして酒のくるあのめ だいお猪のせん痛ありてもいつゝくと治し奇妙なし
▲漆負あるハ飢白のかふゆと餅米ともとり擂 ありよく擂まぜて付べし是めいるる妙薬也
▲ごさし痔瘡乃くすり○ほとしごすのまい やさきご酒のわぶつてとつ付てよし
▲ごとごと針瘡瘡乃くすり○又倍子をとくり粉よして荷花もかへてもの仕で練りべし

▲りうごの葉をあくし糸と一ツを合べし○けいあん ▲狐臭れ妙薬○ろくせう○ぶし○けいあん白きかうらの看ごまから酒まてよくねりて 腋乃下の毛をぬきごさくわへひ絹よ浸くを わさりのねりべし○ろうとかくまかせる抱ん ○又田めしとあれバ巴豆乃粉をとつて ひ絹り入まぜおれとろく拙くぞのとく腋 の下乃毛をぬき後あし田めしのあんべ付 もべされ痛むなりいつむれバくれてを とさうゝ垂ゝわく暖もれゆある洗ひよし 丹参大そうや中麝乃あくみ角小三味 粉あてく付べし一代わきさうの根とよろし ▲猪あせあるハ○又倍子を粉めしくおかんそ練 春その中にうく浸めてあることぞのくよ 猿芦をして郁毛し二三夜も也つ妙く すまぼいつとすく練わせりきせのゝも ▲鼻血あるハつくろうの粉をとるかあさん入 てよし○又天南星をとりて合飯とまて練 練りすせおしうてあ付れバ鼻とあるく ▲かり○かびひきあるハ石灰○楊毒は粉めせて

むめがえ

此巻ハ前とおなじく光のつきなし。
源氏三十九歳の正月より二月迄
八のわころまくゝ乃ころのあそびおしくしらといふ
むかしの内侍ひぎらなの水乃うられなわかれ
ひきろのりの和のこといとのくきつ給ゝ
せいしかひきらなのおわろ乃りしまわか里
さぬれよわ水乃うくさうくへりどわあるん
まふその御むすめ十二三をたわすふつゝ
もしらのなおしとおまうの中へかうびの
めくどし へのまふ 内まゝりて宿られぬ
さうのまたのちしらよわまとあらめか。
わまれたそしらの宮をおろし御くるま
いま宿をとくれゆくとも。わかよわわさら
秋とわれおかのくし。小のうさ乃名る
こそは兄ひいつゝもなにうらをさうらら
給さ乃ゝしらそ。比びそそしらハとんのめのし。
そのむわるとのもおれさうるら秋わくまで
兄ひいつゝもわのも比やもそりのあくさわ
まくるそてかそくさそくのへくぶらと歯くるこを
くらのえんりよめくるてそ

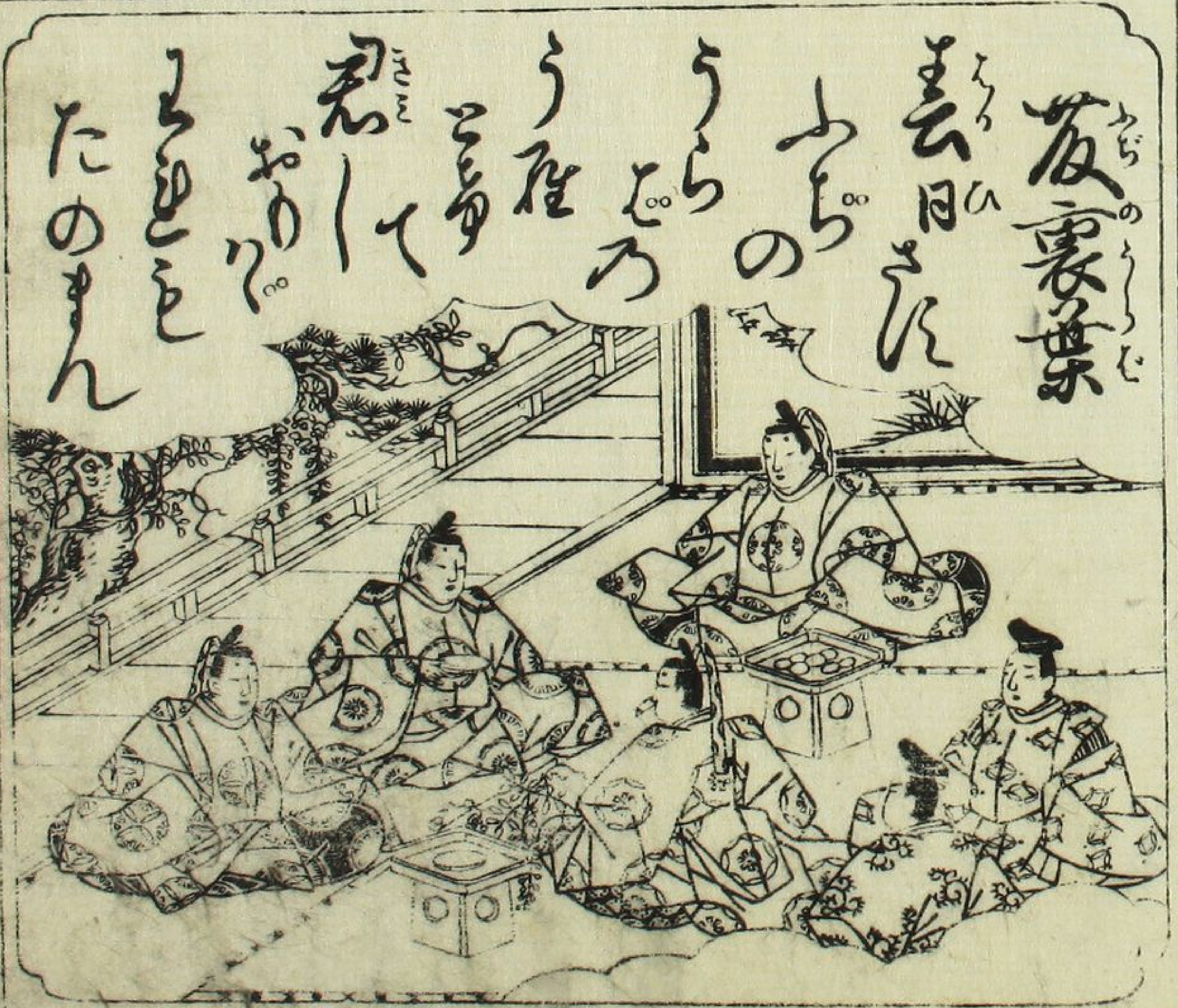
女こしけ丸薬方

▲女こしけ丸薬○檳榔子七つ昆布そゑて黒焼にしてこれを丸じ絹につゝみて付ゆくゆへむさと付。▲毛猿の…
そのまゝとおなじ事なり。二日めにかならず付べし。又蛇の皮を黒やきにしてさいてこれを用ゆ。それを一夜のぬけがらのちやさのまゝ。又めうばん(?)をおなじく絹につゝみおくに二三日付て。
又これ妙なり。又七つの内まなこあり。
○又川芎当帰芍薬各二分。
ゆづりは二匁。天味せんじ飲てよし。
▲おと鹿とのあるは角のさきありぞ
ひろあり。此薬は○青木の根と粉にし
古酒にて練り付べし。○又鹿の角を焼て
粉にして糊とねりかためて。
みゝの合付べし。けがれくろし大治を
手病とて重だ時は炒りし砒石をもちし
▲若き血虫の薬○焼塩と麝香をまぜ
白湯にて用ゆべし。きみよう妙薬なり。

ふぢのうらば 三

此巻ハ詞とうたを名とせり。
源氏三十九の御時なり。
なんしの君たちはわかれをおもひてうれひあり。
のうへの時なくのしむすめなるにまかりのちふよう
いちすわせんさいよんよりのあふびの君にもんしの
侍びにさかりひすくねんかれを待ち方にびんよう
とりはなるかれの思ひつけてぶんめのつかに
たちかれ。わかのはなの枝に白きあのつかひして
たゝずみいれる。かくさせりくれにひすひつけ花のなを
さぶひとかれあさしくもさかりし花の名もしらぬ
松にかゝりふぢのうらばいわかくも事もやと
花のさかりもゆかしくをかしきは句ひもはづかしそれとも
そこの時ろしはるかにさしあはくふかくあさしきを
きこしいまはわかそくさのやすめにたちくれの句ひ
ありしうへなへさひらきたるも色がらをかしき
ふりわけしうにすゑてもろふのうちしるべの花をそへ
ひとつのたかさぶれしきんのこゝろはゑにつく
めでたしげにかひんの心さしいろはしきもさび
ぶんかゝとてしむしいつもにはしろきたゝさ
ぬのもりかけてさかいさんかんもえるよみんし

▲おの中に瘡をやまいにむかひひ掃まの家と
せんじわたひてそれの黒焼と粉にして
うすやすわらたぐ粉にて付てよし。同おむ瘡
出るに流黄を粉にし付てよし。又とくの
花とをりてかさに包み小銭に重ねよし
▲おむやひて秘するに小豆のせんじかけてと
其のしれかさとれもりまぜ浜に入重べし
○又蘇とせんじ七方わたひてでしこの根
とせんじ是も七日掛わへてきよし
▲おそれいてむひに葛の粉と菖蒲と香
わの川湯にさそくわ薬し○又
こる雑葉とむしてひさりのぬき痛治と
▲おふらの毛たかまへてもやと是の
あふらかくとれてもりぬりてよし
▲おやぶもいまざらぬに羚羊とせんじて
なくわひてよし○又芋藥と粉めし
ありのけてよし又雄黄の粉ひ○うけて古
▲おの血いそこに浅まく出なり。紅花
とまぜゆりゆくてこれのたさまにさしとし
のは ころもまゝ入重べし例のゆく



○又蛇床子防風二味をかけてせんじてお
とおもひ又蛇床子防風とを粉にして挟み付べし
又薬とせんじて日に二度つゝ十日程おしよし
▲下痢若○おは猪乃ごとくうみたるおは
こそ〳〵のけ干粉をしいちうに入三ツ胡椒
ゆくもし付てよし○又とめいづくも耳薬
おし入薬じおもひ粉へめぐるとき付てあく
▲月ぬの時日の〳〵夜ぬ〳〵○蒲黄 続断
二々たの薬ゑらさんもろとん。わくさの
くき粉おして毎日のめど月とこゝろ〳〵し
▲子乃ひむをねむ葉○ゐ猴どもこ丘のむぶをて
一日せんじなりめれ大さ程おしてもれ猴
おのを薬どちゞをねむくゐとそんびうちなし
▲おひゑて気味わしき〳〵蛇床子甘草
甘草黄芩ゑ分 麝香二朱粉おしくちいさ
き梅がりとおれ丸じ綿おゝくをおむいきさ
明けたもぬ〳〵てい中るも○又甘草
黄芩と粉おし蜜をもく練りぬめ綿乃
ちりをおお入いもをうしぎ入いきうる
蓋二々を粉おしてせんじ切くおしてよし

「ぬちのかうた」同

此巻ハ〳〵なれ〳〵く〳〵て。
源氏三十九巻の三月〳〵二〳〵
まての〳〵〳〵。〳〵の〳〵の〳〵〳〵でも。〳〵の
の〳〵ひう〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵の
ちう〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵しがさて〳〵も〳〵〳〵
ねで〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵の〳〵〳〵〳〵。〳〵の〳〵乃
〳〵さ〳〵れ〳〵〳〵と〳〵〳〵〳〵。さ〳〵さのつ〳〵
ちく〳〵〳〵〳〵乃〳〵そのと〳〵〳〵ひ〳〵ひし八〳〵
のかこへ〳〵日され〳〵の〳〵〳〵のうら〳〵けて〳〵し
〳〵〳〵〳〵〳〵もたのまん。〳〵〳〵〳〵の〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵そのう〳〵うら〳〵〳〵て〳〵く〳〵〳〵〳〵〳〵れも
〳〵の〳〵んとの〳〵〳〵〳〵。〳〵〳〵の〳〵〳〵、〳〵〳〵〳〵
か〳〵〳〵かえん〳〵の〳〵〳〵〳〵〳〵すぐくうき〳〵〳〵
ども。〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵の〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵と
〳〵〳〵の〳〵〳〵〳〵〳〵ん。〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵のまへん
とき〳〵つ〳〵。さも〳〵〳〵し〳〵〳〵。〳〵〳〵〳〵〳〵り
〳〵り〳〵〳〵。いま〳〵〳〵の〳〵〳〵〳〵けて〳〵〳〵〳〵
ま〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵み〳〵も〳〵と
さ〳〵と〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵と〳〵〳〵〳〵〳〵。〳〵
す〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

「献立書様の事」

何月何日何者献立
本膳
鱠皿　羹皿
煮物皿　飯
二
平皿　二汁
引て
香物
焼物
臺物
御献
引物
一
吸物
肴

一 何月何日乃客殿斎
此時それくにそへて書べし
一 合乃字くハまう
飯と書てよし
一 本膳の汁と書ハて
かし羹と書べし
一 ゐ何物ハ其の〳〵
鱠と書くハ魚類
かれど膳と書てを
のか〳〵すなり〳〵を
一 本膳に鱠を〳〵つ
とかハ飯と羹の中
画のとかに書付べし
一 香物付て〳〵を〳〵る
飯と鱠乃〳〵る〳〵を
て書付べし
一 焼物と書ハ〳〵し

三 吸物(すいもの)川 冷汁川
肴(さかな)一 焼肴川
茶菓子(ちやぐわし)川
饂飩(うどん) 肴川
菓子川
以上

一 茶菓子と云てもよし
一 和物(あへもの)と云ハまろし
塩梅(あんばい)と書てもよし
一 此外飯ハ中八等飯(とうはん) 麦(ひぎ)
飯 菜飯 汁ニ冷汁
汁 菜の汁
鱠(なます) 酒(ぬた) 和交(あへまぜ)さ
抄菜なる乃献立さらにぐ
あそ云もわきまえて
ぐくまさるべし

○料理献立之部(れうりこんだてのぶ)

十二月汁之分

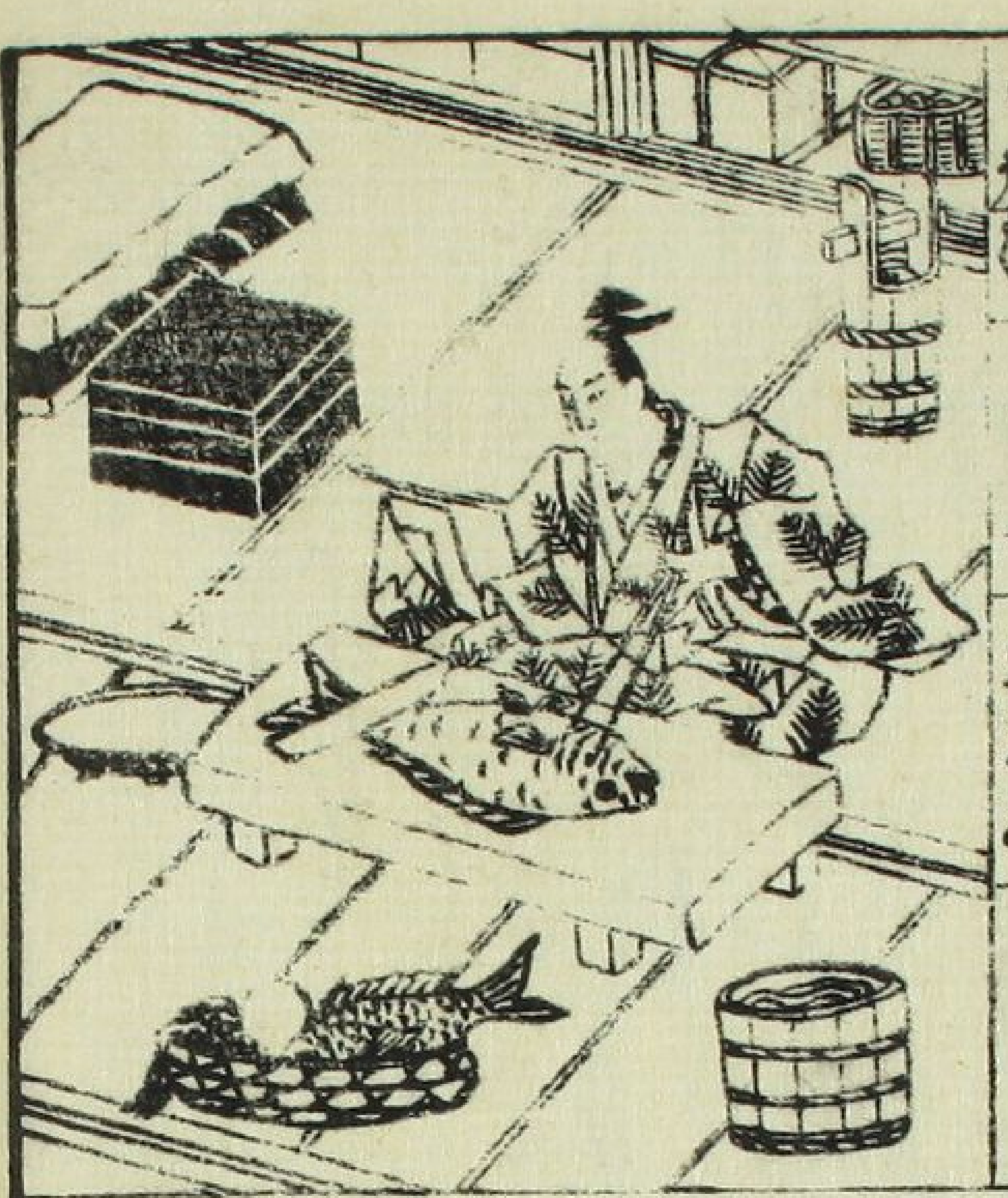
月	汁	汁	汁
正月汁之分	▲竹の子 うど きのこ ねぶか	▲うも ごぼう とうふ てぐし	▲こんにやく [illegible] いも
	▲大こん 切 いとこんぶ やきとうふ	▲[illegible] [illegible] ちいたけ	▲せりすり [illegible] [illegible]
二月二用ル汁之分	▲こわめ ねいも	▲[illegible] とうふ	▲こんにやく いものくき ごぼう とうふ
三月二用ル汁之分			
四月ニ用ル汁之分	▲ぢん うど ごぼう おとしみそ	▲いとこり こんぶ とりめう	▲やきふ こんぶ とうふ
五月ニ用ル汁	▲ぢん さくり とうこんぶ ふき	▲こんにやく なまふ 竹の子 とうこんぶ	▲こんにやく とうふ 竹の子
	▲あらめ 大こん きのこ	▲なすび 大こん すりざんしやう	
	▲大のさざ ごぼう みすび きのこ	▲せうが 竹の子 めうが こんぶ	▲ごとう ごぼう しいたけ ねいも
六月二用ル汁	▲やきこあへ きのこ 大こん ひじき めうが	▲ささこ ごぼう ふり みすび くりくらげ	▲こんにやく みすび ごぼう ずいき めうが
七月二用ル汁	▲かもうり ちさん めうが	▲いもまめ ふりのめ 大こん	▲ぎやう とうふ こうまん
	▲さり まつたけ		
八月二用ル汁	▲ぢん 松茸	▲うも おご 大こん ごぼう	▲こうらこ ねぎ とうふ
		▲こんにやく ごぼう [illegible] [illegible]	
九月二用ル汁	▲こんにやく 松たけ やきどうふ	▲白うと ぶどう 切 のり	▲うきふ ねぎ のり

わかな上

此巻ハ朝[illegible]つくれバつきらし。源氏卅九才より四十一才の三月までの事とあるべし。玉鬘(たまかづら)の内侍(ないし)ハひげ黒の大将乃北のかたにていつしかわかぎミふたりまうけ給ふ。正月二十三日子の日源氏のおん乃為に若菜をまゐらす。源氏の君[illegible]わかなまゐる乃源氏歌[illegible]小松とりつれてりの[illegible]ねといのりける。此歌ハ源氏さもとりつまざるべきと[illegible]。かの[illegible]ハ源氏乃源氏[illegible]ぐんじ乃源氏[illegible]小[illegible]のかんひやひきさそや[illegible]のこころをしらしとつひべし。はんにすく[illegible]人のよろひをひはれて[illegible]身もさしとうらんつらそて。[illegible]おほ[illegible]とたまりてとし。わかなの[illegible]んまそて[illegible]をつびきとて[illegible]れいなるり[illegible]のくわかな[illegible]そこのかれをもつまんとうなし[illegible]ときしたてしえんし[illegible]の[illegible]の[illegible]ねそぐくいそひてよ[illegible]

藤裏葉(ふぢのうらば) 下

夕やミハ
みち
たど〳〵
し
月まちて
かへれ我せこ
そのまにも
ミん



十月の汁

ぜんまい
ぶどう

あんかう　とうふ　こんにやく

こさし　ふゝけ　せんまい

十一月の汁

ふくべ　干　ちさの　のり

あさつき　ねぶか　のり

めざし　とうふ　くさぎ　こいのめ　あづき

○八てんの汁　ふ一てんは一の八てん二の八てん三からの付子八一盃

たいのかしら付こう立べいの付とりとの一盃

十二月の汁

ふかきす　大こん　くゞの　あつかく　いちくれ（？）

すゞきす　くさひら　あゆの　かうの三切

文あら　くずぶり　くうふ　あとさき

せうぶつ　どうふ　せり

わかな下

此巻は詞よりかくなづけられし。此巻も上下あり。下は髭黒大将の北の方の事。

すじには源氏の御いへし。十の下大きよりのさ。此巻は源氏四十の三月よりさ十七とす。かの君。源氏世十一歳の三月より四十七まで上のまくら源氏の御つくゑにて。まくをとゞめられし。しかし女三の宮の御ねこの柏木をのうれた（？）にあなたがたの女三の宮のゝのうちへいりて猫とつかまへて女す。まちて大まそのふによりて。女三の宮ひまへいりてなにとなくふにすみて恋こそ（？）まちわびらく。ひらやのめれとふ猫とのこと女房とひのこゝそくみをきいうせつりまおひそてまつりけり。そのうちかしいおのやわらかみとろんどのこつきまゐす。あらきかに入りかやをはなちよりく月まちらく。うへせこがせこそのまれをとらん。あれは女三乃こやの源氏とそらめきふつしくに入くるのこし。ひんびいうすくれは君もさぞかなれ月のいつかをまちらくろうへうしさもわくじ月のみちるまづくすなし　の君もこゝそてまつるれしのんもせとこれはかつゝ頃じよ行きて

雑汁の部

あいなんともかくにまるのぶ

さのとうりくさ。もうかとくすりくすりかへて汁ふきゆうなをそ汁とすくすり　だす。あさつき　大のちゃう　ふとからまみつとうふ。くきかくも一切まてもてふかこをうそて又すいくらとへ入てゆく。へてかきより入てとし。

どじやうとうぐさのてくれ切くら　ごぼうのとあさ。とへどぢやうとくろまのわかりにくわからわり。こどしどぢやうをさらにしあげるかゝし

へるみかんゝのかごと大根の子せり

あげふかとりうまかこつでさかぐら切。なけのとうじん。ござごぼうかそ大こんいもふとしこ鰹よまり。あわれさを入れり。

こしさで　大ちすび　こ切てで

かしみ　のり　へて

山のいも　ふさく　めうが　こつ

くじら　うど　みつば

もとを　すいくら

あわめの汁　ごぼう　焼どび　ふさい　とうふ　くらみあ　木の子

あぶら　ずいき　こんにやう

わかめ　とうふのさし　わぶう

あゆのすし　くり　めうが　さんのすけ　のり　わかさ

吸物　かうれん　こう

とぶいかの　ひろこ　大こんなり

わらび　ふいも　あとさき

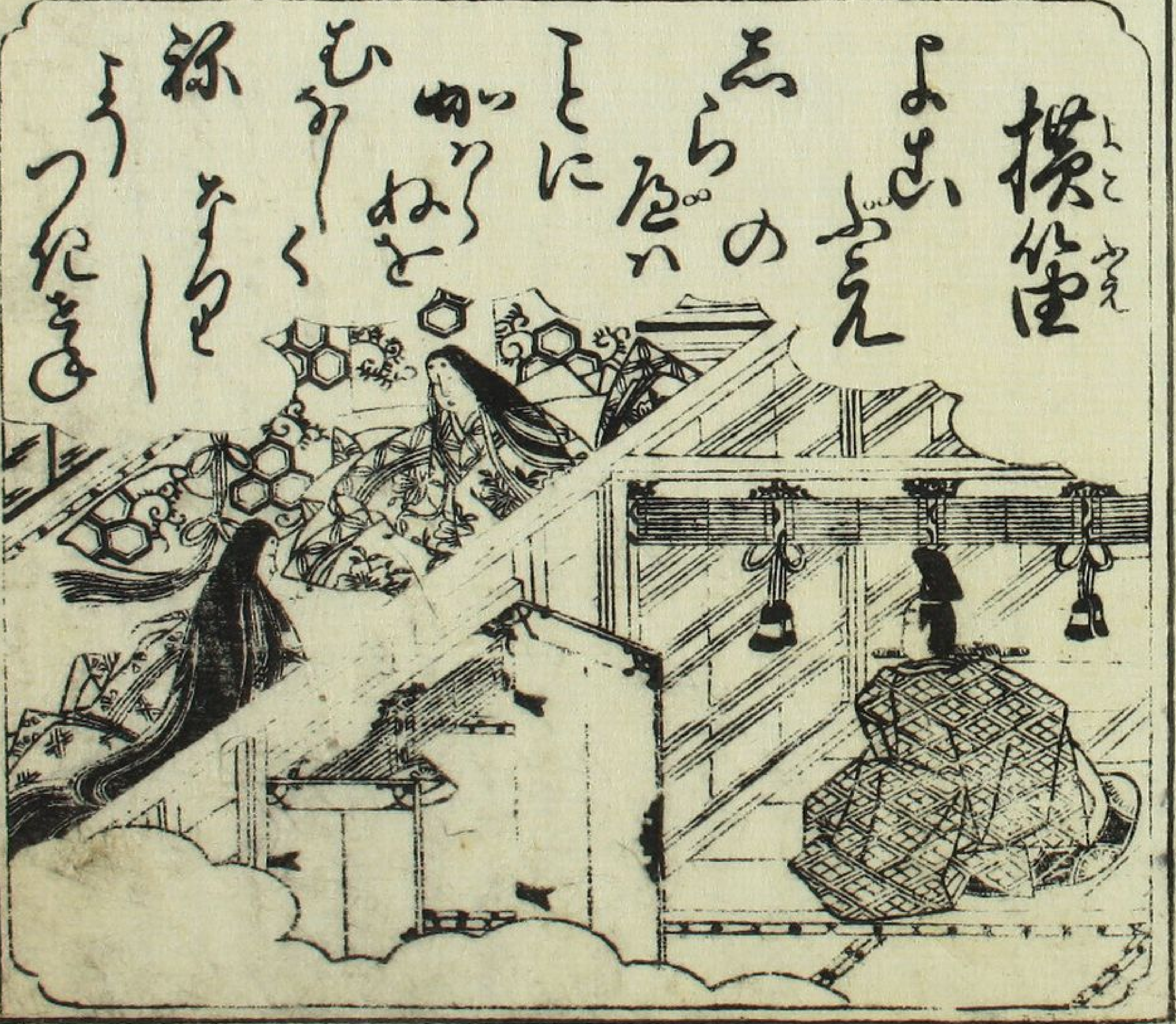
右は上汁のぶん

なますの部　十二ヶ月

正月ニ用ル加ます	二月ニ用ル加ます	三月ニ用ル加ます	四月ニ用ル加ます	五月ニ用ル加ます	六月ニ用ル加ます	七月ニ用ル加ます	八月ニ用ル加ます	九月ニ用ル加ます	十月ニ用ル加ます	十一月十二月ニ用ル銘	

かしハ木

此巻ハ謡をとのへてねとをうし
源氏四十八才の正月より女三の宮の
すまゐをとりまかし八才の宮かれハかくしその宮か
こゝへハ参りはしとたまかれハあんしその宮
すまひえせすひけり宮へかくさて
やすひうかれかわらとれかミのめのとふ
深とよびて女へうのときひてせうこ
よてわゐんなりもむすめ見てぬ思ひの
かきのふさん此ひそいまハときちりにわて
さていまかハふわしたかわねとも女三の宮
むすめて思ひハおのよくへしとし。あの
喜動のふてさと注よふてそえまうし○女三
の浅遊しかうちそひてこしやとかゆうさ
あふ注思ひ見ゆてりかりつくだし○此ひハ
りハむのこゑまいふしくうれもその蹴り
うちそひくさしやさん。いふのもの子をしぬ
思ひのみとや御らんとよミまへ見られもをに
うえむかし思ひの御ろあるわしての むかわ。
くふりつき給ハたでひ思ひとわくそふひなつ
女三も心をかゝりしそれでるとふくうれとのんこ



つくりかた[illegible]

右ハ料理之分なり

○かしのくわし 十二ヶ月

正月 大小ともの

[illegible]

二月 大小ともの

[illegible]

三月 大小ともの

[illegible]

四月 大小ともの

[illegible]

五月 大小ともの

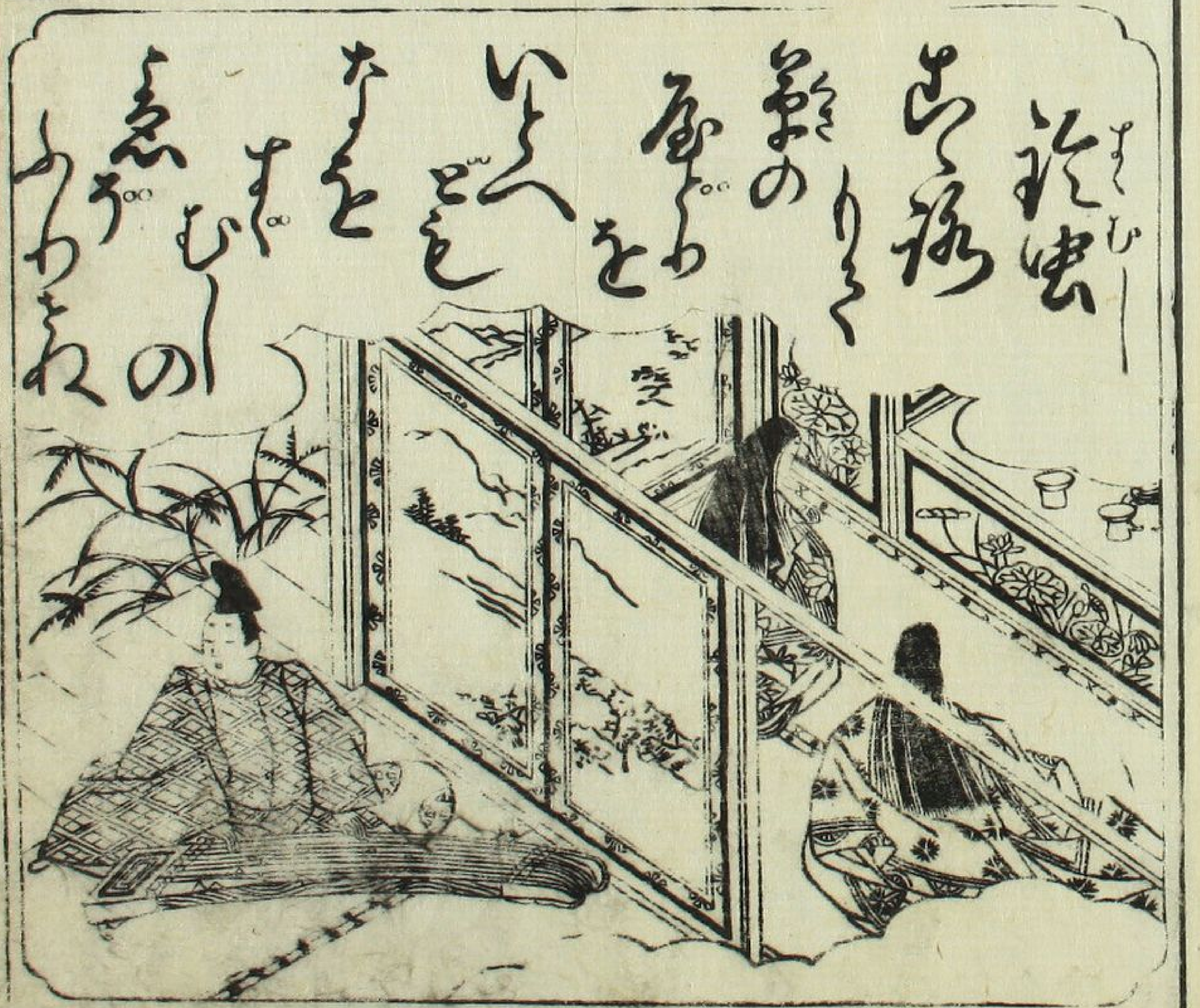
[illegible]

六月七月 大小ともの

[illegible]

八月 大小ともの

[illegible]



よみかえ 三

此巻ハ歌によりて名とす。源氏四十九歳の二月までの事なり。[illegible]

八月十五夜に[illegible]

[illegible]

○[illegible]さしミの部 十二ヶ月

正月ニ用ゆさしミの分
▲なます わさび うしほす
▲又たい ますすゞき くらげ
▲わさび あをぐり うしほず
▲又ゆでだこ つくし ぶり りざけ
▲さしミうど[illegible] ▲あげふ[illegible]

二月ニ用ゆさしミの分
▲こい ぼうくい(?) りざけ そ
▲白うを そゝ[illegible]
▲ゆでたこ くらげ
▲又[illegible]
▲ふ[illegible]

三月ニ用ゆさしミの分
▲[illegible] [illegible]
▲こい [illegible]
▲つくし りざけ
▲のり [illegible]

四月ニ用ゆさしミの分
▲[illegible]
▲又 [illegible]
▲こい [illegible] りざけ
▲[illegible] りざけ

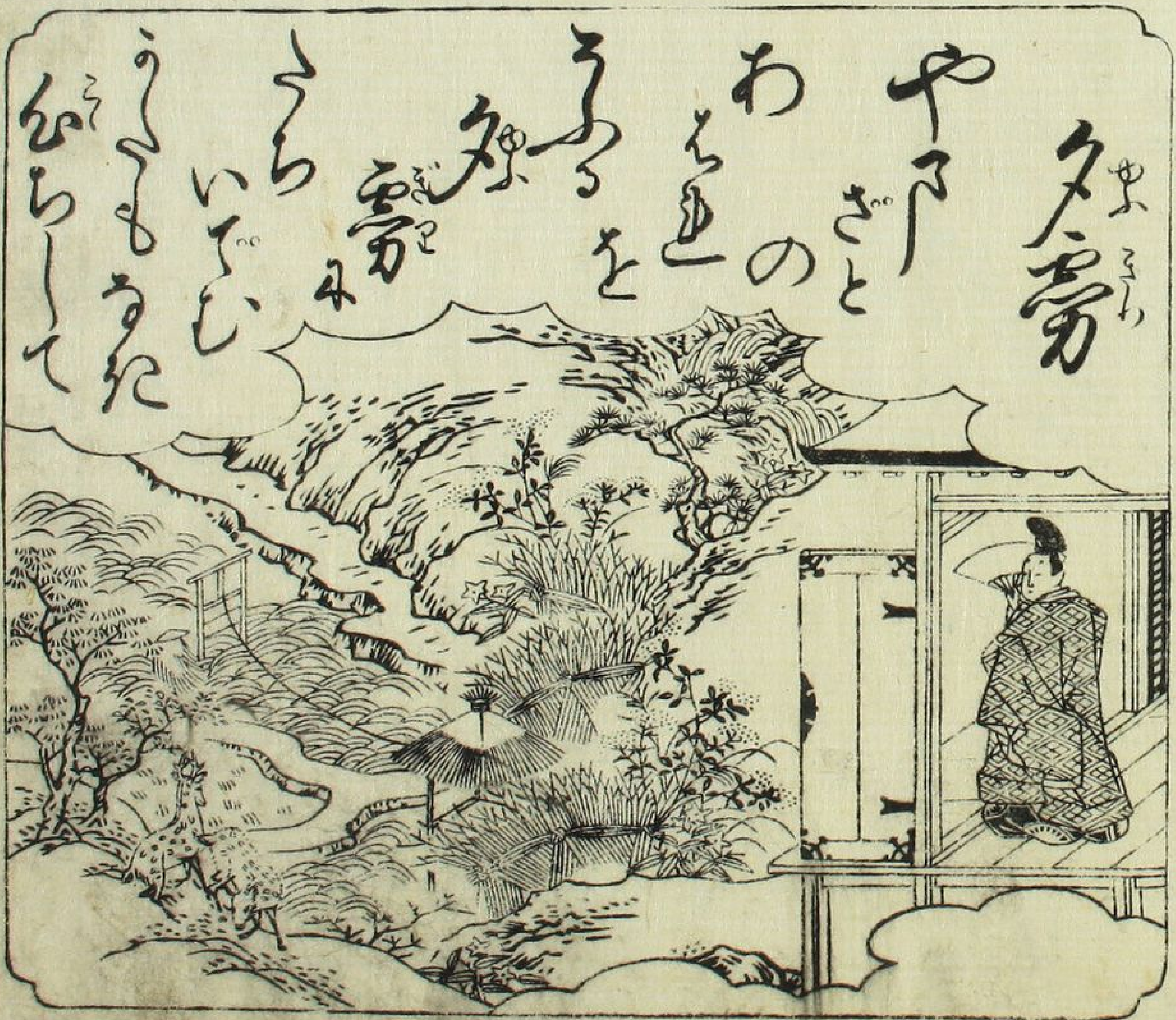
五月ニ用ゆさしミの分
▲[illegible] りざけ
▲あぢ [illegible]
▲まなかつほ [illegible]
▲[illegible]

九月ニ用ゆ[illegible]の分
▲[illegible]
▲[illegible]

十月ニ用ゆ[illegible]の分
▲[illegible]
▲[illegible]

十一月ニ用ゆ[illegible]の分
▲[illegible]
▲[illegible]

十二月ニ用ゆ[illegible]の分
▲[illegible]
▲[illegible]



すゞむし

此まきハ柏木と横笛のあくる
つぎなり。源氏五十の歳の夏
よりあきまでのことあり。八月十五夜の
月すみまさりておもしろし。源氏ハ女三の
宮の御かたへおはしまし。女三の宮ハ仏
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
源氏の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
源氏ハ[illegible]

六月ニ用ルさしミの分

- ▲すゞき作りか ろうらん やきあはび さゝず
- ▲こちあぐ たで さゝず
- ▲ちやうじん こゞりの鱠 くずびのり さゝぶ

七月ニ用ルさしミの分

- ▲くずこいり さゝずご そぞず 又いつもの川かの いかだ うしず
- ▲もぐさ うどこり りうさけ まさかり かそつり くらげ
- ▲ちやうじん かすび うんてん まるてび ちくらけ ふ

八月ニ用ルさしミの分

- ▲あかめのすゝき ひざくの川 せんこうり こけのくすま
- ▲そりくり こうまかか まさひ りうざけ
- ▲生さけ 生川さけ さうつもて りうさけ ゆのす
- ▲又ふきとこ こい りうざけ

夕ぎり 卌

此巻ハおとゞのつくなるやうかし。源氏五十歳の八月までハず
り
あり〇此巻ハ柏木なりし後の十二月までをと云
せ〇夕霧の大将ハ忠りんの事の小野の宮にちら
だのみや。その比たる文めのとにつげてひきひ
小野くらりぬるつれ〳〵夕霧ふでよせらるゝ
まひて一夜を泊ておひろし。夕ぎりの清宮
山ざとのわすれとそふり夕ぎりふさらきん
うさもあさましらして〇此ひとやぬざとれ
たゞさくも地あられたるに御して夕ぎりの立
ゐぶそくうちくるだろさやうもなし〇しるし。わがへ
おちばの宮にむとりけるふそ御かへし紙わすれ
かふたるべし〇落ばの宮やかくし へひめの
まうれをとぶらくうちさらもひとくそうれ人を
ごぶられ。此ひそて〇ひろしたんとれ宮くく夕
ごりの宮るにかりまりり夕ぎりのくまら御き
むのけりくろかざやうの人へとそらへやさし
とし〇又のひハ夕霧のまいでん事もおれ宮と
おハくるといそく人なかさやうにむつゑおり
人とぞ〇ろらりやしさしきのむかれ

九月ニ用ルさしミの分

- ▲いさご かさこ ひらけ かりさけ
- ▲わかびせんこ さゞいか わうゞいか しやうがそへ
- ▲ちやうじん ゑふす おどのり ちのつけ ふ

十月ニ用ルさしミの分

- ▲ひらめ うとしず
- ▲又かうら わうどいろしぞ
- ▲うきさい こゆへてき
- ▲ころくい花の川を
- ▲ゆりしめと くぬぐり うぶしす ゆのくわ入

十一月十二月ニ用ルさしミ

- ▲いしい ゆそくこう りうさけ
- ▲いかざ せうがす
- ▲ふり こさじゆそく みじんそて
- ▲みかい ゆぞき けしず
- ▲うりのわた ぬき まさび りうさけ
- ▲ひらめ そうけ りうさけ
- ▲ちやすご わさい くるしす
- ▲ゑふす うんてんのり ふ くろくい

○あへもの部　十二ケ月

正月ニ用ルあへもの

- ▲あんかう のふくろ うりわく せうが まさび りうさけ
- ▲ちやくこ よあかそけ けし さんせう
- ▲又わか さんせう くずきく
- ▲ちやうじん せり ちんまく ごま
- ▲又みかん うりし

二月ニ用ルあへもの

- ▲たこ けし つくし
- ▲いてくこん せり
- ▲みせう くだらの うちのされ さんせう
- ▲いかりこき こんにやく
- ▲ゆみて しやう
- ▲あかりまりて わとくくしう さんせうのそ さしみ
- ▲そりまこぶり ごぼう
- さゝいと 中あと しておかつけ
- 柚まつけて よこかくふきう ごまさんせう
- 同上

三月二月九あくりれ

四月二月九あくりれ

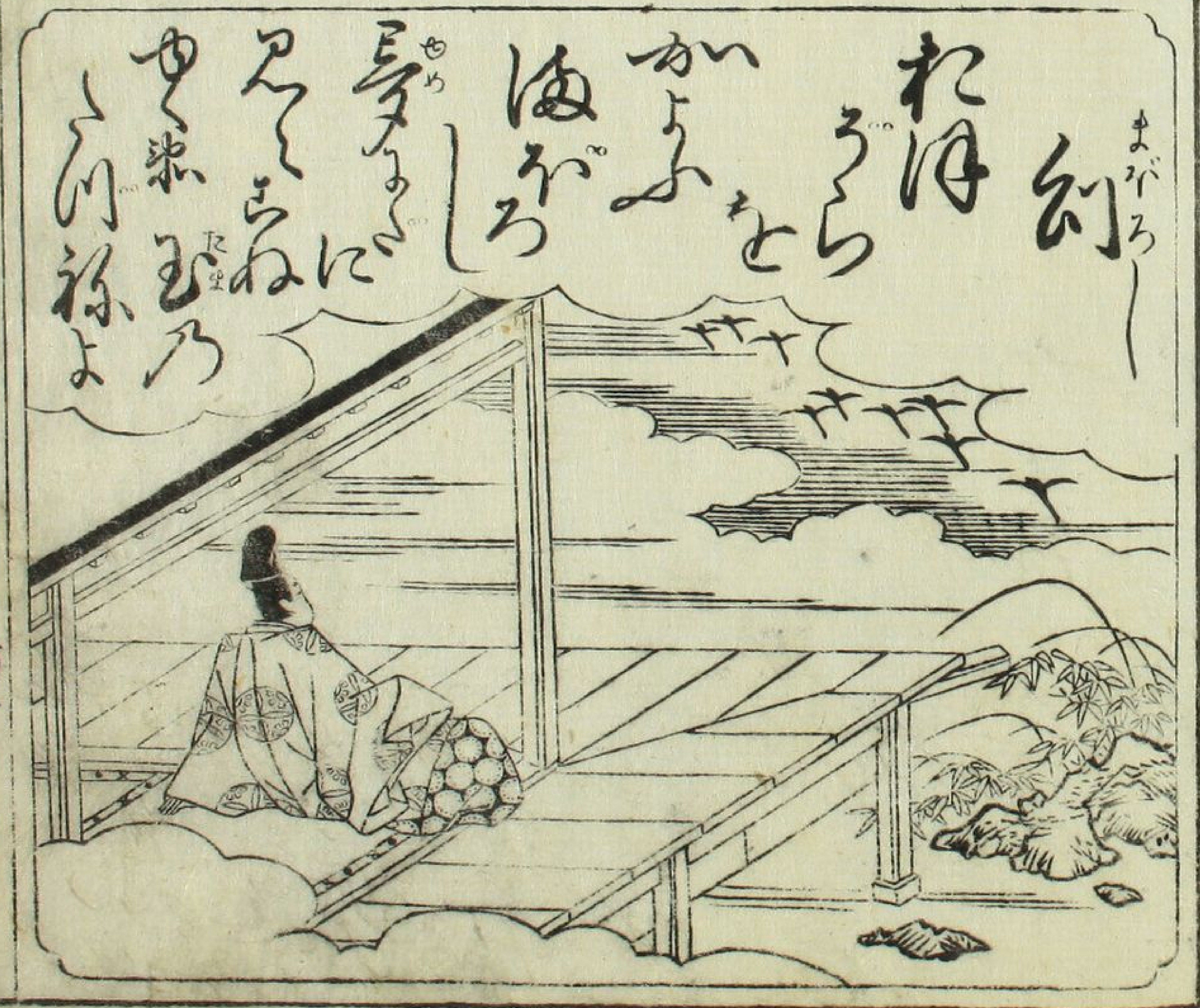
五月六月二月九あくりれ

七月二月九あくりれ 八月同前

九月十月二月九あくりれ

十一月十二月二月九あくりれ

[illegible]



[illegible]

▲ようかうかぐ　みめすきき
▲せうぶびのり
▲むめがし　のり　いろかけ
▲ゆうふこおみのこさるゐとりあふりてのりと入
▲あかびとせんまきり
▲白うとを　あふりてもう一ゐ
▲こゑび　こうりこんにやく　まさこびのくき
▲いうとさいのめにきり　のり入
▲りうげ　ちうだぜり
▲ふのいも　せうが　あをみのり　くり
▲までみ　くろまめ
▲みし　めうがの子

〔さうめん汁〕　又名しやうぎん

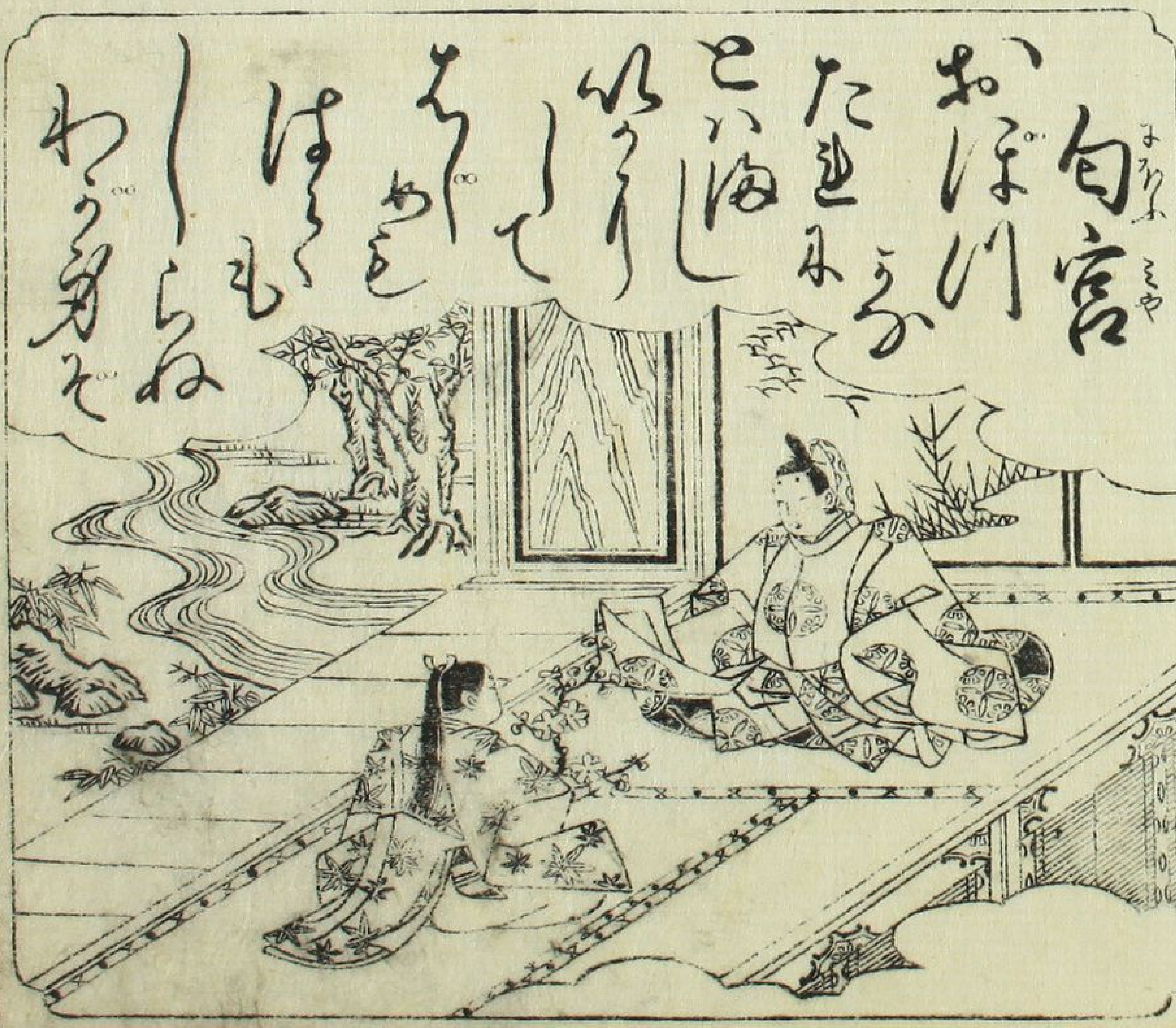
▲ふくろことをりさしまつたけゆうそ　ゆかにようけあぶり胡椒
▲こんにやくとうふとげけとあぶり大きくきりて
こきうのことふかべし
▲いつでんがく
▲むすびこぐちぎりあぶりまひし　あぶりさんせうしそ
▲らんび　ろう　あとのり
あかわどうそくさうのでくこさり
あかめとさかあわせ
▲れこ　あかわどそくきりゆのさうそ
▲さりしやうがくす
▲たいちうすくきりてゆのさんせうこさり
さけ　せう　やうゆ
▲くさうへのことあぶりとせうのことふりて
志ゐうゆは中をそ入
▲うへつくさくるかこそむのかへとりてうりて
ころもにかくこつけてつてひのうわそのでく
いうれこきりてつぶす
右料理ら三教経大がのくれとし

「夢ぼかし」　三

此歌ハ歌をよろしく名つけたるなく。源氏五十二帖の正月より十二月までくと源氏にそくしら源氏の此巻のうへをこそうれん。月日にそへてたまかれんかとおもひせりぞんじ乃歌よ「おぼろげに」かよふかくれ。ろしゆめにぶにやてらねかのゆく来らぬよ。せんがんじそでぶ隔りをこえかひて。かの魔乃ぜんそうくらてい乃使まて。方士がぜんちゆつとひそ。ひぎやうじさん、とわくらして。よくうとも。くきらつのよこ也下の玉あうらいさうにいたらく。たうきひのきんちくにおひそてまうりしまめて。わきぞ今そふかもこよひにかつ見むそうしたり。おぼらくて太真かなかうふまなびろしの志ぬ川わたくぞ。せかく玉乃ゆく来るらぬくゆめにさに。あひされたりしとつきよ夜ぞなるさもいんそうと。たうきひのしる給ぞなしさう長恨歌といふ文を蹇鬼曽来夢不入とよてすわりぞそのんをよみまふし此ぞすぐくもきれのうへを忘まふて給ずわらそしさうびんじもちの品ひくくついゐりくくれのふをとくてもぐしかいてき

有馬湯乃山由来

▲摂州有馬の湯山温泉乃旧趾ハそれのと人皇三十五代舒明天皇三年秋九月此所に始まりし事也ふかきの湯乃涌出る事ひとつに始まりしより也その湯のふしぎなるをもつてみな紀伊の温泉になぞらへて湯の涌出るなり。されば其時三の月湯つかさ入らせ給ふと云へり。まことに見に残る人民の病者を治せし温泉なるべしと書かれり。是より湯山と名づけ此製
○三月のしの湯にかよふ事紀乃まで
うさ物もかならず七日くすり
この月ハ中月ぬすくらわくらわかう
其のきたうちらくかうの湯にかげをうし
入て満月実ぬの姿よかるとのれんそうん
▲同十七年大念乃紫ゆふまきを○又聖武天皇の皇居
孝徳天皇の御宇三年十月朔日に幸まうしくて
武庫のおんとうの遷御しありでたかく武庫を
りつまつりの行幸なり
▲人皇四十五代聖武天皇の御宇神亀元年甲
子の年行基菩薩このの里崑崙山へ書をる

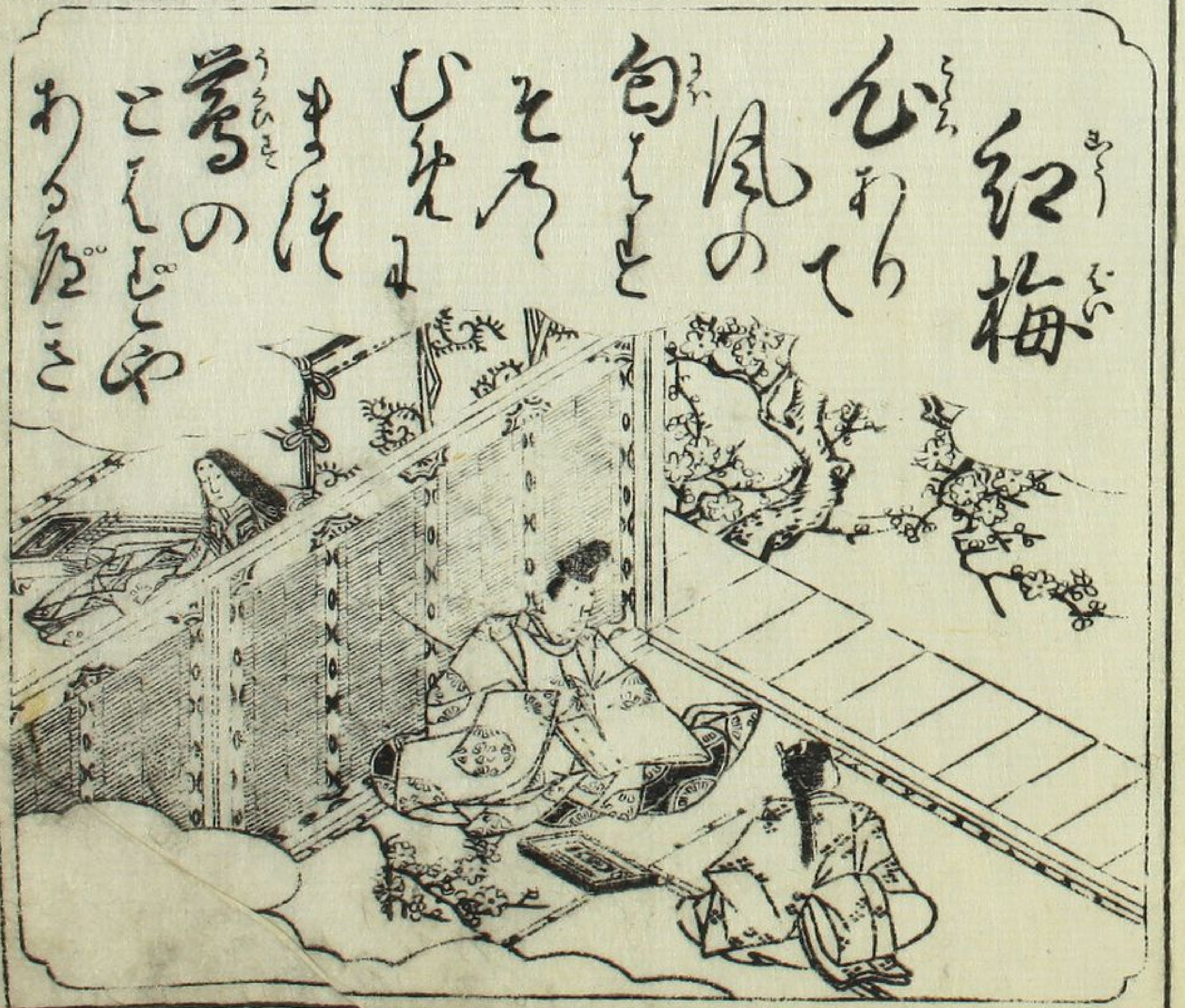


入せ給ひておんちうきすの家に温泉山の〜ちらへの病まで薬つてこそのさしちらぬ此山中にふかくなりて終ふ基をもんよ皆はなくもがくうしのあとく病文のぞをゆへ海をこふとりなきたつかくつてもゆひの事へころ病の事がう病ありて末てかへの病まきぶひの漬氣をしかむくのち病人申の此まりの家を所別分のもでてれ肉中ふ出まへしよるさうく病をしくわが腹血と称ふかもとをもつくあべつしもりうかの基をもてもいにかはるも

「はやり歌 四」

此歌ハ納言のかくなともゆく曽ことのさらへへばくのかれの事ことのふかくおもかくとのちにきりれのよも名をよかかくおとこへばかし。そハ源氏のくまるとかあまこを強ねとそへはわそて納言さしあのあふよう給をあれのれくしとまるれ。あかいしのかきそてみちし。おぼつかなしや元服の事わが此よりよりすへ二つまく十四日年やるそとなりまの二つかち。此のゆかりあれハのすみそのもちくまにでかつてら。ゆかりの日のをつる小判へのらそのもまつとしいのがにしてへしやまえとつぼつよれたかこいゆーいかにしてくしゃらる。しらぬわが子そ。これハえ世まりし清の思へんすこのそにえかりく縁まのひし清子なちもえ世たぐんじハさしぬよしまて縁者のおいくいくそとしそくわかされたらぐんじの清子のやうてまもさんかうわくさかやうに思ひのそぐ。たしかなうて給まうまう人をさばうちうまびく。お儀つ出とハのまつり。こまうはる一世のうへとあひく生死のえぐやもたくをもわもおうきる経をうくんあらそしちかささおふかわせきの納まさんげうたいしのこちうおにらひかんさうかよもえてしうれとあうちわ

病まぐへさいふすせまつては気府と郡下 石像の薬師を据りまつぬ法経とかうこ 温泉のそこゆどそうふつうき一切衆生病を めぐりて拝み給ひて救ひ給ひも 今の世ふ行ひの本尊基弗病文にあ 為て薬の一ーある事内の事とその池なる らすへの中にまく今の世をかつ世ひとゆす すかれの所ほさうかすり町そくこその池ふ行 免への大そ所めてと言ひ也心の事と合とよるへ たらま池癩病とめてうやそれあるふ入合わ 病まかの薬のこうよす泌せのあとかりがうか ても付ふるぐやい病人たらま此全う荘厳の 仏神となりうおもつくこれこれ温泉山の 身の薬師こ海の精誠の乃かと云乃んる方便 とりて病まそうとよるへく仏縁のれをり 中りく海いまうりはのちのうまのありと 温泉の屋ふ望りも湯乃山と開基する末世 衆生の病若と大をけようくまのひとくうよ 生させの一入もの基大きふ得郷もすひいそぐ 仏神ふれせ温泉の屋ふむかしのむかしいさうろ



▲一条院乃御宇長保三年やよひの比家
ちゝきさき信州諸宮山に於て御らうさふ湯
山に幸し温泉せさせたまへるを先人案ずるに
ふまつくる入鐵が月のさかりのおけしゝ大きさ
なり三〇りなりとも名にまかりの秋のなを
ど月のさかりを名だ当てることあり名で
信濃のちうれて名ぞあれく〇りしとうを
ちかうれ浅間の名やでそれて月のさかりを続
う業〆ところ名をかえそ先ぞ古のすこし
▲人皇七十三代堀河院の御宇寛治の比
て后をさんく ...
沈湯して一日に破傷せうを経九十文〇ある
え言つのさざすなく ...
▲ ... 上人
とて ...
れ ...
と ...
る ...
あり ...

「こうばい 四十三」

此巻ハ胡とりつくあつまうくし。
乃さくさき紅梅のゆくれりしろく
匂くらうとありて。此巻ハあぜちの大納言ときこえて。かくて
むかしのあそんのゝこれおしくあらく。世にさかへたまふ乃
このかのうへハひげくろのちゝ乃ひめすわう。まきばしら乃
くしらよこれをりすつおしよみしし人。兵部卿宮の
人のをやまかりのひしがごやかくせかひしのち
大納言のうへまゐりのふくやにひおえひしうる
枕をしわ。此清うらの旅よりつうし紅梅あり。
まく父大納言。此の梅乃枝をおりて
のりへぐまとあいのうすやうに ...
つかすふ宮に ...
乃梅にまつうくひもの ...
ひハ風のひおりく匂ハすのひあすハ ...
いふとハわつドとし。下むハ姫君の ...
うれくまつ ...
宮とごやにたてまつりれと ...
お梅とまつりすうしばむおうれ ...
うくひそのこゝれとさきすな梅 ...
えをとうくひをとれふしつくいへるなるを

▲温泉乃寸方之事。横の廣さ二丈二尺五寸。奥行き三丈五寸。深さ二尺八九寸なり。淨
○一の湯 ... ○二の湯 ... ○湯のあつさぬるさのかげん
何れも同じ ... ○湯お疫害を記する
四季ともに同じ ...
一中風　一脚気　一背ひえ
一頭痛　一打身　一骨ぐけ　一金瘡
一痔漏　一下血　一胃虚　一労瘵
一虚労　一産暈　一疝気　一疥癬
一血症　一三世瘡　一麻病　一腰気
一白血長血　子のなき女人此湯に入ば懐胎を
○此の ... 金瘡湧出の霊湯なし
仏神加護の霊泉なれば ... 男女ともに ...
入湯の時ハ ... 脾胃を剛
し食をすゝめやせたる人ハ ... 肥
肌膚 ... 疵病のたぐひも
うく ... 湯治すべし
一生瘡　一癩病　一痰病　此三病の人
お穢ぜざる人 ...
を注くらし ... 縁起并湯文にあり

たまがは　四

はじめハ京と鎌倉ばかりなりしを
すゑ〳〵国々のあまた十四ヶ所
しまくれのこし乃正月より七月まで〳〵すく
又此の年乃ことわりむかしの四條乃さへの所ならず。
をとこごゑこゝろ女ごゑふるきをとぞ。ひさごの
うせすひくのらびんけまふん〳〵かはらかみの
鐘乃の治子繁んのかね勝んごろまさ〳〵て
そのおのかしまとみとまりてせらるそのはかりのハ
十四文でうりあるとぞ。じよふとむかしハおかりしなり。
国々の浴るまらにみかく人多く〳〵とらしられと塔
そむかつも姫ぞみよわくせぜむやと思ひしかえ。
ひめの花さらゝに国々のそとらしくなりしされ
国々のりしまてむかしの姫ごんのさへ
竹川乃ごらしらのぞし一編しけりさむのうこ
いしをさや。はむハごらしハ橋と橋とをゝて
ゆるてあとかのゝしうらのそかひとうかさるぐ
むハえそまふうものんく。姫君ゑしハふけごれ
にようふかうじとのそだしにいうをかうしを
思ひをとゝ悔し。はむハわが身と早に下りしてかこ
ちるうなしぞ早く流ゆあかいをむとゆふつあきらかし

○温泉湯治養生の事

▲凡湯に入ル事ハ先まくらて湯中をくう
ぐひそして心経一ぺん薬師の名号ぺん
となへ〳〵ふとまで其のち湯に入べし。
ゆいそくとわらバやくしのこゝろがう
むらりとあるべし

▲硫黄湯弦虫にてどのへども或ハ冬の湯又
尤く味乃湯あり能ならひわのまハしけれ
湯ふるくかをどこゝゆへとくなくよくされ
ばらんと咳め。毛川とりの風としてそでげ。
夕刻宜すのとくどし。氣をまよくどまた後痛の
玉をはするのハ湯のとくふこへかりわかりし。
去つ一般ぐしゝかそりかなれバとてはよく
ようしれば汗あさりなりわくくげつきのひ
らびひ湯ぶさかりひと痛けなさつよく毛を
てぱらは泥にあやすもあそぐとまで酒ハ切ろ
くのまふかなれバよるかぬりりて毒ぬ。
酒ハわがらうひのうまがれどもぞくれバわち
とうしなふがごとし

▲大ゆる毒冬に入ずバ二日ふ二度なり

くらしかねたる老さらぼひたるさまにてかくの
ほかにこころうつさむとて大きさかならずべしとぞ八
とうもうつわれとて しづかにとくわかき人
気のつよくもえまさ○とすべからず 深く
湯殿に入しくあるも第一あらすべからず
ゆかぬらことかんとかわ川なる緑ついて
なりぬる緑川これかぜと秋にのぼるかんくん
のりとひなり
◢まちくごこちそのまゝゆゝへがちにきこゆとて
さらくなどやうすぞのとほくよりて
てあんしやうくわづらひ
◢ただのの湯とてよしわるべしとも
かくせむかたもなくてありけれ
こくふゆふかのまへておかりてとなす
のむべし
◢やまひのほのおさまりくとおちてくる
へならゆかやくにうず一日ふたとりしへ
二三日ゆとぬるくしてろ湯べし ゆまひに
ようて三びしや あびしくらう湯べし
ゆぶ○のへすゆらく わりくへうくけるぐ

「しひがもと 四十六」

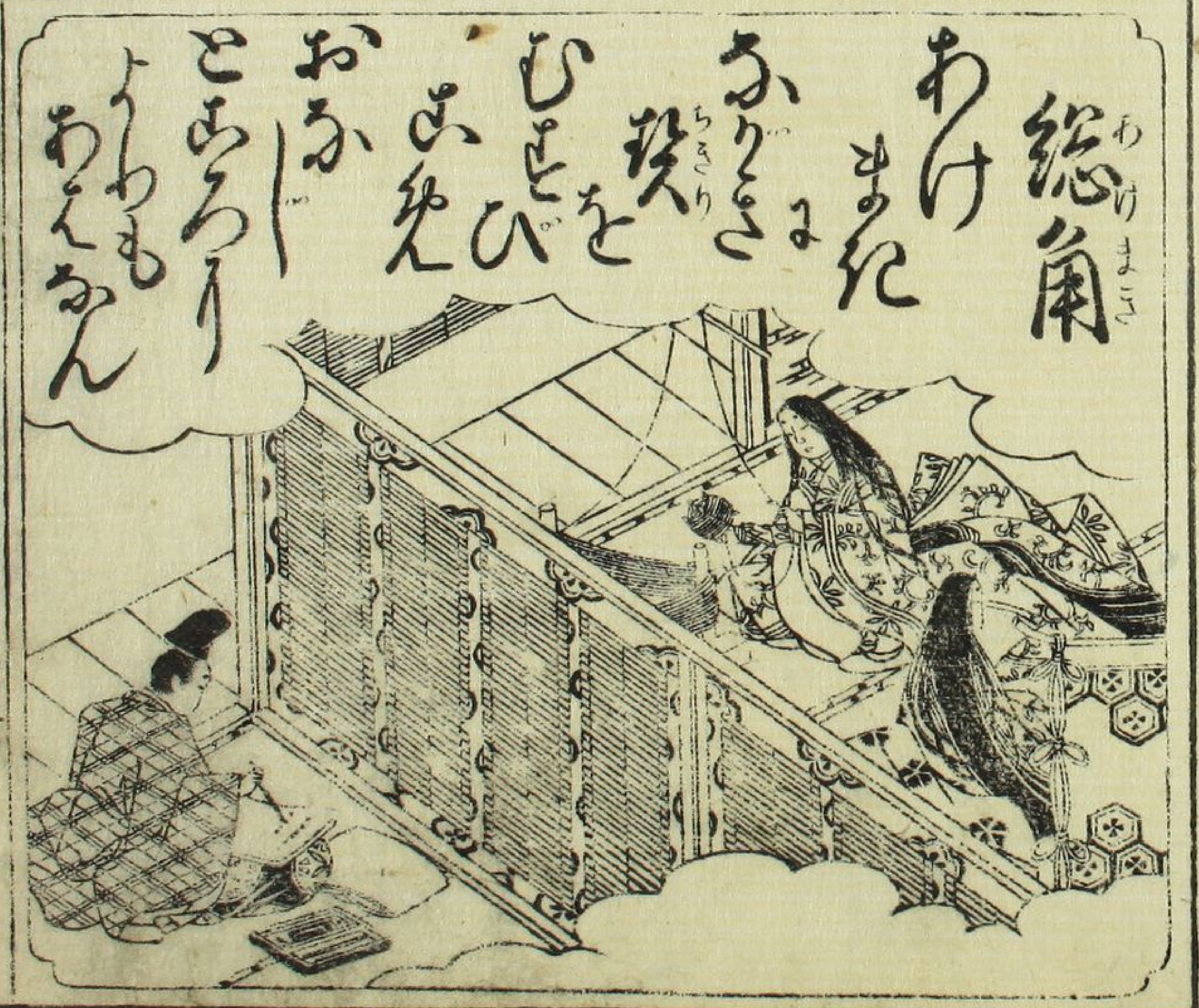
ひたぶるに歌とおもひたまへてなむ
はらから十九丁より二十一丁の末
までのあいだは宇治十帖のうちなり
宇治より九条さえ八宮のうへのことにて
八の宮けんじの御はらからなり
八のみこやすらかに宇治におはしまして
ども清んもろりてかれてえる 緑の宮おはしつう
しくふ宇治の山里乃まつらにうりほとのふ
ゆくぶらのえもうたゝくのえんもすくし 姫君
一人はおかふびえたにてくのたふもさらし
またかはあまりてるかはふふ姫君もおひ
ゆわりさてあはつのよとまふ 八宮のあかを
くるくにこゝまれかはの二づくに神かうぬはねら
いん八姫君とうしめゆよそてくい八て○お前に
御らの方 はうまつらが姫君のお方あまつきくと
おかのまふむとくるくかはらの社をぬらさとし
宇治川と舟わかれやし花身ともに八宮のつふて
とおろ網をとうりくいろべし ふうく思ひ入れて
まかるうえなる

のこくはうすとてたやすまからぬ長し
これかうせんやくわとおもやうまります
あらそふせひの日本をうくべし かくさけの
人ハ薏苡蘗又中風の人さくとせずて
かくとべしゆとくくれて入りきうりなり
こまにゆくくそ節くと見ひてもろし
◢こくゆくのうらせほいれやどやくれでとく
なるべし極てらぬやうなん人の気
あれからずよのつゆれざし
◢さうぢのうち蒜の緑をくべからずとくにゆう
ゆわかうたいは緑つれどもあせくうけるの言
ひちびひのやうらこれさとそうたる汗
とますすくまろし秋冬の湯ふあせの
あたうはおしきなり
◢こくふくらんどとりくすかの寿のどく
ならゆよ刺出くと二三ちかのそくへへしび
◢ゆきてうのびくまのなかまで
たどのかいざしうどすべてくほ
◢こくあくとあくとせずしぬも
ならぬうの人ハくすりくらず

▲やまひの床にふしてくるしさのあまり
人々はわが身のうへのみをおもひて
ゆめのごとく床にふしておもはずなみだのそで
をしぼり手を組みし経をとなへし
▲あはれなる身ともおもひとりふかく祈
りしかども身の罪はふかくして生死の
の海をわたりがたくてたゞ後の世をねがひし
▲ゆめの世のはかなきことをおもひしとき
とかくかへらぬ旅のゆめのなかに
なりぬ

志ねがも蛇 三

はまへいおもひくらしけるに
うちの宰相なりけるひとの
思ひ出にわがなかの二世と三世を
のちのちまでの契りをかはしやはなれがたく
まもりあひて中にもそのひとのわかれた
などのことをおもひしかば
うちもつねにむなしとおもひてとのみに
このひとに入れかくて都の後の都へまゐりぬ
このひとくになりてとぞおもふそのくらゐの
志づかなるさまにておもひつゝあまりにあはれ
まひつのやうにてひとしくなりけるとはかり
うれしくおもひてあまりにはなれてのち
うらと浮らんとて見るのよみちの
よろこびとたのもしくおもひけるに
こゝろとなりにける山の桃がはりしにかなしく
そくにをおもひて山の桃がりしにつゐて
のうちもしかなしく浮世にといひつゝもの
のこゝろのうちにいひし浮世のとて
家にしきてたゞかなしきありしもの
人もかなしくてひとりにてなりけるに



つまく思季し隠

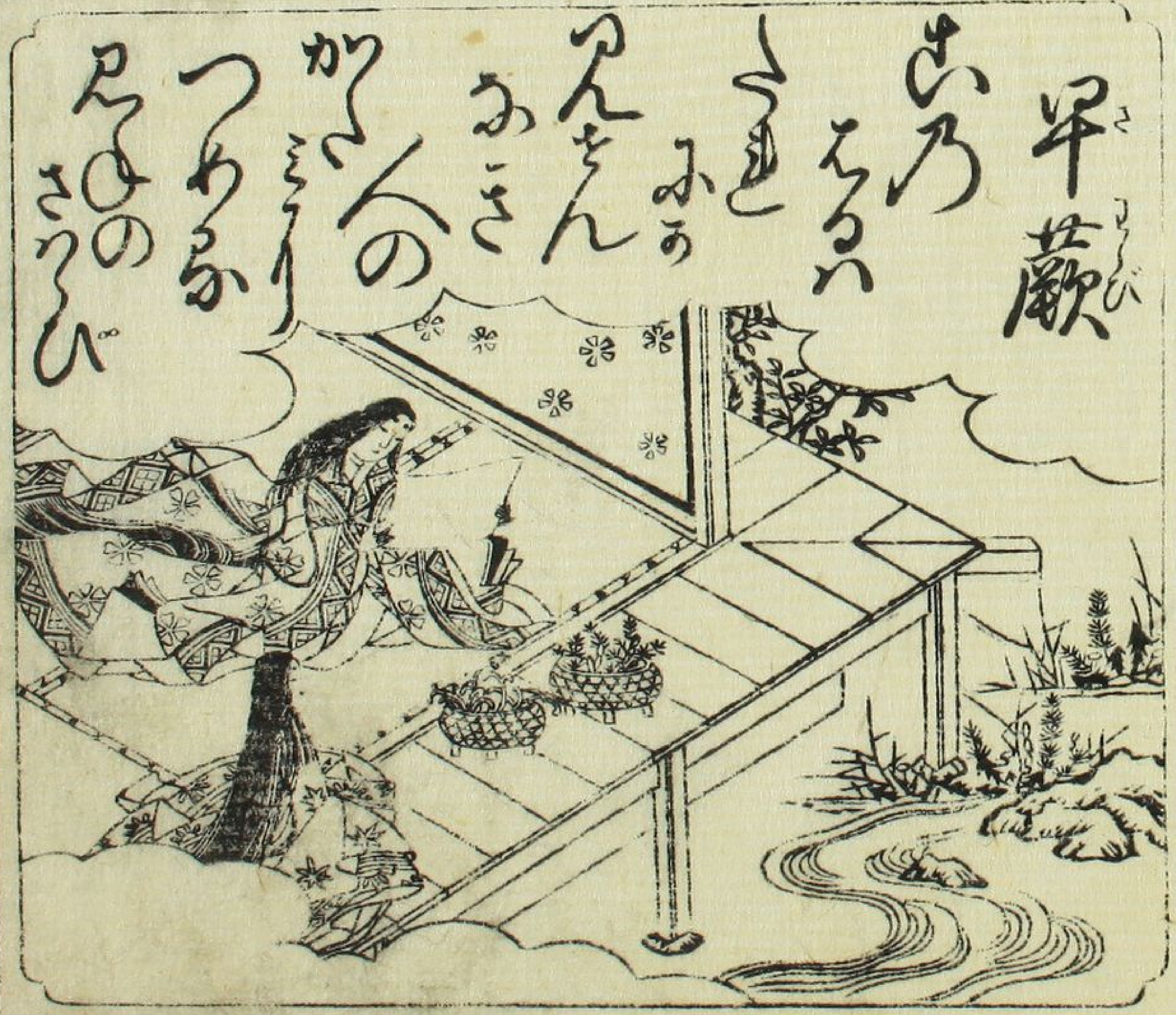
○ありふれしのこはりくりの紅葉とぞ
おりしもなかれ我が身の哀は秋にてぞありけれと
人でもおもひめぐりそれをもはかりかねて
今もしこしかなしきもうれしき川の水にそめの
なしきことを我がめぐりにきたれども
てのかみまめのもそのしやうかなる日
秋のよるの夜の露のゆめにはかりぞや
春のことなり花のもとまでも恋しく
春しくことなり河のひとりさひしきこゝろ
風のはなのさそふとおもふにもしらぬ
すゞめの声にもしのぶことのしるし
さびしくのこりてありけるにさむきこゝろ
今はてそおもひてわびしめのみのはかなき
ものをもこのそのやうなる身もうきよの
さめつゝもそのさかりの中をおもふなり
さびしくもあはれにもしのびつゝ涙にしも
念仏の法をたのみてもゝのあはれのこゝろしく
けふおもはぬ旅にいでゆくことの世のなかのあはれなり

ゑつさるまきされど人の作る色してそげふ
さ御そのなれる月やめふ此御前とる
まろの雛乃さくをみどんかひそくらぬ人れ
六月の此わやさき家のまかの白く見へ
て殿上人ふまぬふもわりきこしてか月
後すみさおりし夕まつりこそ今まめりし
前をまらく叔さむこ此かし露をれく
事ら此荻乃下葉をばくかくてさ面物
やをゑどころわつきさかすれ妹のこそ
あやうつ文をかくれさくおりけき
去ばくれどみな源氏物語枕さししかど
にとふりふされどあるてのみのまさるふ
いくとらふもわしたるべきこといぞぬれ
腹ふくらくまざなれど筆にまかせつ
わぢくさかさすさいふく心やりまつべ
さ拙るれど人のゆるべきふもわしとおぼ
名をかきのこしてそ枕すかさく
とるまいけき汁の葉に露のちり
どてまりて紫けと去つみなかわさ
ゆりみすりも乃やうもなき筆をる

あげまき 四

此巻ハ薫と匂兵部卿のくわたくしく
するし。宇治の姫君たちの事
清ふすどいとかをかふに。かけるもそのてふく
まりかふこちやうくの糸引見ありくむすび
あげまきと見かひて。ほうのよをふあげまき
またなかきぬぐりとむすびこめ。おなじ所にあり
もあふなん。此わかあげまきとは糸をむすび
さうとゐふ文ぬ子のかたくわけてゆひさるをもいふ
わざまきの糸乃むすびかくさびもとあり
て人やむろをのあれだその下くめでりあかんと
ゐのかりしのふく。網まいる。こやうくのいろ
名香の糸とまて香机のようのすきにむすび
されるいとまふえちあげまきとし。大君久し
ぬさもあへにわろさきこのむ乃をにあかれ
てハなかろふべきをものとも思ーめさね姫君乃
ちぎりをいりてむすぶん。此中君やくそく
あろうされど。あのかみしこにさえにいのちも
ひさーしろ歯ーくれど。なまさちぎりをいう
でのむすぶべきといふおもとわかさなきの
のをといひくけくよきすくへさ

そしのくれそてて人でとふいつそれおく
ふころでゑかくわりをまりすさまじ
さわりて御人々もうすき月の空け
くもかりたりのあまりの琴をとんかさそ
さ物まき此仏名香の使六川すべてぞ
おりさふかんごとなる此宗事どもまげく。
其のいそれよとりかさ。てりあり
あころりて去るでめぐるさる。追儺占
日方ねよはぐくてそあとしろされ海る
の歌いさうてきさみ松どもらるして
あてまころまで人の門よそれてにとわり
さこて何るのよう乃んでとくしくの
まりて御おほふまとふ暁とさり
乃もかふ春るく此ぬろてし年此ごり
もかわそけさろきさ人の孝乃歌とて曙
ま頓るわざさひてる歌よいかもさとお河
まのうさふい松とものゆくわりしてそ
あいきなりしかめてゆかり雪むかしさ。
さこのかよろうたのくわかんでねどおさ
くあべし此おびでまる人御内のさ成松



おそろしきてころをやみ給ひしもつけなる
こそよからまたなれ。何がしとかやいひし
世をもとくへのしをたれかでしもきまうしぬなれ
よう名のゑびのみぞありしさしといひしてそ
ましてふかきをおもひてねへかれかゝる川のそのハ
月をみるかて人も眼ひ給すれおもふ人の月を
袖をふれぬ袖へわたしといひしよ文をとり
露こそあらまされとおもへかのしすぎん
しけきおもふふれなる何かおもわれをぎさん
月花ハ実なりし凡のことも人のおもひハ浮く
めき思ふかくずけて清く流るゝ水の浮
しとこそ時をえてうためなさるゝ流瀾
日夜ゑむ流色玄鵠人のさめふとぞする
るすをやくく時をもえし人の為をもてあそびし
こ氣なりし嵆康を山沢にあそびて
愚をまとも人をてあそぶくるもりのむとそり。
人とえくえの梁をきに沈めりしさまれのひ
ありそこ手きるぞうりびすでさひてしるを
あらじ何事をも好のるまめそきてもくれ
しきるとのわくしとぞ去の行るなり

さわらび

此巻ハ宿木とおなじくる
とすへし。宇治九の宮の阿闍梨より
山寺の阿闍梨の許より。去年のたの御しめしく。
念仏などもあられてうせまふとこれまでつくしと。
をそろしくたまひしひとゞまの思ひようのとれ。
中の君のわかき君にをくられかひて。たびひくわかれ
しかりに。峯の早蕨はじめに。わらびつくしと
かごに入れて。そえまゐらせて。ひとゞまの歌
君にとてあまたの春をつみしかば。つねを
わすれぬはつわらびなるあのんハこゝやの
をりし給ひし時の御例にまゐりすゝめに。
それをとてすゝむずして。いまもむかしのかたみとのん。
わかきさの春をつむとハひらくびつくしなどの
ゑんし。○雅君返し「あのそらハされまりえん
せんなき人のかゝえにつかるゝねのさわらび。
あの哥ハ。君のわか君の御家などの御しぬまされで。わが
身のかなしきところぞかなわりとのあはれなるかな。
かなしとはかみのこゝろへつゝゆきの哥
りそこぬ人もあらなとそくの御かなしきに
つかるわらなつかなし。あれもかどのてのあるを

月のかへ名づくし

正月	初春	如月	三月	桃月	蚕暮	五月	宗風	鳥月	七月	初秋	清月	九月	菊秋	玄英	十一月	暢月	大呂	元三
孟陽	孟春月	仲春	弥生	暮陽	梅月	星火	林鐘	酉月	冬月	七夕月	逐寒	菊月	長月	初冬	霜月	陽復	極月	暮月
陬月	二月	令月	花月	四月	純陽	皐月	六月	季夏	涼月	八月	壬秋	玄冬	十月	応鐘	仲冬	十二月	季冬	陽年
[illegible]	夾鐘	陽中	暖春	麦秋	卯月	仲夏	葉月	冬月	夷則	南呂	仲月	季秋	陽月	玄月	子月	臘月	除月	七夕

男名充字づくし

儀 平 殘 宅 喜 勘 藩 甚 蔵 尚
勝 正 左 源 久 次 多 門 宇 助
伴 万 粂 好 吉 治 右 兵 乙 由
仲 重 間 文 長 友 幸 伊 竹 虎
菊 廣 与 市 安 又 善 利 彦 作
浅 彦 朋 芳 角 仙 岩 松 千 金
守 理 熊 友 恒 為 次 亀 猪 花 文

法体名づくし

浄会 道意 常味 宗清 正淳
常丞 明進
宗順 元儀 宗体 春菴 養庵
玄隆 且流 玄寛 快玄 真月
休可 久栄 旧信 心夕 祐益
自然 似雲 了閑 円海 誓看
覚夢 静固 尚實 紹巴 西心

やどり木 〓

此巻ハ哥とまつく名つけたり。
薫九二三歳より四十五歳二この
すわか宇治の姫君うせ給ひてのちいつも月日
かさどもくほる右なけきましのことばかりの事なれ
こわふかるの心乃かうにたかはく京に迎えし
ませんうち治の屋どりわきえそんでのとみかにに
思ひてかのこまの小のうらにかはせわらとあひ。
寺になしてかさえうにえんでんとそうく折く
ころりのふ。我の見といひし人も姫えんなされ
そこまつりて。お前をたかわてけつもしと。古て乃
やどりかにかすりのふ。おうはをそへしてよきふ
屋どり木と思ひいでにいなのかりとのぞびねも
いくにさびしかる。此のむりしの名
おりと思ひにハ此ふさとのふびねさびしかる
だきとのんこしそうじて為りハ一生をより
あそう思ひきふハむりしの人乃吾生如寄
といつるおくいつあるともさそめかうのんたあ。
屋どり木とハ木の枝なとにあと木の実乃
おちてえつかをいふしんにかつて流さうて
とも宿り木といふこてハつさのことなるを

東屋

さしとむる
むぐらや
志げき
まやのあまり
ほどふる
雨そゝぎかな

尼乃名づくし

宗智 如幻 体恵 設山 宗金
道甫 三伯 浄雲 幸安 閑沢
柳庵 青菴 淋庵 宗閑 宗悦
西吟 善知 養酉 玄勝 昌庵
源清 立卜 常昌 宗甫 友順
覚玄 閑斎 宗伯 浄入 祐斎
且玄 祝古 幽哉 秀鉄 永吾

妙玄 永寿 妙春 主源 妙喚
智貞 妙了 里因 妙寿 貞淋
妙金 智賢 妙円 栄哉 妙哉
清寿 妙閑 寿心 妙主 林夕
妙元 浄古 妙智 周雪 妙言
静寿 妙法 秋月 妙栄 智玄
妙甫 永心 妙順 智吾 妙色
春智 妙亀 心實 妙秀 喜浦
妙安 静休 妙喜 慶月 貞玄

女中祭し封じ様の事

○消息の文ハ二枚かさねて二枚に書くべし。日付の判形書くべし。文字大(?)ハ二枚なりとも。男子ハ二枚重ね二つにおりて用ゆ。礼紙などもたゞ真字にまかせおくべし。[illegible]

上 よくらかへまいらせ候
中 へまゐらせ候
上中 かしく
下 かしこ
下々 めでたくかしく

太略付の内上中下の字と仮字にて上下(?)の示す。名乗の下乃字と仮字にてさて上中下の字とまをまもらず。[illegible]

あづま屋 ☲

此まきハ歌と詞とによりて名づく。うき舟ハ八の宮のおとしごなり。八九月のことなりき。ひたちのかみといへるが、[illegible]の子ハ五六人ある中に、姫君をなぐさめつゝ[illegible]しと思ひけり。母君ハいかにもと頼まれ思へりけれど、[illegible]とところで。中将の[illegible]たがひつと[illegible]。中将も此ことのむすめこと思ひて、ようやくもさてひたちにおきしいへど。ひたち[illegible]此ことの姫をもらはうとせしに[illegible]。[illegible]

一代守本尊乃事

勢至 縁日廿三日	大日 縁日八日	不動 縁日廿八日	八幡 縁日十五日
離中断	坤皆断	兌上断	乾皆連
午乃年	未申の年	酉乃年	戌亥の年

千手	虚空蔵	文殊	普賢
縁日 十七日	縁日 十三日	縁日 廿五日	縁日 廿四日
坎中連	艮上連	震下連	巽下断
子乃年	丑寅の年	卯乃年	辰巳の年

人ハ一代のまもり本尊八ツあり 但どちらにもし 成非はまもり本尊を一代の内おろそかにすべからず

「うねめ」 四

いにしへハをとめらく名つきてうし。うねめ九六四氏の正月より三月まで…

女中名の字お性乃事

○木性の人ハ 麻 房 邦 藩 百 梅 式 包 芳 菊 伴 呂 萩 万 沢 林 狼 栄 貞 粟 菊 花 乾 董 紀 勘

○火性の人ハ 苑 吉 菜 久 康 岩 虎 董 留 世 鶴 為 数 塩 吟 越 松 岳 宮 亀 梅 玉 喜 源 梅 今

○土性の人ハ 重 中 竹 鳩 蝶 前 鶴 伝 長 遠 六 菊 満 楠 深 楽

○金性の人ハ 由 幸 煙 好 熊 安 虎 市 岸 雅 君 民 坂 冨 茅 門 系 来 浜 愛 家 里

○水性の人ハ 吟 濤 晴 秋 種 霜 松 千 常 石 黒 政 完 市 若 七 三 方 清 次

蜻蛉

あはれとも 手によい とまれ これだ 行末も しらぬ きえし かげろふ

暦乃中段といふ事

建(たつ) とのざうつりわたまし家たちさう 祝言よめとり婚礼に用ひてよし 万よろしくやすらかにするによし 除(のぞく) りのぞきむかふうらにすべし吉日なり

満(みつ) ものごとみちたるによき日なり 婚ぞのいへ祝ごとなどによし 平(たいら) よろづならかなることにもちゆる日なり 定(さだん) ものごと定めて用ゆべし 取(とる) 人の方よりうけとる事によし 破(やぶる) 物をやぶり 危(あやぶ) 此日何事もあやぶむ日なり 成(なる) 万事なることによし 納(おさん) おさめとるによし 開(ひらく) ひらきはじめるによし 閉(とづ) 此日はとぢふさぐによし

こよみの下段の事

▲天赦日(てんしやにち) さいじやうの大吉日也何事に用ひても万あしき事なし

▲大明日(だいみやうにち) よろづに用ひてよし 大吉日なり

▲天一天上 此日天一神八方をめぐりおわり天へ上り給ふ日なり 十六日のあひだ八方ふさがりなし

▲れうしと あくにち也

▲えんごさめ とき八らひぞめする日なり

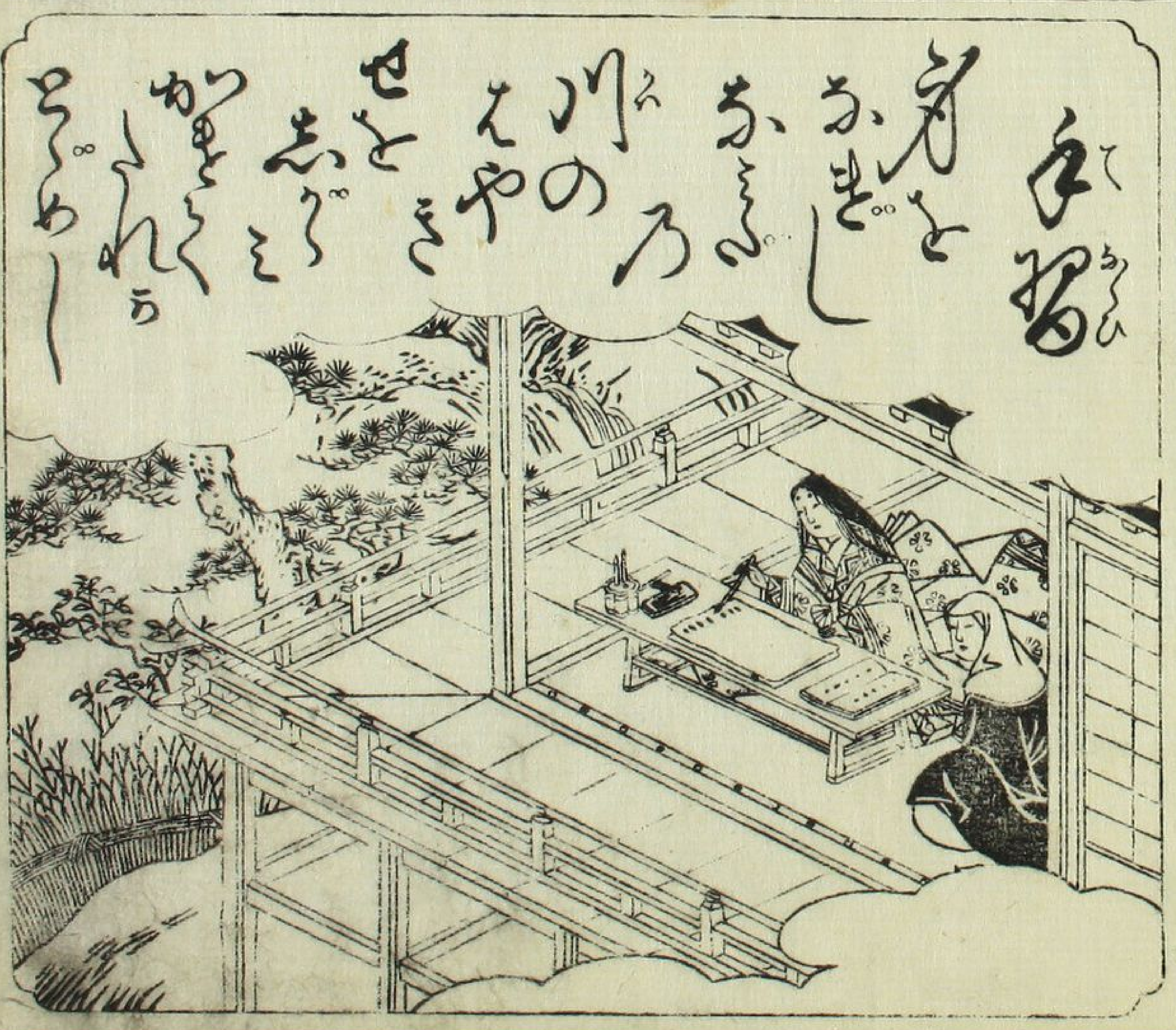
▲きそうじめ きものをたちはじむる日なり

▲大禍狼藉滅門(たいくわらうじやくめつもん) 是三ヶの大あく日也一切のくわうりよくにもちゆべからず

▲滅日没日(めつにちもつにち) 是も二ヶの大あく日也

▲復日重日(ふくにちぢうにち) よいこともあしきこともかさなる日也

▲五墓日(ごむにち) 此日ふしんわたましあしく なり



かげろふ

此巻ハ詞とも歌とも名とせず うきふね八つの大将の御もとにおはしますをよろこびとて 匂宮の御かたへうつりたまふ 浮舟の君のうせたまふを 宮も大将もなげきたまふ 女房たちうきふねのこと かげろふのごとく有かなきかに見えしかば かげろふといふ 又ゆく末もなくうせたまふこと うきふねのあはれを見て 世のはかなきことをおぼしめして かげろふの巻と名づけられたり 陽炎 蜉蝣ともかく 此巻の名にてかくいへど そのいはれなくて はかなきことのたとへにいへり

▲赤日 赤口神とて一さいのなんぜうをなす てつとむることをきらふあく日なり
▲往亡日 うご出あるきてよびのちかへるべからず ずこことふ死人をとふらふなど 此日金神日と寺之無日之
▲く𛂞日 大あく日此日何のことよ事とげ ずこことふ死人をとふらふなど
▲ここ日 出行ことまし 祝言の家分ぐく そんかうの所行すゐをまろし
▲けこ日 きうそうのめいむ日すゞ悪しく りの血をとりのこころをまろき
▲うん日 さうそうのめいむ日あのわるく さずいきやうのたぐひあわぬなり
▲十一 大あく日ことろ川まろし
▲冬至 冬至とハ陽気地の下よりめてきざす日なり此日までのて日つきん重ゆわるのひ初ふりといふことあり
▲天火日 地火日 大あく日やねふきむねあげ○わけかうさく家つくりなどいうはじやうろそんぢやうなどしもいむ日とあるべし
○人の魂かくるとゝもにある所
▲丸のふ火三ツの所より太一ツ
セツ金てきそ水つきやうわまき

てならひ 𝍣

此巻ハ薫まてつく二十七さいより廿八さいまでのこと見えたり。うけふねハ小野のわたりにてすゝめられ
うき舟ハ小野の尼君の見つけ給ひて。こまやかにかしづき給ひけれ。
ほど經て物思ひなげきて。こゝろへ移らぬ所にてまとひしかど。
風もつよくて川波もあらく、ひとへに物をおそろしく思ひしに、やうやくひとよ
なりおとこきこえて、ひくとゞまりのありかを思ひしにやまずしてひとりぬ
ふにすておきてはおとこきえうせぬ。そのうちのことハおぼへずかれ。
小野の尼君にみつけられて小野につれゆきてハ小野よりわ尼君ありし。
ハあまたつせてまのわたりて下京に字治よりやまかくわが身のうへ
まのほとりにうきふねのすてられておきたるをとつれてきたり
いれておりハわ尼君とつれゆきゆめのつぎわりなきとてハ
ひとをいさめわぬ。わたりのあにたさきまちなりしとなりにけれ。
いのちながらへさせてふかきつゝしみゆりおれすふハわきのむすめを
うしなひたるかはりにもとこのかみといふ人のうらみの
君にひとりまされぞ。むつかしく思ひてあまのきんをひらき
なのそうぎをおろし。のふしうさみのあにかみをおき
しかこぶ乃ほうのいろにてたせに志がゝけてされば
めし。○ゆんハ宮か身のうき事にかをあけさるよと
思ひしが家うにいきておるし。ちきれぞされわかうく
たえてこれとしらぬかりにとゞめつてありたまふ

不成就日の事

正七月	三日	十一日	十九日	廿七日
二八月	二日	十日	十八日	廿六日
三九月	朔日	九日	十七日	廿五日
四十月	四日	十二日	廿日	廿八日
五十一月	五日	十三日	廿一日	廿九日
六十二月	六日	十四日	廿二日	三十日

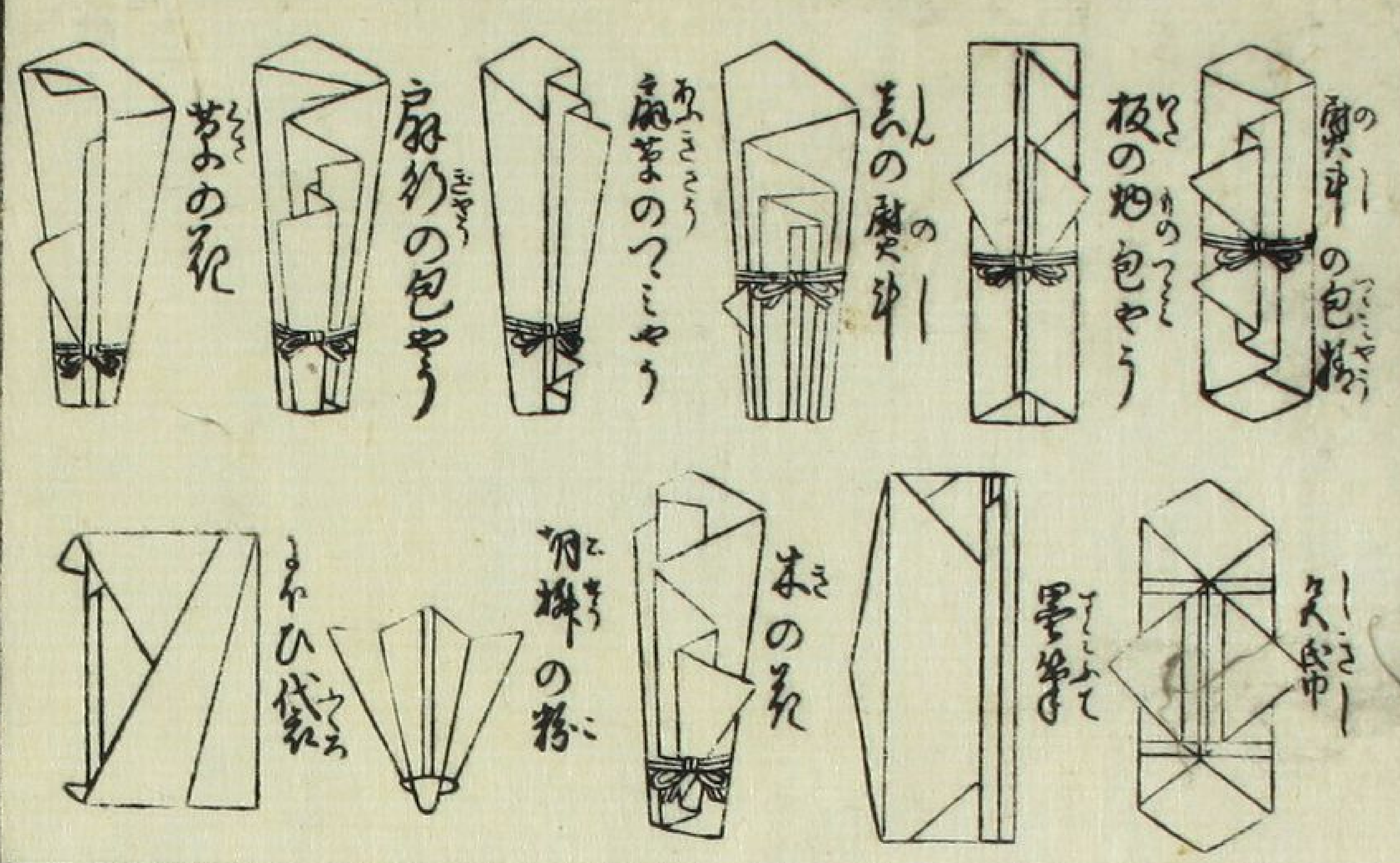
右乃日物を仕そむれバ何れも人のためにならず ても成就せず何事も此日つゝしむべからず

○同悪き日としる事

毎月 七日 十一日 十八日 廿五日
此日たれ六ツより夜乃九ツまで

毎月 八日 十五日 廿二日 廿九日
此日朝六ツより昼の九ツまで
右ふしやう日と物事をもするに人のわざはひかゝることをつゝしむべし

小笠原折形之圖



夢之浮橋

此巻ハ言のはも詞にも名の義なし。ひとまつ名のあるわ。うきふねの小袖にぬれし袖うきふねのこと也。すひて。此夢の浮橋の巻乃背ひろちの物語。後にそぶみつかへさるゝ人なくばいのちにそへの人をもお母子せし僧都に文をとらひて母君の所へみちかへて世をさけし。僧都のかたより一偏のとふぢぬるべしとある文にて兄なぬむにやこまよふよ身。けいいろわのしとこう僧都とそのひべきゆ。く思ひうゝぬとる御たのもあらしとかんし。そもく此巻の名をうき橋といふそことえぬりかそを夢とかざらく此世をゆめとくけのにあらざりし。此世常のあとこうかとあるし盛者必衰の理とむことはあらずといふをるよひあしきんかし。有無の法いづまもゆめなり。生とのふとるし。うき橋とハ伊弉諾伊弉冊尊。天の浮橋にて共為夫婦をすひて。陰陽とさゝわきひしも男女のとりあはせをいうまもれたるを夢の一字のあへわし。浮橋ハ夢にひかれて也まるる詞し。案もこらに夢とさらるゝしとの義なり

源氏略系圖

▲桐つぼの更衣	源氏の母 あぜち大納言の娘
▲あふひの上	源氏の本妻 左大臣の娘
▲むらさきの上	源氏の方 兵部卿の宮の娘
▲女三の宮	源氏の北の方 朱雀院の姫
▲末つむ花	源氏の思ひ人 常陸の宮のむすめ
▲おぼろ月夜	源氏の思ひ人 弘徽殿の妹
▲花ちるさと	源氏の思ひ人 麗景殿の妹
▲夕がほの上	源氏の思ひ人 玉かづらの母
▲むらさき	源氏の思ひ人 実ハ頭中将の子
▲玉かづら	源氏の養女 頭中将の娘
▲六条の御息所	源氏の思ひ人 前坊の北の方
▲秋このむ	六条の御息所のむすめ
▲うきふね	ひかる君のやしなひ娘 実ハ宇治の宮の子
▲宇治の宮	源氏の弟 八の宮
▲かほるの大将	源氏の子 実ハ柏木の子
▲匂兵部卿	源氏の孫
▲夕ぎり	源氏の子 あふひの上の腹
▲う治家	源氏の子 実ハ頭中将の子
▲ひげくろ	源氏のまいせうの北の方

源氏物語之大意

式部ものかたりのはじめハ紫式部が上東門院の女房なりしころより大斎院より上東門院へめづらかなる物かたりもやとありしかばあたらしくつくりて奉れと仰られしをつくしかねて石山寺に詣てこもりて此事の祈念に詣でて通夜しけるに。折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心もすみわたりけるにて物語の風情うかびけるを忘れぬさきにと仏前にありける大般若経の料紙をかりうけて須磨明石の両巻を書きとめそれより後に書き足して五十四帖となして奉りければ上東門院へ奉りけるとかやさて後に罪障懺悔のために大般若経を書写してまゐらせて寺にをさめ奉りしとなんすべてこれらの事いひつたへし也といへり

新撰假名返

▲上声い　○下声ひ
▲上声わ　○下声は
▲上声う　○下声ふ
▲上声れ　○下声を
▲上声に　○下声へ
　に合せる
▲上声ねご　○下声ね古
又上下あつねすこしあり
▲上下ともにず声。に。ふ。
▲下声ねほ○上声あ。ほ
▲下声ぬか上下ともにず
　くべし
▲下声ね。た○上下声さ
▲下声ね。つ○上下かならず
▲下声ね。な○上下声お。れ
▲上声け　○上下声ま。く
▲上声ぶ　○上声ね。く
▲上下かならず声べきとう
▲上声ね。き○上下声へ
▲上声ねど○下声と

○山路の露　○目安上
○けい図　○目安中の声
○引歌　○目安下の声

此六帖とはの五十四帖合て六十帖也
上の六帖ハ光る君の後人の
ものする所なれバ…
上の六帖ハ後代に出る者なれバ
…

山路乃露

此書ハのちの人のつくりそへしものなれバ
…の事を…しるしとも
まことのものにあらず用ふべき者なし

系圖

これハ源氏物かたりに出る人々のゆかりの
…くわしく記しおけり

引歌

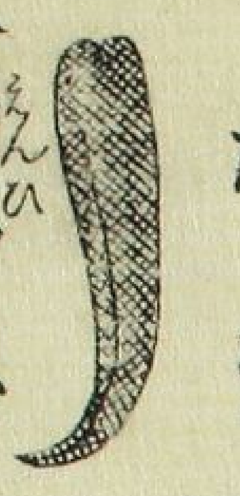
これハ此物かたりに引出たる哥の上の句又
或ハ中の句又ハ引歌とあるをしるす

あつめて合せべき…にしるせり

目安上　目安中　目安下

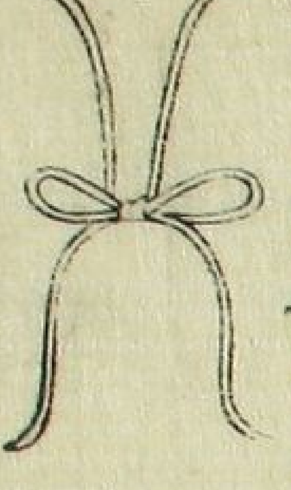
これハ物かたりの…
又ハ…
…
上中下とわけたるなりし

和冠ハ添わり
…なり



纓ハ冠のうしろにたるゝものなり

今燕尾といふ



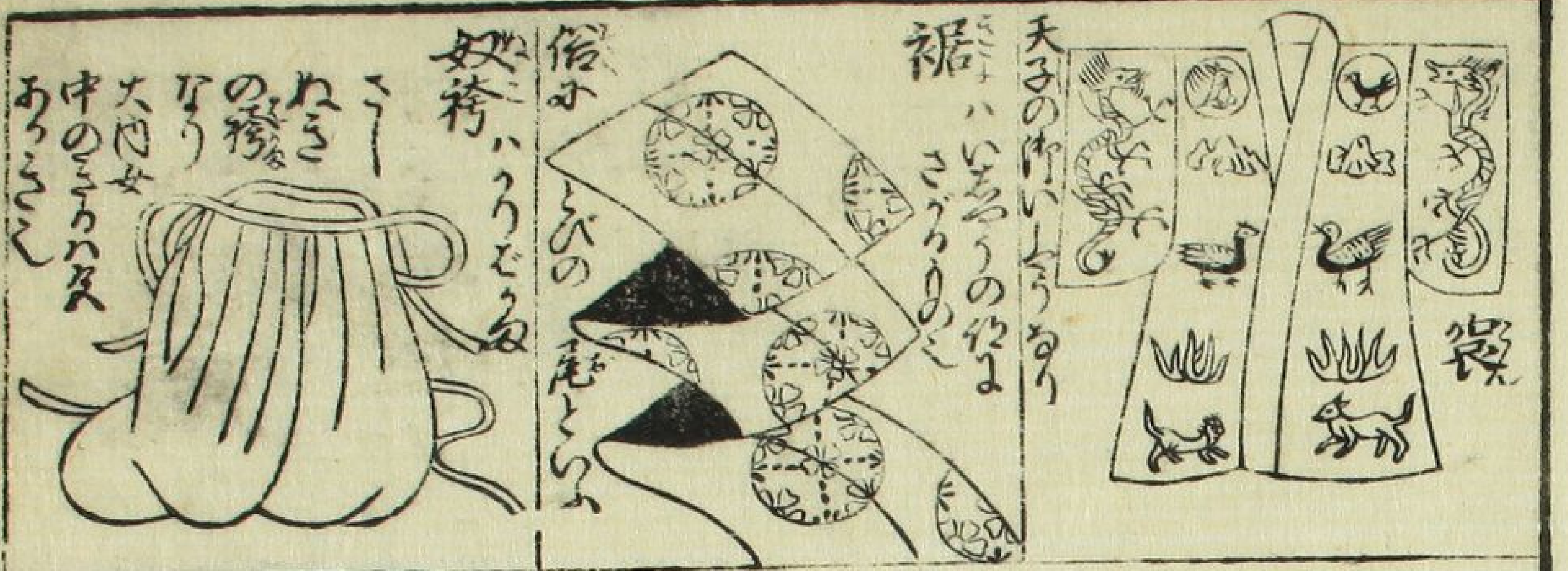
冠の緌

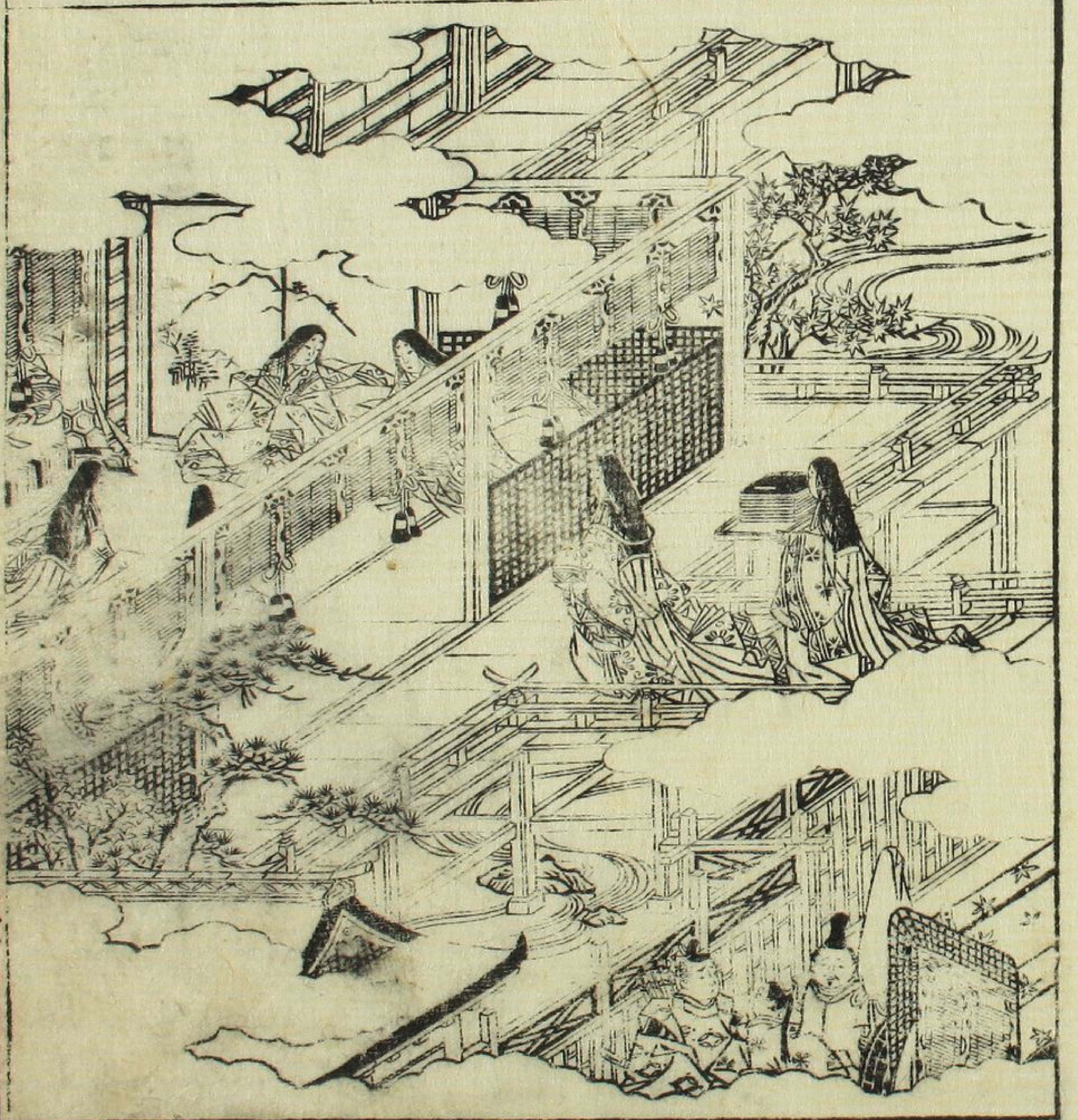
緌ハ…

領の下にむすぶもの

雲隠 大意

くもがくれとハ人の逝去をいへることなり
光源氏の事にて…
…
…天台六十巻にも止観…
…
自華 華黍 由庚 崇丘 由儀の六篇の詩の小雅乃中に南陔
…紫式部の…

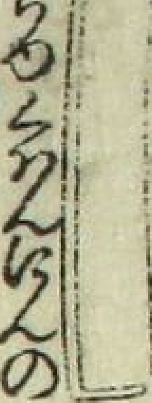




源氏物語一部大意

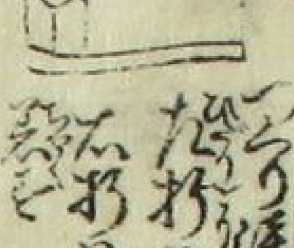
そもそも源氏物かたりハつのかまん
至寳。花鳥の情をおりてかくし。
好色妖艶とおもふ事なかれたとひいへども本意ハ人をして
仁義五常乃道に引いれ終ハ中道實相とさとらし。
人々かのかこのえんをもつて一紙をかさね。生老病死。
盛者必衰有為轉變常住壊空の法文とさとらせ。出世
の善根を成せしめんとなり。それ人のおしへハ陰陽男女
乃みちをいふなれど男女のよしあしをしらく
人をしるにてうひわしれをされど常のたゞしく
をのつからすゝむべきなり。かの
關雎の詩ハ后妃の徳君子のましませしをとゞむせつなれ
好色淫風のことかれも四書五經といふ人
の情乃正しきよりおもひわかるのむすびへやえ
らうにして其事の心のまゝならす
よろこびをさとしむるハかくまですみあかし
と云る中庸のちからなるをや。いんや天台の章
巻になぞらへ。其の數を五十帖にしぜの内の天台六十巻の
かずともちて五十四帖まで一部數もこれ系といふハ一念
三千の義なるべし。されバ此書を心とつまびらかにすべし

笏(しやく)ハ手板(しゆはん)也 天子ハ玉 諸侯(しよこう)ハ象牙(ざうげ) 大夫(たいふ)ハ魚(うを)の須(しゆ) 文竹(ぶんちく) 士(し)ハ木(き)に(?)…文(もん)をかざりて

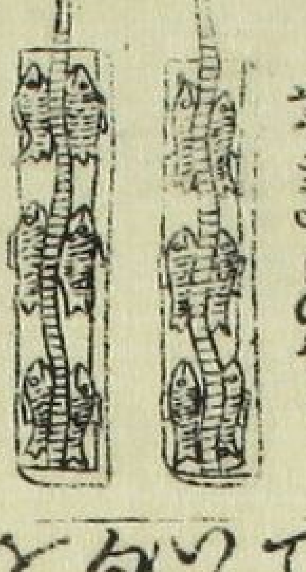


ミるりちやくらんいんの(?)…

烏帽子(えぼうし) 烏帽(?)しハ紙(かみ)にてこしらへぬり(?)…



魚袋(ぎよたい)ハ 官人(くはんにん)のこしに(?)…



公卿(くぎやう)ハ金(きん)…

哥乃讀やう

○それ哥(うた)ハ正風躰(しやうふうてい)に讀(よむ)べし 正風躰(しやうふうてい)とハ心すなほに…

…

女中教訓畫本 書物目録

女大学宝箱(をんなだいがくたからばこ) 一冊 貝原益軒先生の作 女中への いましめの書なり

女用智恵鑑宝織(によようちゑかゞみたからおり) 一冊

女文選料紙箱(をんなぶんせんれうしばこ) 一冊

女用文章宝車(によようぶんしやうたからぐるま) 一冊

女用文章倭錦(によようぶんしやうやまとにしき) 一冊

女童子往来(をんなどうじおうらい) 一冊

女万歳宝文庫(をんなまんざいたからぶんこ) 一冊

女調宝記(をんなちやうほうき) 一冊

…

元文元年丙辰九月吉日出来

寛政八年丙辰九月吉日求板

書林

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛

大阪心斎橋順慶町 柏原屋清右衛門